

インダス文明の形成とバローチスタン文化 (2)

—新たな研究視点の模索

The Formation of Indus Civilization and Balochistan Cultures:
New Perspectives.

宗基 秀明

SHUDAI Hideaki

研究史、とくに印章研究に窺われたインダスの文明形成に至る文化・社会状況を探るための論点は、次の4つであった。①文化編年の設定。②バローチスタン丘陵における文化集団の社会的凝集性の証左を考古遺物に見いだせるか。③交易と都市化の関係を単純な経済・社会の「開放体系」概念だけで捉えきれぬのか。すなわち、「開放体系」の根幹である交換・交易の形態は、バローチスタン丘陵の社会とインダス文明社会とで異なるのではないか。④バローチスタン丘陵の地域拠点集落、または都市は、なぜインダス文明を前にして衰退し、一方でバローチスタンの土器文様などの精神世界の表徴をインダス文明、または平原部にあるシンド地方の社会は受け入れ、導入したのか、であった。第1点については、すでに前号で示した。今回は残された3点について具体例を示しながら、筆者の見解を提示したい。それによって、今後のインダス文明の形成研究に対する新たな視点を提示したい。

バローチスタン丘陵での社会的凝集性

社会的凝集性を考古学資料から窺うには、後述のように一定の権力機構を示す遺構やその配置、また社会的心性を示す遺物やその出土状況を探ることになる。そして、社会的凝集性が高まった空間が都市といえよう。ここでは、最初に都市とはどのような社会であるのか、インダス文明都市を例にあげながら本稿での規定を示す。その後、具体例の検討を行なう。

1 都市とは何か

J. ホークス (Hawkes) は、都市を規定する諸要件や都市の提供するサービスに関する議論をL. マンフォード (Munford) の言葉を借りて次のようにまとめている。「都市の勃興に関して、農民を生産に駆り立てるエネルギー源として首長制に発する、王権をいただく制度の存在を考えている。宮殿の王や神殿の神官、また王家の穀倉の管理人たちが高い壁にかこまれ

て住んでいた城塞とは、彼によれば都市という細胞の制御中枢なのだ。彼にとっては、市場（経済センターおよび機構）ではなく、城塞（行政・祭祀センター、および機構）こそが、古代文明の中心を象徴するものであった」[ホークス 1978, 第1巻: 26] (傍点とカッコ内は筆者による)。マンフォードによる古代都市の定義は、「王権」という権力構造の制度化を前提とし、「城塞」という行政・祭祀センターの存在を第一義的に重要視するものである。城塞が都市の象徴的存在であり、中心であったとする理解にのみ注視すれば、彼の都市の定義は、都市社会が形成された後における現象面の後付けと解釈されかねない。ただし、都市とは自己拡大していく性質（内爆発）のものである[マンフォード 1969]、という彼の著書全体を通して導き出される理念は、都市を動的に捉えようとする点で、魅力的である。それと同時に、都市成立の要因として、何が都市に自己拡大していく性質をもたらすか、との模索を迫る。

都市を定義する様々な要件のうち、情報と物資の集積をもたらす交易、人々の集住をもたらす信仰のセンターとしての機能、そこに暮らす人々がそうした機能を遂行するために生み出された階層性を明示する住み分け、さらに、それらを可能ならしめる行政機構の存在、すなわち都市計画性の存在が都市を規定する要件と考えられるだろう。以上の議論から、[宗基 2012]において都市の要件として次の3点を挙げた¹⁾。

1. 情報と物資、そして信仰センター機能の存在
2. 集住地における階層性を明示する住み分け
3. 都市計画

都市を規定するこうした要件を大津・常木・西秋[1997]が示した考古学遺構からみた都市規定の3要件に照らすと、次のように考えられる。まず、①食料の供給を示す大規模な倉庫は、物資の集積というセンター機能に含まれ、②精神的充足をもたらす宗教的機能は、信仰のセンター機能に含まれる。残る③安全の確保に関する防御施設や王宮については次のように考

えたい。

集住地における住み分けに、それを現実化するための権力機構の存在が示されるが、都市は安全確保を主導的に執行する「王」という強力な権力機構の存在を必要条件としない。そのため、王宮の存在を都市規定要件に入れることは保留としたい。また、集住地の防御施設としての城壁、または周壁についても、都市社会の強化と継続のための装置であると考えられるため、やはり保留する²⁾。

以上の都市規定要件に照らせば、インダス文明の大規模遺跡は、度量衡の統一を表わす分銅の出土などによって、交易センターであったこと、そして城塞部の存在に示される住み分けと都市計画を指摘できることから、十分に都市機能を担っていたと考えられる [Lorenz 2019; Petrie 2019; Parikh and Petrie 2019; Wright 1978, 2012]。その上で、インダス文明都市遺跡の特徴は、市街地における給排水施設設置、それに高さ 5m 以上の基壇上に聳える城塞部と市街地との隔絶性にある。また、近藤も、インダス文明の大規模遺跡に明瞭な神殿施設が認められていないことや、インダス文明最大規模遺跡の一つであるモエンジョ・ダローの市街地に周壁が発見されていないため、ビータックが示した 9 つの都市要件から「宗教上の中心」と「避難・防御の中心」について保留しながらも、ほぼ満たす、としてインダス文明に都市の存在を認めている [近藤 2008]³⁾。

本稿では、「王」や「王権」の存在を除いた都市規定要件を定め、インダス文明に都市の存在を認めるが、「王」や「王権」を支える権力機構である「国家」と都市には、どのような関係を想定できるであろうか。

2-1 都市の相貌

国家と都市

国家について、C. レンフルー (Renfrew) と P. G. バーン (Bahn) は、E. サーヴィス (Servis) の社会分類を基にして、宮殿を居所とする王の下に組織された都市を拠点とする官僚組織が、寺院・神殿などの公共建築物を築き、それを可能ならしめた階層化社会が国家である、としている [サーヴィス 1979; レンフルー、バーン 2007: 179]。簡略に言えば、国家は、都市を拠点として成立した最高権力者とその官僚機構による統治形態であり、B. トリガー (Trigger) が言うように、国家は都市を前提とするが、都市は国家を必要条件としない、と考えられる [Trigger 1972]。すなわち、「都市イコール国家」とはならず、国家を形作らない社会にも、都市は存在するのである⁴⁾。

国家をどのような規定で捉えるのか、それはまた首長制などに見られる社会形態とどのように異なるのか

について、多くの議論がある。

社会進化論者を自認する T. アール (Earle) は、国家について擬制的な血縁に基づいた人口数千から数万の階層化した社会を組織的に統治する地方政体である首長制社会の発展形態である、とする [Earle (ed.) 1997: 14]。しかし、首長制社会は「経済的権力」、「政治的権力」、そして「観念的権力」の三者の相互関係によって、政治的に強力な集権化した組織を持つ場合もあれば、分節的で不安定な政治体制でもあった、とする。そうした首長制社会において、「資源開発と交易を統括する権限」が首長権力の源泉であった、とする点に注目できる [同書: 204]。

こうしたアールの見解の前提となった議論 [Earle 1987] を念頭において、K. クリスマンセン (Kristiansen) は、首長制と国家の間に階層化社会の存在を想定し、次のような社会進化過程を提示した [Kristiansen 1991]。階層化社会は、首長制社会から国家社会への移行期であり、アールの言う首長制社会の首長権力のうち、資源開発や交易が首長による搾取へと変化して、社会変化を促す。そして、首長制社会の経済基盤が集産的である場合、社会は領域的空間を治める集権的な階層化社会として現れ、官僚制を備えた国家へと向う。他方、個別経済による首長制社会では、地域分節の階層化社会から地域分権的 (封建的) 国家が生まれる。ただし、両者は排他的ではなく、併存が可能であり、また相互に入れ替わる可能性がある、とする。その際に、アールが示した「観念的権力」に遠距離交易が果たす役割は大きく、他地域社会との接触が世界観の変化を促し、首長の権力に変容をもたらす、としている [Kristiansen 1991: 26]。また、儀礼的建造物の建設にあたっての人員動員に際して、領主権を行使した支配に基づく場合は国家であり、社会的義務、または互惠的強制による場合は首長制である、とした [同書: 22]。しかし、労働力の動員がどのように行なわれたかを考古学から探ることは、文字資料をふくめた遺物アセンブリッジや出土遺構相互の状況に恵まれなければ困難である (図 1)。

J. ジェイコブソン (Jacobson) は、南アジア考古学の立場から、アールによる首長制社会理論モデルや、それをより図式化したクリスマンセンによる首長制社会から国家へと至る社会変化を検討したいくつかの試みを、手際よく整理したうえで⁵⁾、国家の存在を認めうる考古学による 12 の指標、すなわち「文字記録」、「人口と領域範囲」、「専門工人や移住者などからなる社会階層化」、「彼らが作り出す製品・建造物や儀礼行為の定型化と統一を課す専門行政官・官僚」、「警察力」、「情報」、「市場システム・交易と商業」、「徴税」、「統治」、「宗教」、「軍事力」、「領域拡大」を設定し、検証

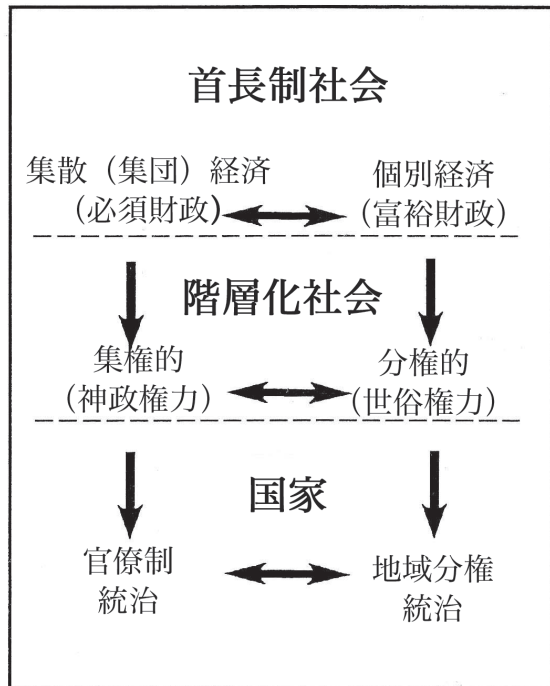


図1 社会進化モデル [Kristiansen 1991]

した。その結果、彼は、インダス文明の政治体制は、擬制的な血縁の紐帯を超えて、移住者をも含む集団の組織を長期に維持し、また長期間におよぶ社会の維持と凝集性を示す国家レベルの階層化社会、もしくは「初期国家」にあたりとし、インダス文明は国家としての社会組織を持つ文明社会である、と捉えた。さらに、ジェイコブソンは、そうしたインダス文明国家成立を可能としたのが、個人の超自然的力と結び付いた神話的特権に由来する「統治」理念であった、と考えている [Jacobson 1986: 159]。

インダス文明は国家か？

ポセールは、ジェイコブソンとは異なる見解を示している。彼は、メソポタミアやエジプトの古代国家形成論から導き出されてきた発展段階論ではインダス文明社会を理解できない、とするJ.シェーファーの見解を踏襲して [Shaffer 1992a] ⁶⁾、インダス文明は王を欠いた分節的で地方分散 (domain) 的政治体制である、とする。そして、インダス文明社会の特徴を次の6つにまとめている。

- ①中央政体、または官僚制は脆弱で、行政官は存在したとしても少なく、地方政治支配を行なう部族的組織であった。
- ②インダス文明の社会思想は、文明域内の各地域を貫いていた。
- ③工芸、交易が発達し、商人や工人、管財人、宗教者、吟遊詩人などが専門家としてそれぞれに

政治・行政を個人的管理として担っていた。

- ④国家にしばしば伴う権力の独占は、中央政体においても地方政体においても弱かった。

- ⑤住民の忠誠心は、中央に対する一種の国民的意識を内包させながらも、地方では血脈に向いていた。

- ⑥こうした二重性が常に分裂の危機として渦巻いていた (傍点は筆者による)。

ポセールは、古代文明の政体と社会組織は、定型的、もしくは一線的な発展段階論的枠組よりも、より変化に富んでいる、と結論づけ、インダス文明社会をクリスチャンセンの提示した「地域分権統治国家」であったと理解する [Possehl 1998: 289-290]。しかし、インダス文明国家は中央政体も存在する二重権力構造であったことを強調している。

インダス文明の政治組織に関するシェーファーやポセールらによる近年の理解は、王による中央集権が確立されずとも、複雑化した階層化社会が広範囲に、そして長期間維持された国家がインダス文明であったとする [Shaffer 1982; Possehl 1998]。

インダス文明の都市社会を、西アジアの古典的都市や国家とは異なる国家政体であったと考え、インダス文明以前にインダス平原の西方に位置するパロースター丘陵に展開した諸遺跡のうち、大規模な遺跡が文明、そして国家形成以前の社会の中心地であった都市と見做しえるだろうかとの視点が、次に重要な検討課題として浮かびあがる。その課題を検討するためには、アールが示した社会変化要因としての「資源開発と交易を主導する権限」、そして「観念的権力」と遠距離交易とのかかわりをどのように把握するかを探る必要があるが、その前に Peer polity 概念とヘテラーキー概念から想定されるインダス文明社会とその形成を窺っておこう。

2-2 交易と社会変化モデル

対等政体間相互作用

すでに [宗基 2012] にて筆者の理解を示しているため、簡略に述べておこう。このモデルは、C.レンフルーが提起した原初的な国家の概念で、一定地域内に 40km 程の距離において、1500km² ほどの領域を統治する 10 内外の、それぞれに恒常的交易センター機能を果たす権力組織を「初期国家」として [Renfrew 1986]、一定地域内に競合した「初期国家」群による相互影響関係が、やがてある集団を強力な政体 (国家) へと発展させるとする「対等政体間相互作用 (Peer Polity Interaction)」なるものである [Renfrew and Cherry (eds.) 1986: 7-8]。

このような社会変化モデル概念に基づいて、隣接す

る地域に展開したパローチスターン丘陵の諸文化とインダス文明以前のインダス平原部の社会との相互影響関係から、一方が強力な政体を構築して文明を形成したと想定した場合、インダス文明社会の成立を検討するにあたっては、利用しやすいように思われる。

しかし、個別政体社会をより良く理解するには、隣接する「対等な政体」社会の発展状況の観察のみから得られると、著者自らが述べている [同書: 152]。インダス文明の検討にあたって、丘陵部と平原部における社会動態を十分に分別して、個別政体内部の現象を内的発展と外的影響とに峻別することは、ハラッパー文化の起源が不明である現在、困難である。

レンフルーらは、政体間の相互作用を考古学資料に基づいて探る手続きを示しているが⁷⁾、その要点は、物資や情報交換の増大と再分配を起因として、新たな組織や制度が要請され、職能の専門化と組織化が促進されることで、社会変化がもたらされる、とするものである。岩崎と常木が指摘するように、レンフルーらは社会変化、または国家形成を交易に焦点をあてて捉えようとしている [岩崎・常木 2008:8-10]。すなわち、レンフルーらによる政体間の相互影響関係が一方に現われた社会変化によって統合されていくとするモデルは、交換・交易を前提とした論議でもある。その交換・交易を視点とした社会変化モデルには、この他にウルク・ワールド・システム論がある。

ウルク・ワールド・システム

諸文化間の関係と社会変化の要因を交易に求め、地理的に隣接する複数の文化の内、一方の他方への拡大を都市化・文明化への過程として把握するのが、ウルク・ワールド・システム論である。

G. アルガゼ (Alger) によって示されたウルク・ワールド・システム論は、南部メソポタミアのウルク文化が前 4 千年紀後半に周辺地域へと拡大していく過程を「ウルク文化の拡大 (Uruk Expansion)」と捉え、これを社会変化の枠組みとして規定する [Alger 1996]。その基本的枠組みは、複数の地域文化を経済的な支配と従属の関係とする経済理論 [ウォーラーステイン 1981] を下敷きにして、

①「中心 (core)」による「周辺 (periphery)」の支配

②その間の不等化な交換

③社会変化の第一要因を交換・交易

とする 3 点である。

灌漑農耕による穀物や毛織物製品を交換・交易の原資として、社会の複雑化・都市化を加速し、不等化な交換・交易を通じて帝国化への道を歩む「中心」であるウルク文化の拡大過程で、鉱物資源や木材などの天然資源を主な搬出品とする「周辺」である隣接地域に

出先集落を順次設置して、段階的にその地をウルク文化圏に取り込んでいく姿を描いている。まず社会的拠点が存在しないところに前哨地 (outpost) を設け、その後在在地社会の集落間規模で頂点にある集落を占有し、それらの拠点とウルク (中心) とを結ぶ交通路上に、小規模な駐屯地 (station) を設営する過程をアルガゼは想定している。そして、前哨地、駐屯地、そして交易路の重要な結節点の地方都市を占有した包領地 (enclave) など、交易路上の結節点と目的地を押さえていくウルク文化の拡大は、「中心」と前哨地が置かれた「周辺」との経済的関係であり、経済的支配と被支配の関係こそが同時代の多様な地域・文化間を結びつける主要な関係性である、とする。また、「中心」では、複数の政治的組織が競合することで、ウルク文化以降のメソポタミア地域にダイナミックな政治展開が惹起された、とする [小泉 2002 も参照]⁸⁾。この複数の政治組織の競合は、対等政体間相互作用理論とも通じる視点である。

インダス文明は、メソポタミア諸遺跡から出土するアルカリ腐食文様紅玉髓玉などをインダス特産品とし、これに代表される域外交易を文明の重要な経済基盤としていた [Kenoyer 1997]。この域外交易を維持・継続するための交易ルートの掌握、そしてビーズ玉となる石材の入手の如何は、インダス文明の命脈を左右したであろうし、交易が文明社会の一層の階層化の一因ともなっていたであろう。この点において、ウルク・ワールド・システム論の「中心」に沖積平原に栄えたインダス文明を、貴石製ビーズ玉の石材が産出する「周辺」にパローチスターン丘陵をはじめとする地域に置き換えることも可能であろう。

近年、こうした議論に対して、グリーンは従来の複雑化社会が階層化を生むとする伝統的理論の修正、または異なる理論が必要かもしれない、とする [Green 2020]。

多頭的政体論議

グリーンの見解を見る前に、農耕の水利管理形態と投下された労働力からウィットフォーゲルを始めとする水利文明理論に対して、インダスの農耕管理システムは国家段階政治構造の階層化した権力のある程度制限し、とくにエリート階層の土地所有から生まれる富の制御について主張するミラーの興味深い見解を見ておこう [Miller 2006]。

土地の保有とその再分配は拡大した親族グループによるものであり、その結果インダス文明の平坦な階層性の特徴を作り出し、富と権力は親族組織に依存し続けた。国家段階社会における親族組織基盤の権力は国家の重要要素に限定性を付与する一方、インダス国家の政治指導者は宗教権威を基盤とし、交易や製品管理、

その他の法的根拠を得た。農耕システムが複雑で、末期にはより複雑化することの説明となる。こうした社会であるために、副葬品の差異がなく、支配者を示唆する遺構・遺物がなく、高度な社会経済階層の証拠が貧弱なのである、とする。

他方、グリーンは複雑化社会は支配階層を必要とするかとの疑問から発して、ヘテラーキー概念を援用して、モエンジョ・ダロー発掘初期には、多頭的政体または並列的社会とする見解が明らかに存在したが、その後、そうした見解は省みられなくなったとする。近年、多頭的政体、並列的社会の存在が指摘されるなかで、インダス文明研究者は旧弊を棄てる必要がある、と次のように主張する [Green 2020]。

インダス文明はおそらくは世界で最も並列的な複雑化社会で、都市化、集団行動、そして技術的変革が絶対的な支配階層の存在を示す一覧表に由来するのではなく、完全な支配階層の不在でもおこりえる。インダス文明は並列的社会であるが、複雑化を欠くわけではなく、むしろ支配階層が社会の複雑化の前提条件ではないのである、とする。

グリーンは複雑化社会が支配階層を必要とするか、という基本的疑念より出発し、都市支配階層（エリート）の存在に懐疑的で、非中央化と平準化された政体共同政治戦略にもとづく「集団行動（collective action）」による集団的社会が、領域内資源に依存し、階層化への舵を切らずに政治的階層化を必要としないとする。そこでは、共同作業と合意形成が排他的戦略網による支配階層の政体とは全く異なる集団的活動を生み出して、度量衡の統一でさえエリートなしで可能であるとする。さらに論を進めて、社会の複雑性は人口やその集中化とは基本的に関係せず、そのかわりに都市化は大規模住民の集住と物資の集中に関係し、国家形成と緩やかに関係性をもちつつも政治的階層化への動きとしばしば対立して、都市は人と物、資源の集中を生み出すが、支配階層は必然的でないとする。

そこに持ち出されるのが、ヘテラーキーである。人類学における団体的集団（corporate group）という一般的富への接続を共有する概念をもちいながら、インダス文明の特徴を①5つの地域に5つの都市とその周辺に衛星、または地方村落、②集落の拡大と中核化、③工芸専門化と交換、④大小の公共建物、都市計画、印章、度量衡などの工芸品の定型化など集団活動と政治組織の証拠、⑤副葬品の平等分布の5つの視点からインダス文明は、おそらくは世界で最も並列的な複雑化社会である、として支配階層が社会の複雑化の前提条件ではない、と結論づける。

しかしながら、国家無き社会がインダス文明だとすれども、複雑化をもたらしたのはウルク・ワール

ド・システム論に示唆される資源の獲得が大きな要因であったことは否めないであろう。それゆえに、その資源産出地との関係や交易を主導する立場の人間、または集団とその権限、資源獲得の方法と権限の源泉こそがインダス文明とパローチスターン丘陵社会に都市と国家の存在を考察する際に重要であることが再確認できる。そして、そうした考察の一端が近年のロウによる石器やビーズの石材交易にみることができているのだが、先を急がずに本稿の課題を順次、紐解くことで、インダス文明とパローチスターン丘陵社会を歴史的に位置づけていきたい。まずは集落の拡大化と中核化、そして工芸品の定型化といった集団活動と政治組織の存在を可能ならしめる社会的凝集性を指し示す遺物としての土偶と、集落内における社会的階層性を示す空間分離を遺構に見ておこう。

3 土偶

人物土偶については、すでに筆者がゴーマル平野の文化やパローチスターン南部のクッリ文化の他に、パローチスターン北部麓のカッチー平野に位置するメヘルガルとナウシャロー遺跡出土資料を中心にして、前5000年前後から前2600年頃までの展開を示し、いわゆるインダス文明期の「神官王」像への展望を提示した [宗基 2016; Shudai *et al.* 2015]。そこでは、簡易な女性像が次第に具象化し、また座位であった姿勢が椅子や段に腰掛けるものからやや膝を曲げた立位への造形的変遷が、ついには立位の女性像が幼児を抱く姿へと推移する意匠の変貌を確認した。その年代は前3千年紀第2四半期であった。加えて、その直前に完全な立像となった男性土偶が女性土偶と同様の造形手法で生み出される (図2)。

女性土偶に人間集団と環境の豊饒性を願う人々の願望の表れと捉えるならば、幼児を抱いた女性はいくつかの集団の豊饒とその維持を鮮明に表した造形といえよう。ほぼ同時期に現れた男性土偶に器を捧げさせる意匠が加わる。器の理念的解釈には様々であろうとも、この後に現れる男性土偶が抱く「もの」を見れば、それは一目瞭然である。その男性土偶はメヘルガルの最末期から後続のナウシャロー I D 期に幼児を胸前に抱いて現れる。先に男性土偶が捧げた器が生殖器の意匠であることが解る。そして、幼児を抱えた男性土偶は、社会の豊饒を願い、さらに保護する様を表したものと理解できる。その男性土偶の造形手法は、従来の土偶と一線を画すように、衣服を纏い、その表情を一変させている。さらにその頭部表現は、インダス文明に現れる男性像との間に多くの共通点を示している。それは、額に飾りをあしらった鉢巻であり、細長い目の表現である。

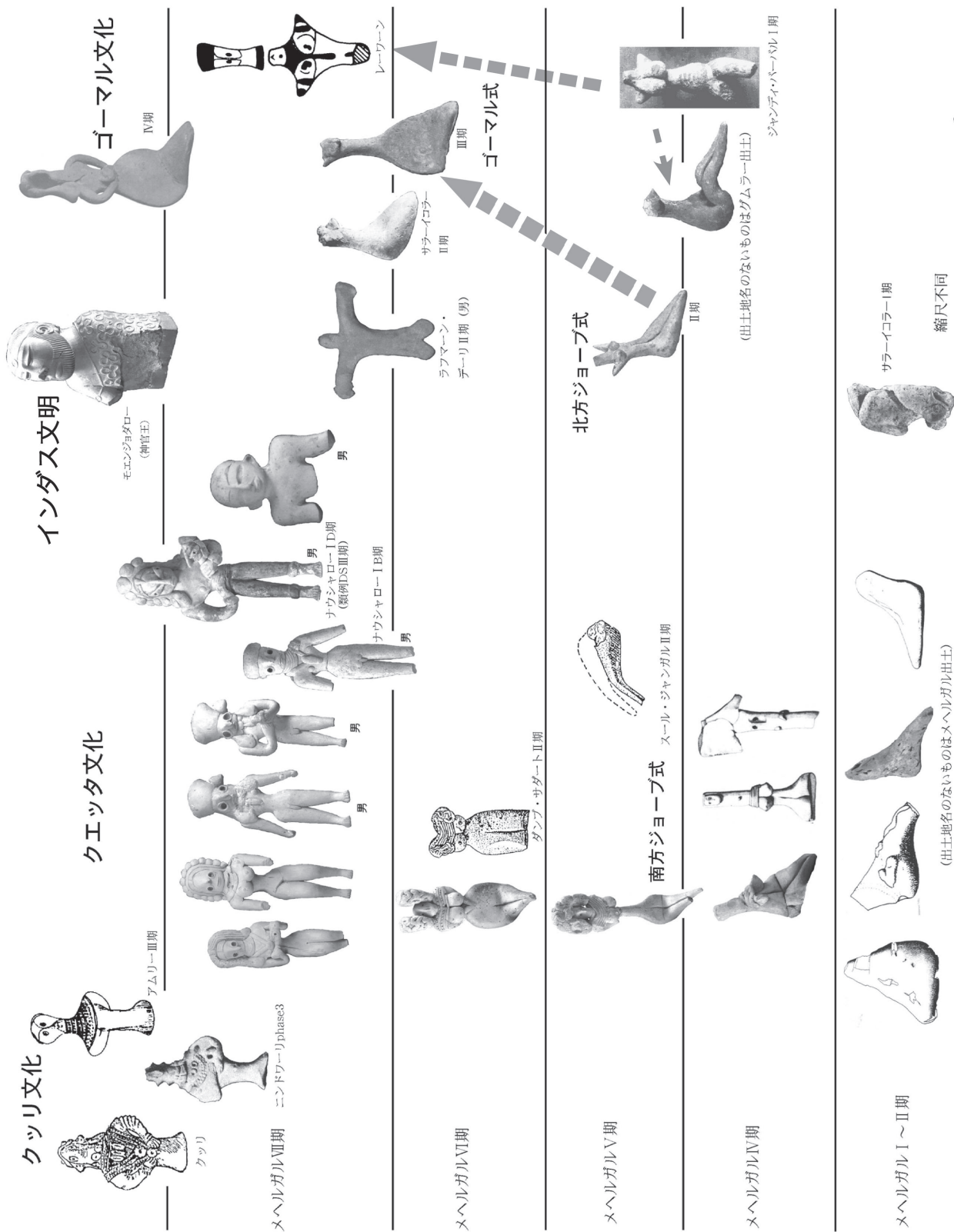


図2 南アジア先史～文明期の土偶変遷図 [宗基 2016]

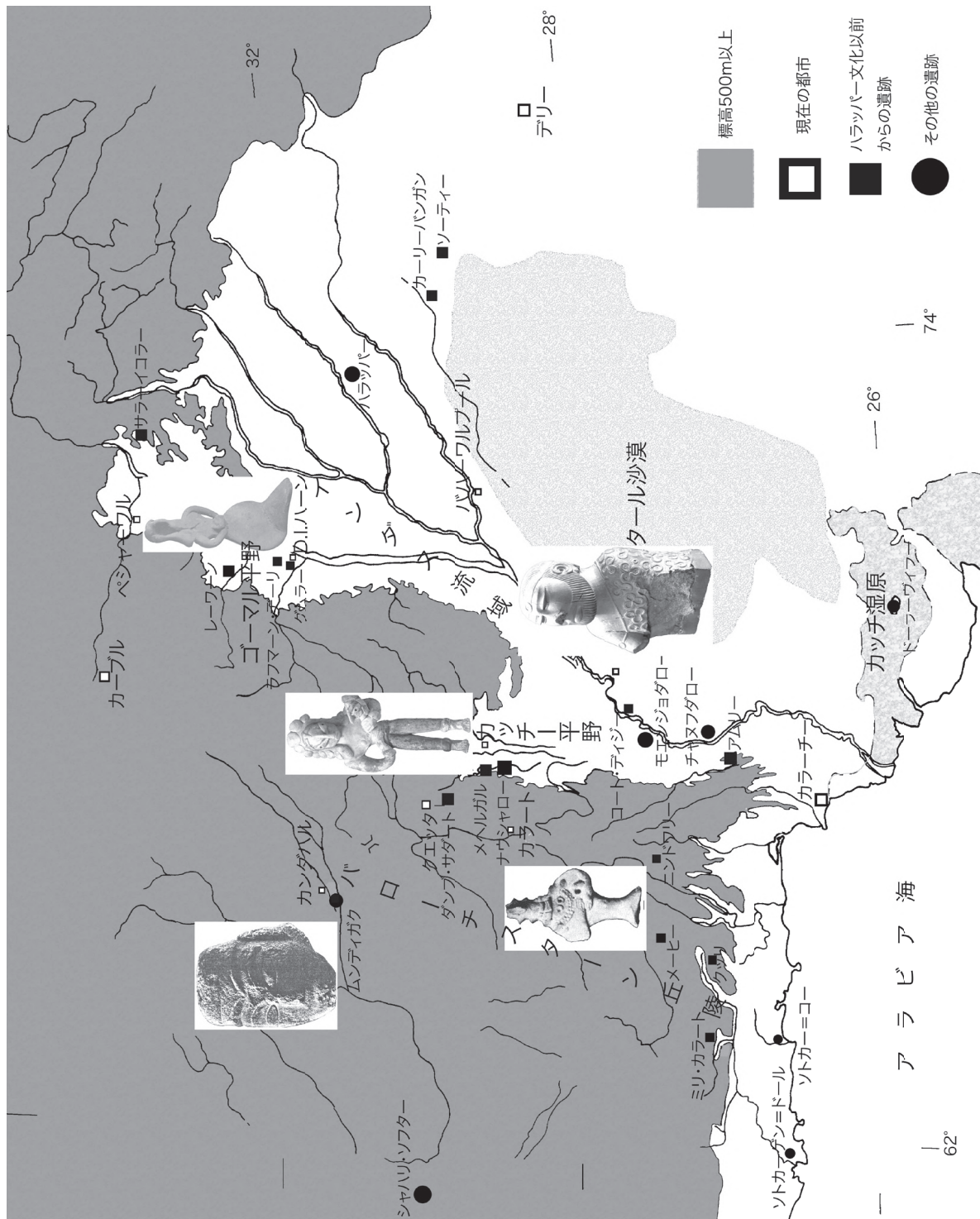


図3 南アジア前3千年紀中頃の男性像と女性像

ナウシャロー出土土偶の額飾りとインダス文明、とくにモエンジョ・ダロー出土「神官王」像のそれとは形状が異なるものの、細長い目と額飾りがある鉢巻の装着は、インダス文明形成期から文明期にかけての南アジア北西部からイラン・アフガニスタン地域の主要遺跡に共通して造形される男性像である。アフガニスタン南部のカンダハールに位置するムンディガク遺

跡IV 3期出土男性石像 [Casal 1961]、ナウシャロー I D期男性土偶、回遊式寺院建物とも想定されているモエンジョ・ダロー DK 地区建物 1 出土男性石像である [Jansen 1986] ⁹⁾ (図3)。

他方、バローチスターン南部を中心としてメヘルガルやナウシャロー遺跡のあるカッチャ平原を北限とするクッリ文化圏では、新たな表徴を備えた男性像を作

り出さずに下半身を造形しない女性土偶を作り続けた。すなわち、額飾りと細長い目、衣服を纏うなどの新たな表徴を備えた男性像は、インダス平原、パローチスターンのクエッタを含めたカッチー平野、そしてカンダハールのムンディガクの限られた地域に現れたのである [Vidale 2018]。カッチー平野がボーラン峠とピシン峠を介してインダス平原をアフガニスタンそしてイランへと続く西方世界とつなぐ交通路上に位置することに注意したい。加えて、この地域に現れた新たな土偶は、インダス文明遺跡から出土する「神官王」像や特異な建物から出土する男性石像との類似から、従前とは異なる文明社会形成を背景として生み出されたと指摘でき、当該男性土偶を出土したカッチー平野のパローチスターン文化に複雑化した諸階層を内包する凝集社会の存在を想定させる。

ただし、留意しておかなければならない点がある。それは、モエンジョ・ダロー出土の「神官王」像の後頭部には、頭飾りを装着したと思われる平坦面が作出されていることである。近藤は、この平坦面にコート・ディジー遺跡出土土器に描かれた有角神像のような角を表した飾りが乗せられていたのではないかと指摘している [近藤 2011]。この角については、印章に描かれた牛が氏族の象徴であるとの意見もあり、社会組織の観点から後述する [Frenez 2018]。

4 大規模基壇

男性石像を出土させたモエンジョ・ダローの建物 1 のような特異な遺構をパローチスターン文化の諸遺跡に認めることはできないが、遺跡集落内の階層化を示す遺構をメヘルガル遺跡に確認できる。メヘルガル遺跡は VI 期以降に集落が直線的周壁で囲まれたことが判明しているが、VII 期に周壁南西部の外側に 400 m² を超える煉瓦積み基壇が築かれる。基壇はその北西角を認めたが、幅と長さは未確認で、発掘では南北 10 m 以上、東西 35 m 以上あることが確認されている。どこまで広がるかは不明なものの、遺丘測量図からは南北幅 20 m、東西幅 50 ～ 60 m は確実と思われる (図 4)。

この基壇はインダス文明都市遺跡の城塞部に築かれた基壇のように市街地を見下ろすように高く積まれたものではなく、また焼成煉瓦による被覆もなされていない。しかし、基壇の北東に広がる周壁で囲繞された集落から隔絶した空間であることは確実である。この市街地から分離した基壇上に大型の木造建物が存在したか、または広大な祭祀空間の可能性も想定される。同時期のパローチスターンで基壇を確認できるのはクエッタのダンプ・サダート遺跡の III 期の遺構である。

ダンプ・サダートの III 期は、下層より A、B、C の

3 つの建築相に細分される。最下層の III A 期に高さ 3.5m、確認された限りでの長さ 15m の周壁が発見され、周壁の内側に高さ 6m、幅 9 m 以上の日乾煉瓦基壇が広がっている。基壇には、半地下式の貯蔵穴と石灰岩で補強された深さ 1m ほどの排水溝が設置されている。また、基壇上から女性土偶が、基壇の基礎下からヒトの下顎骨が出土した。当時も半乾燥地帯であったと考えられる遺跡地でありながら、排水溝の設置された基壇の周囲から土偶や人身供犠を思わせる人骨が出土する状況は、基壇が何らかの儀礼行為と結び付いたものであったことを示唆している。基壇は、III B 期に拡張されて遺跡の大半を占めた。メヘルガル遺跡の基壇も周壁に囲繞されるか否かの違いはあれども、何らかの祭祀施設であった可能性の高いことを再認識できる [Fairservis 1965]。いずれにしても、こうした祭祀施設を中心とした社会的凝集性が文明期直前から形成期のパローチスターンのクエッタ地域からカッチー平野に出現していたことは確かであり、周壁で囲まれた居住域から分離して位置するメヘルガル遺跡の大規模基壇は、社会的凝集性と同時に一般の社会経済活動から分離して地域社会をまとめあげる機構が存在していたことを明示している。

遺物である土偶の表徴の変化と、遺構としての大規模基壇の出現から窺われる社会的凝集性の増大と社会を牽引する人物あるいは集団、機構がパローチスターン丘陵社会、とくにクエッタ地域に存在したことは、ほぼ確実である。しかしながら、その直後にパローチスターン、とくにクエッタを中心とした社会・文化が衰退する状況は、インダス文明形成研究にとって非常に重要な視点を与える。その理解のために、次の課題である交易について見ていこう。

交換・交易の形態

ビーズ玉の「石材産出地」、「製作」と「消費 (佩用)」の関係は、同一社会集団内にある場合もあれば、異なる場合もある。後者の場合、三者の間には交換・交易が存在し、状況に応じて、交換・交易の形態も異なることになる。近年、飛躍的に研究が進展しつつある石製ビーズ玉の製作手法と石材原産地比定は、域内と域外交易・交換との関わりを示すのに最も適した資料の一つである [上杉 2020]。

1937 年、マッケイはインダス文明の都市遺跡チャヌフ・ダロー遺跡出土の石製攻玉ドリルを先史南アジア製品として初めて報告した [Mackay 1937]。また、彼はインダス文明遺跡、とくにモエンジョ・ダローやハラッパー両遺跡から出土する腐食文様紅玉髄玉 (Etched Carnelian Beads) [Mackay 1933]¹⁰⁾ が、ウ

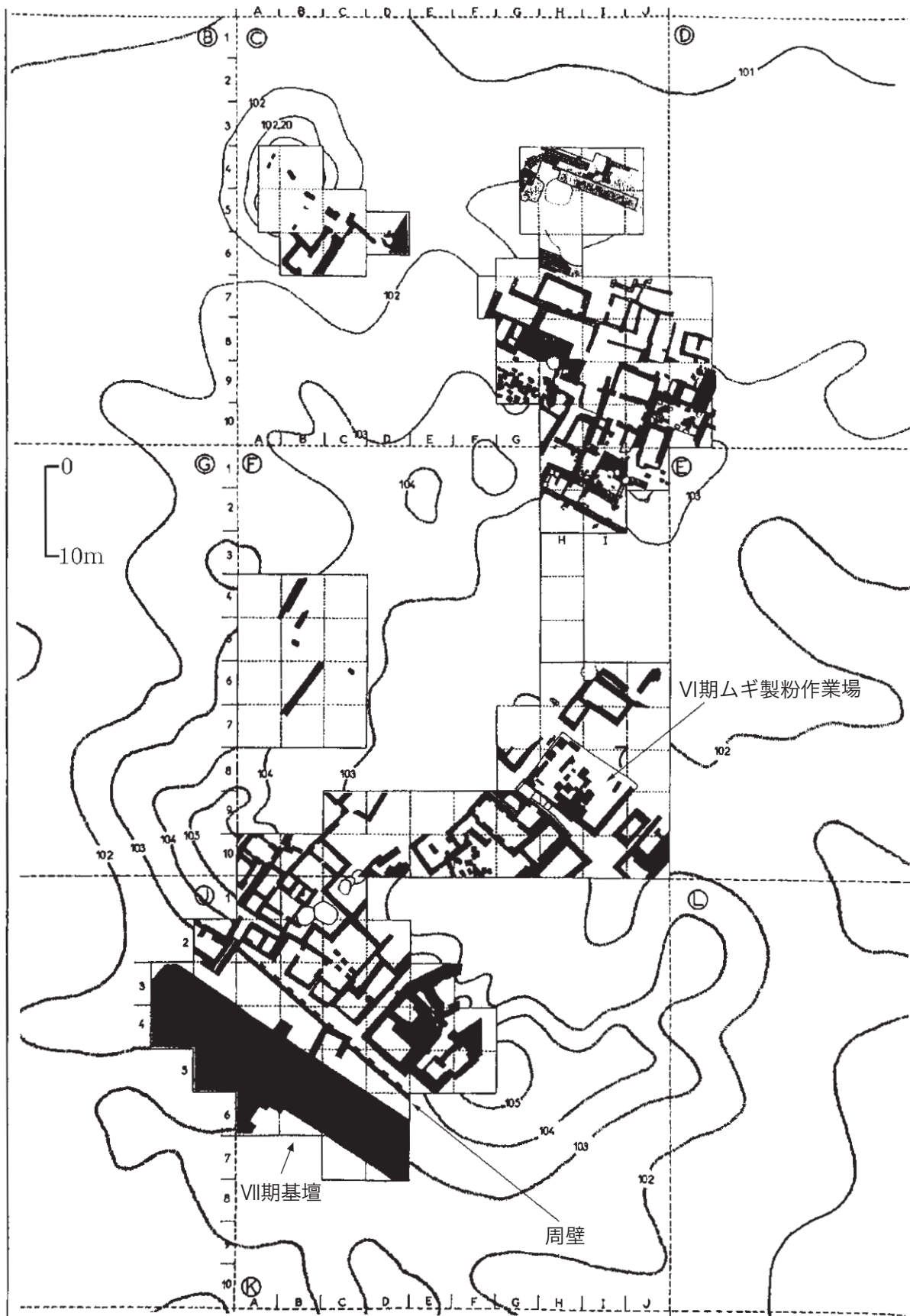


図4 メヘルガル遺跡VI・VII期平面図 [Jarrioe et al. 1995]

ルやキシュ、ニップール (Nippur) などのメソポタミア地域の諸遺跡からも発見されることに注目し、それらが交易によってインダス文明圏からもたらされたもので [Beck 1933, Read 1979]、玉作り¹¹⁾はインダス文明を支える重要な経済要素であり、チャヌフ・ダローはその主要な玉作り工房遺跡であるとして重要視した [Mackay 1931]。

ビーズ玉石材別出土量

ビーズ玉はインダス文明都市遺跡から、必ずといってよいほど出土する遺物だが、チャヌフ・ダロー遺跡、ロータル (Lothal) といった玉作り工房跡が発見された遺跡からは多量に出土する¹²⁾。それらは、土製、ファイアンス製、凍石製、貝製の他に瑪瑙、紅玉髓、ラピス・ラズリ、トルコ石、碧玉といった貴石類によるものなど、多種におよぶ素材が用いられている¹³⁾。その形状も多様で、白玉、管玉、棗玉、長棗玉、菱玉などがあり、断面形も丸形にとどまらず、菱形や扁平なものもある (図5)。また、ビーズ玉に文様を施す例もあり、その中にマッケイやベックがインダス文明の特産品として注目した腐食文様紅玉髓玉がある。

材質、形状ともに種類豊富なインダス文明のビーズ玉であるが、主に用いられる素材は粘土や瑪瑙と紅玉髓が多く、アフガニスタン産のラピス・ラズリや内陸アジアに産出するトルコ石を用いたビーズ玉は少ない (図6)。近年では上杉がファルマーナー (Farmana) やミタータル (Mitathal) 遺跡出土ビーズ玉の材質別点数を詳細に報じている「上杉 2015、2020 ; Uesugi,

Kumar and Dangi 2018」。

他方、インダス文明に先行、または一時的に併行するバローチスターン丘陵からインダス平原部の諸遺跡からも多数の、そして多様な素材で作られたビーズ玉が出土する。

平原部にあたるインド、ハリヤーナ州南部に位置するミタータル遺跡のⅠ期からは、テラコッタ製のビーズ玉が1点のみ出土するが [Bhan 1975]¹⁴⁾、パーキスターンのラーヴィー川下流域左岸に位置するジャリールプール遺跡からは、瑪瑙、紅玉髓、ラピス・ラズリとテラコッタ製のビーズ玉が出土する。とくに前4千年紀前半後葉とされるⅡ期からは、ラピス・ラズリのビーズ玉未成品が多量に発見されているという [Mughal 1972, 1974]。

パンジャブ州北部のサライー・コラー遺跡より出土した224点のビーズ玉の半数は、表面採集品であるが、その内の37点が貴石製であった。石材はラピス・ラズリ、紅玉髓、瑪瑙、その他と報じられ、ラピス・ラズリが最も多い。なかには未成品もあつて、遺跡内で玉作りが行なわれたことを示しているが、ラピス・ラズリを素材とするビーズ玉とその未製品は、表面採集品の他に、インダス文明直前からその初頭のⅡ期から出土したものに限られる [Halim 1971-72, 1972]。

ゴーマル平野のラフマーン・デーリ遺跡からも多くのビーズ玉やその未成品が出土している。未成品を含めたビーズ玉の出土時期は、ハラッパー文化以前と、ハラッパー文化が波及した直後が大半を占める。利用














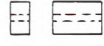













名 称	長幅比	平面形	断面形	名 称	長幅比	平面形	断面形
管 玉	$L > W$		○	菱 玉	$L < W$		
白 玉	$2L \leq W$		○	長菱玉	$L \geq W$		
稜付白玉	$2L \leq W$		○	平棗玉	$L > W$		
切子玉	$L > W$		○	楕円玉	$L \leq W$		
長切子玉	$L \geq 2W$		○	短冊玉			
棗 玉	$L > W$		○	六角玉			
長棗玉	$L \geq 2W$		○	増幅玉			
偏円玉	$L < W$		○	袂入幅玉			
長偏円玉	$L \geq W$		○	速住玉			

図5 ビーズ玉形状名称 [Durrani et al. 1994-95 内宗基作製]

ハラッパー遺跡出土品の他にマッケイが提示していたチャヌフ・ダロー遺跡出土ドリルの再検討を通じて石製ドリルの新たな分類とビーズ玉との関係を示している [Kenoyer and Vidale 1993]。

1 文明以前の南西アジア出土の石製攻玉ドリル

イラン南東部に位置するシャハリ・ソフター遺跡からは、多くの攻玉ドリルと共に、ラピス・ラズリや紅玉髓の粗割り石、それに製品として加工されたビーズ玉やその未成品が出土している。このことから、シャハリ・ソフター遺跡は、ラピス・ラズリと紅玉髓の中継加工交易地として知られる [Tosi 1968]¹⁶⁾。チャヌフ・ダロー遺跡の調査から 30 年、シャハリ・ソフター遺跡での攻玉ドリルと玉作り工程を示す遺物の発見は、かつてマッケイが指摘したメソポタミアとインダスとの単純な二地域間取引にとどまらない、より複雑な多地域間取引と文化交渉を示すものとして、玉作りの重要性を再認識させた。これ以降、各地域の調査で出土する攻玉ドリルは、実測図として示されるようになった¹⁷⁾。

以下に煩雑ではあるが、先史～古代南西アジア研究者らが石製攻玉ドリルに再び注目するきっかけとなったシャハリ・ソフター遺跡出土の攻玉ドリルから順次、各遺跡出土例を見てゆく。

シャハリ・ソフター遺跡 (図 7: 1～5)

石製攻玉ドリルやビーズ玉、その未成品と粗割り石など、玉作りに関連する遺物の多くは、Ⅱ期とⅢ期から出土する。とくに炉を備え、日乾燥瓦を敷いたⅡ期の玉作り工房跡の床面からは、攻玉ドリルやビーズ玉、その未成品と砥石が発見された。また、Ⅲ期の墓壙からは、攻玉ドリルと砥石、それにラピス・ラズリやトルコ石などの粗割り石が副葬品として出土し、玉作り工人の生業が副葬品で示されるほどに、玉作りが重要な工芸活動として当時の人々に意識されていたことを理解できる¹⁸⁾。

出土した攻玉ドリルは比較的大ぶりで、軸長の長いものが数多く報じられている。石材には、主にフタナイト (Phtanite) と呼ばれる結晶珪岩が用いられ¹⁹⁾、その製作技法は、厚めの剥片に急峻なリタッチを両側縁に施し、さらに背面の稜もつぶして全体の横断面を矩形に作り出す。ドリルの作業部は、ほぼ一定の幅を保つが、先端に向けて少し細くなる。他方、ドリルの基部は、穿孔作業時にソケットに装着することを考慮し、主要剥離面にまでリタッチを加えて、円錐形状に丸められる。

出土した攻玉ドリルを分析試料に利用して、ビーズ玉穿孔作業の工程復元にあつた、A. グウィンネルト (Gwinneltt) と L. ゲレリック (Gerelick) によれ

ば、攻玉ドリル作業端部の平坦さは、穿孔時に金剛砂を端部に定着させるために必要で、また穿孔を継続することにより平坦な端部に窪みが生まれて、金剛砂の噛み合わせがさらに効率化するという [Gwinneltt and Gerelick 1979, 1981]²⁰⁾。硬質で長いビーズ玉を穿孔するには、こうした形態のドリル端部が必要であった。このような製作技法上の特徴を備えた攻玉ドリルを「シャハリ・ソフター型」とする。

アムリー遺跡 (図 7: 6・7)

アムリー遺跡からは、5 点の石製攻玉ドリルが報じられている [Lechvallier 1979]。ドリルは、アムリー遺跡の石器インダストリーを特徴づける、安定した剥片剥離技術にもとづいて得られたフリント製細石刃を加工して作り出されている。作業先端部は欠折している可能性もあるが、側縁部に加えられる急角度のリタッチで作られた作業部は一定の幅を保持し、基部との間に段を作る。基部は先細りの長台形を呈する。使用痕やビーズ玉穿孔時の石粉の付着は報じられていない。細石刃に加えるリタッチは比較的少なく、素材となる細石刃の形状を多分に留め、全体に薄い作りであるのがアムリー遺跡の先史時代攻玉ドリルの特徴である。

図 7: 7 は、イスラーム時代の V 期より出土したと報告されるフタナイト製のシャハリ・ソフター型である。同様のフタナイト製攻玉ドリルは、他に I 期より 3 点が出土したと報じられるが、図示されず不詳である。

ラフマーン・デーリ遺跡 (図 7: 8～26)

ラフマーン・デーリ遺跡出土の石製攻玉ドリルについては、ファリード・ハーンが比較的详细に報告している [Farid Khan 1979] 他に、筆者による報告もある [宗墓 1998b]²¹⁾。

攻玉ドリルは、全てフリント、もしくはチャート製の細石刃を加工し、全体に小ぶりに製作されている。ラフマーン・デーリ遺跡の石器群は、ミクロ・ビュラン技法でなく、側縁に入れるノッチを延長した裁断技法によって、細石刃から切り取られた幾何学形細石器を豊富に持つことを特徴とする [宗墓 1990a]。ここに掲げた攻玉ドリルも細石刃から裁断された幾何学形細石器を加工したものか、または細石刃に同様の技法で手を加えて作られている。

ファリード・ハーンが報告した攻玉ドリルは、細石刃、または、それから切り取られた幾何学形細石器の側縁部と端部にのみリタッチを加えて作られており、その横断面は偏平な不等辺多角形で、端部も必ずしも平坦に作り出されない。こうしたドリルの形態から判断して、比較的軟質で短軸のビーズ玉穿孔のために製作された攻玉ドリルと考えられる。アムリー遺跡出土

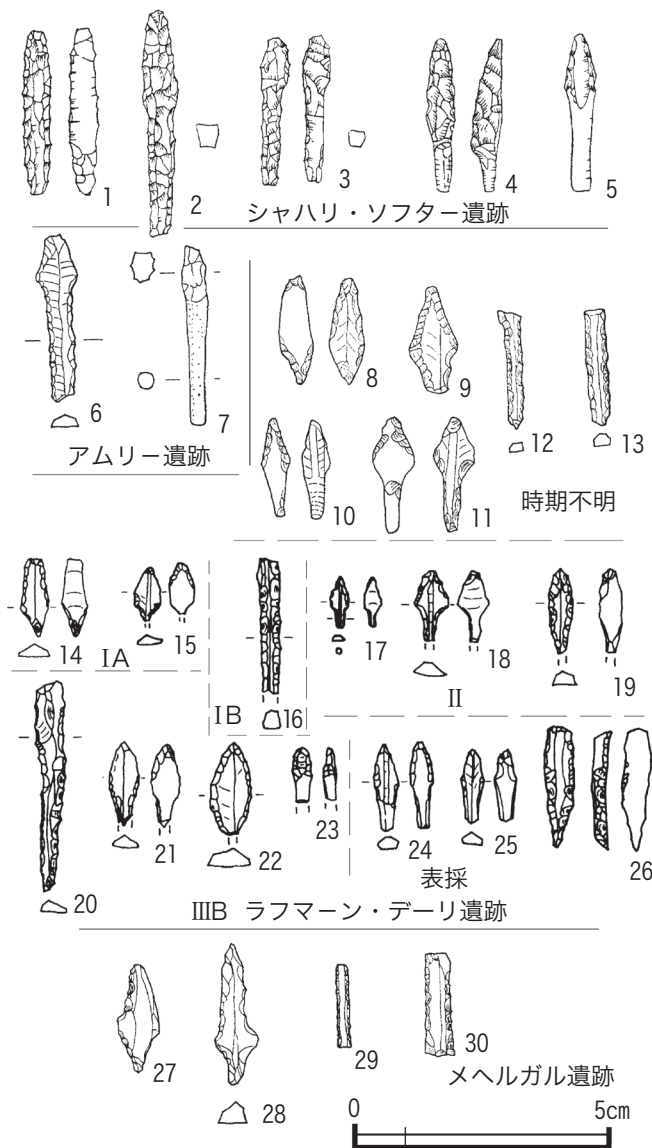


図7 石製改正ドリル

例も同様の用途であろう。

図7:14～26は、筆者が報じた出土層位の明確な攻玉ドリルである。13点の攻玉ドリル実測図は、出土時期別に配列して提示したが、当遺跡より出土した攻玉ドリルの通時的変化は少ない。

I A期からの2点は、細石刃の頭部付近の主要剥離面に向けたリタッチまたはノッチ状の深い抉りで作業部が作り出され、他の側縁と端部は主要剥離面からのリタッチで刃潰しする。比較的厚い頭部付近に作業部を成形するため、作業部の横断面は菱形である。

I B期からは、石刃の主要剥離面から背面に向けたリタッチが深く、横断面は矩形の細長い作業部のみである。

IIからIII期にかけて出土したドリルの形態とリタッチの加えられ方は、I期の出土例と同様だが、ドリル穿孔を重ねた結果、作業部が円筒形に磨り減っている。ただし、遺跡表採品の作業部長はいずれも短く、ラフマーン・デーリ遺跡では、素材となった細石刃を加工して作られた石製攻玉ドリルを用いて、短軸のビーズ玉穿孔を行っていたことを確認できる。

メヘルガル遺跡 (図7:27～30)

M. ルシュヴァリエ (Lechevallier) は、メヘルガル遺跡から出土したシャハリ・ソフター型と考えられる攻玉ドリルを写真図版で紹介している [Lechevallier 1978, 1980, 1984, 1995]。しかし、実測図では、それらと異なる攻玉ドリルと突き錐を分別せずに掲載しているため [Lechevallier 1984]、筆者が攻玉ドリルと判断した出土例のみを図示した。

攻玉ドリルは、フリント製細石刃の側縁部に主に主要剥離面側からのリタッチを加えたものであるが、リタッチの加え方と形態がそれぞれで異なる。

III期出土品は、細石刃を加工して作られたものであろう。ドリル作業部は短かく、全体に菱形を呈する。最も幅の広い肩から三角形に先細り、全体の1/3程度が作業部となる。側縁へのリタッチは、両側縁に異なる方向に施し、ドリルの断面形を矩形に近づけている。これはメヘルガル遺跡の裁断石刃 (Truncated Blade) に多用される技法である。

図7:28は、全体の形状がアムリー I c 期出土例 (図7:6) と類似する。

IV期出土例も同様である。

この他に、ルシュヴァリエは、メヘルガル II・III期からフタナイト製攻玉ドリルが出土する、と報じているが、詳細は不明である。

メヘルガル遺跡では、フリント製攻玉ドリルがI～III期に出土し、その後のIV～VII期には図示した以外に、ほとんど出土しない。IV期以降には、シャハリ・ソフター型のフタナイト製攻玉ドリルが用いられたとの見解も示されるが [Lechevallier 1984: 46]、フリント製とフタナイト製攻玉ドリルの消長を具体的に探るには、今後の調査に待たねばならない。それでも、II～III期にはフリント製とシャハリ・ソフター型フタナイト製の双方の攻玉ドリルがメヘルガル遺跡で用いられたと報じられている点に留意しておきたい。ただ

し、メヘルガル遺跡出土のシャハリ・ソフター型ドリルの石材についてヴィダーレが成分分析を含めた再検討を行ない、一概にフタナイトとは言い切れないとしていることにも注意しておきたい [Vidale (ed.) 2017; Vidale *et al.* 2017]。

堀は、南西イランやアフガニスタンなどの貴石産出地周辺で攻玉ドリルが出現した後に、文化的接触と貴石交易を介して、これら地域の攻玉技術が広範な地域へ伝播したと論じた [堀 1983]。本節で取り上げた南東イランからバローチスターン文化圏の諸遺跡より出土した攻玉ドリルもそうした脈絡の中で捉えられるものであろうが、次節に述べるインダス文明期のビーズ玉作りの比較のために、出土攻玉ドリルの年代的位置付けと、ドリルの特徴を再確認しておきたい。

出土年代

確認できる最古の攻玉ドリルは、前4千年紀初頭、遅くとも前4千年紀前半に位置づけられるメヘルガル遺跡Ⅲ期の例である [Jarrege, J.-F. *et* Lechevallier 1980]。その他の類例は、次の通りである。アムリーⅠc期は、多色彩文土器が消失した直後であるから、メヘルガルⅥ期に相当する前3千年紀の第1四半期から前半と考えられ²²⁾、ラフマーン・デーリ遺跡のⅡ・Ⅲ期は前3千年紀前半から中頃と比定できる²³⁾。そして、ラピス・ラズリの加工交易地であるシャハリ・ソフター遺跡のⅡ・Ⅲ期は、バローチスターンのクエッタ地区やメヘルガル遺跡から出土するファイズ・ムハンマド彩文灰色土器と類似する土器が少量ながら出土しているので [Biscione 1973]、前3千年紀前半から第3四半期に比定できる。

これら諸遺跡から出土する石製攻玉ドリルは、前4千年紀前半にまで溯るメヘルガル遺跡Ⅲ期出土例を除いて、前3千年紀前半から中頃または第3四半期に製作・使用されていたことになる。以上の石製攻玉ドリルの出土年代は、堀の見解に反しないものの、石製攻玉ドリルで貴石類を穿孔する技術の伝播は、シースターンからバローチスターン丘陵東麓まで、ほぼ時を同じくして急速に広まったことを示している。

攻玉ドリルの特徴

前3千年紀前半から中頃にかけて、イラン東部からバローチスターン丘陵一帯にかけて急速に拡散した石製攻玉ドリルの製作だが、その石製攻玉ドリルの形態は一様ではなかった。分厚い剥片のほぼ全面を覆うようなリタッチを加えて作られたシャハリ・ソフター型の攻玉ドリルは、バローチスターン丘陵のアムリーとメヘルガル両遺跡より出土する。他方、アムリーⅠc期やラフマーン・デーリ遺跡、それにメヘルガル遺跡の主要な攻玉ドリルは、全体に薄く、細石器加工技術を色濃く反映したフリントやチャート製の攻玉ドリル

で、ラフマーン・デーリやメヘルガル遺跡の攻玉ドリル作業端部は、多分に突き錐的であった。短期間のうちにバローチスターンの諸遺跡に波及した攻玉技術は、ラフマーン・デーリ、メヘルガル、アムリーの諸遺跡に、突き錐的要素から脱しきれないまま、細石器の製作システムの中で攻玉ドリルを作らせていた [宗基 1984]²⁴⁾。

以上に見てきたバローチスターンのビーズ玉作りは、インダス文明期に至ってチャヌフ・ダローやロータルそれにドーラヴィラー遺跡にその生産拠点を取って代わられてしまう。ビーズ玉作りの舞台が交替する裏側では、ハラッパー文化をしてインダス文明を築き上げさせた経済的要因の一つである内陸交易をめぐって、ハラッパー文化とバローチスターンの諸文化が競合したことを想定させる [Shudai 2003]。

2 インダス文明の石製攻玉ドリル

インダス文明期の攻玉ドリルは、マッケイの報告以後しばらく等閑視され、文明以前の攻玉ドリルが注目されてきた。それは、遺跡研究の動向に拠るところが大きい。80年代後半以後に発見された新資料と新知見によって、攻玉技術は文明の前後で大きく異なっていたことが指摘された。端緒は、アーヘン大学とイタリア東オリエント研究所 (IsMEO) との共同遺跡調査によって、モエンジョ・ダロー遺跡から採集された石製攻玉ドリルの発見である [Vidale 1987]。

モエンジョ・ダロー遺跡出土の攻玉ドリル

ヴィダーレは、ラフマーン・デーリ遺跡出土例と同様の、細石刃に深いノッチを入れて作られる攻玉ドリルの類例をモエンジョ・ダロー遺跡にも発見し、報告している [Vidale 1987]²⁵⁾。それは、チャート製石刃に左右から深いノッチを入れて作業部を作りだし、リタッチで基部を三角形に成形する石製攻玉ドリルである。その作業部は短く、長いものでも0.6 cm弱である。これは、モエンジョ・ダロー遺跡でも短軸のビーズ玉作りが行なわれていたことを示す。しかし、ヴィダーレ報告の重要な点は、ドリルの基部横断面が矩形を呈し、作業部長が1.7 cmにおよぶタイプが示されたことにある。

報告当時には、作業部の長い攻玉ドリルがシャハリ・ソフター遺跡 (図7:5) とアムリー遺跡 (図7:7) だけから報じられていたこともあって、それらとの形態の類似に引きずられて、モエンジョ・ダローの石製攻玉ドリルも材質はフタナイトである、と報じられた。だが、後年、異なる石材を用いた、新たなタイプの攻玉ドリルだと指摘されるに至る [Kenoyer and Vidale 1993]。

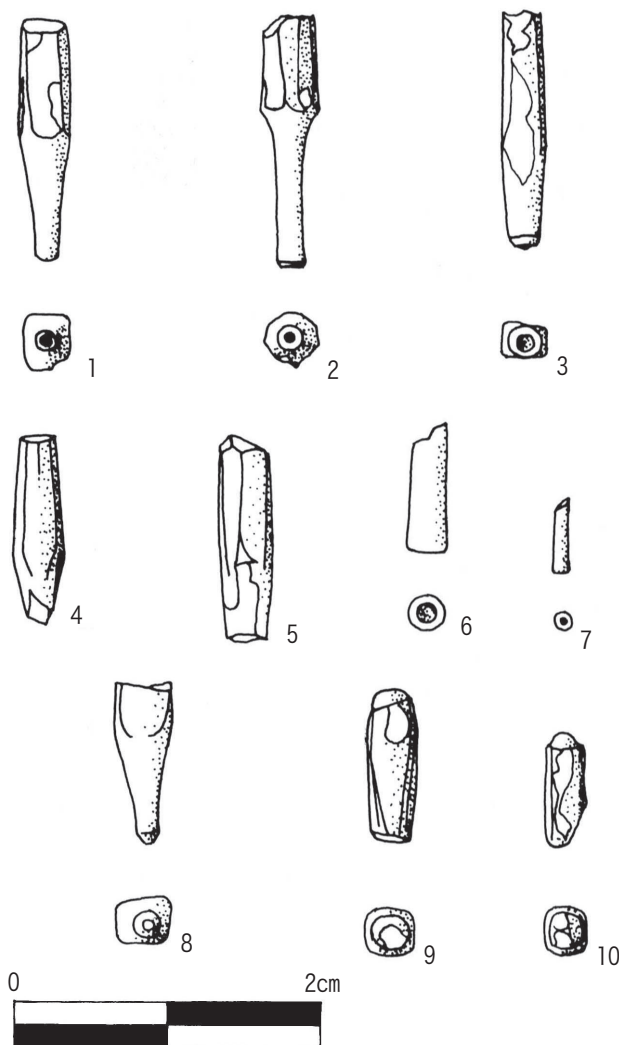


図8 モエンジョ・ダロー遺跡出土
攻玉・ドリル [Viciale 1987]

図8に示したモエンジョ・ダロー遺跡より出土した攻玉ドリルは、これまでに見てきた厚手の剥片や（細）石刃にリタッチやノッチを加えて、基部と作業部を作出したために、基部横断面が不整形や半円、または台形になっていた攻玉ドリルと異なる。ドリルの基部横断面は、矩形に面取りされている。横断面が矩形にならない例でも、そこには丁寧な面取りを見ることができる。こうした形態的特徴から、これらの攻玉ドリルは、細石刃を素材に加工されたものではなく、ドリル製作用に準備された棒状石材から製作されたと考えられる。棒状石材とその面取りは、原石の粗割りから始まって、面取りした棒状石材を作るビーズ玉素材成形工程と同じである（図10下段を参照）。すなわち、これらの攻玉ドリルの成形技法は、従来から玉作り集団内に存在した技術に立脚していることを示す。

こうして作られたドリルは、ドリル作業部の遺存長



ドリル先端の窪み

ビーズ玉孔座の突起

図9 チャヌフ・ダロー遺跡出土
アーネスタイト製攻玉・ドリル [Mackay 1943]

が1.7 cmを測り、ビーズ玉両端から行なう穿孔によって、少なくとも長さ3.4 cmの長軸ビーズ玉の穿孔が可能である。また、図8:2や作業部先端付近のみを残す図8:6・7に見られるように、作業先端部の上方がわずかに細くくびれる形状は、ビーズ玉穿孔時にドリル作業先端部以外の部位とビーズ孔との摩擦を防いで、長軸のビーズ玉穿孔を可能ならしめるために必要であったものと考えられる [Gwinnett and Gerelick 1979, 1981]。

チャヌフ・ダロー遺跡の攻玉ドリル

モエンジョ・ダロー遺跡で採集された基部横断面矩形攻玉ドリルと同形のものは、すでにマッケイによってチャヌフ・ダロー遺跡より出土したものが1937年に報告されていた。しかし、報告は実測図でなく、不鮮明で小さな写真図版であったため（図9上段）、その攻玉ドリルは、後にシャハリ・ソフター遺跡から出土したシャハリ・ソフター型と同例であると長らく考えられてきた [Piperno 1973a]。

マッケイは、チャヌフ・ダロー遺跡より出土した攻玉ドリルについて、「攻玉ドリルは、完形品の長さが7.8 cmを測り、基部が面取りされ、作業部の幅が0.25

～0.5 cmと細い。作業先端部には研磨材（金剛砂）を噛ませるための非常に小さな窪みが見られ」[Mackay 1937: 6]²⁶⁾、また、「攻玉ドリルの石材がモー・スケール硬度7を測る磁鉄鉱を含有したチャート製であるため、こうしたドリルでビーズ玉を穿孔するには金剛砂が欠かせなかったろう」と報告している[Mackay 1943: 210-211]。さらに、マッケイは、攻玉ドリル先端部の窪みとその窪みに対応するビーズ玉の底に残る突起の拡大写真を示した（図10下段）[Mackay 1943: Plt. 86b]。

こうした記述をもとに、ケノイヤーとヴィダーレは、チャヌフ・ダロー遺跡出土の攻玉ドリルを再調査し、それがモエンジョ・ダロー遺跡で採集された作業部の長い攻玉ドリルと同一形態であることを確認する。同時に、ケノイヤーらは、それらの攻玉ドリル資料と同材質で、作業先端部上方が細くなる形態の攻玉ドリルをハラッパー遺跡出土品にも再発見する[Kenoyer and Vidale 1993: 502]。

アーネスタイトとくびれ型円柱攻玉ドリル

ケノイヤーとヴィダーレは、モエンジョ・ダロー遺跡から採集した基部横断面矩形攻玉ドリルの材質分析を行ない、以下のような見解に達している。

岩質は一見、チャートや碧玉と思われる暗茶色から黒色、時に赤色斑紋の入る灰緑色から黄茶色を呈し、モー・スケールの硬度は7から8を測る。蛍光X線を用いた成分分析では、石英と珪線石を主成分として、斑紋部分は赤鉄鉱であると考えられるが、磁石（陶石）中にしばしば見られるムライト（mullite）らしき成分のピークも認められたという[Kenoyer and Vidale 1993: 502]。また、こうした成分は、シャハリ・ソフター遺跡出土の攻玉ドリルに用いられたフタナイトとは異なり、これまでに知られていない岩石であるとする。こうしてマッケイが報じた攻玉ドリルを再発見したケノイヤーらは、インダス文明で用いられた硬質石材をアーネスト・マッケイ(Ernest Mackay)にちなんで「アーネスタイト(Ernestite)」と暫定的に名付けた[同上論文: 503]²⁷⁾。さらに、アーネスタイトを素材として、上に見たような特色ある形態を呈する攻玉ドリルを「くびれ型円柱攻玉ドリル(Constricted Cylindrical Drill)」とし、シャハリ・ソフター型をはじめとする厚手の剥片やラフマーン・デーリ遺跡出土の(細)石刃を加工して製作された石製攻玉ドリルを「先細り型円柱攻玉ドリル(Tapered Cylindrical Drill)」として、両者を分別した[同上論文: 503-504]。「くびれ型円柱攻玉ドリル」の特徴とその重要性については、すでに上杉が論じているため、ここでは詳述しないが、次の点に留意しておきたい[上杉 2015]。

「くびれ型円柱攻玉ドリル」や「先細り型円柱攻玉

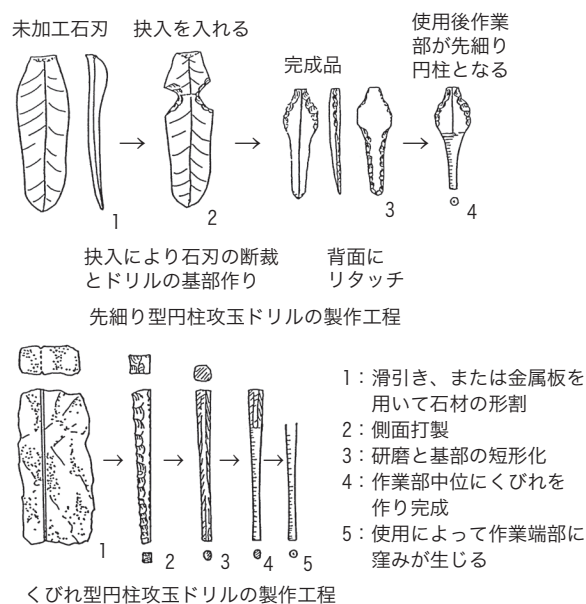


図10 南アジア石製攻玉ドリル製作模式図
[Kenoyer and Vidale 1993]

ドリル」の出土例に確認できるドリル作業先端部の窪みは、穿孔作業途上に金剛砂による磨滅で自ずと生み出されるものと考えられたが、その金剛砂と水を滞りなくの循環させるために、作業先端部上方のくびれは、とくに長軸ビーズ玉の穿孔にあつては、重要なドリル製作要素であるとしている²⁸⁾。

「くびれ型円柱攻玉ドリル」とインダス文明期ビーズ玉の特徴

石刃石器製作システムから分離し、ビーズ玉作りにおける石材加工技術に立脚した成形技法で作られた「くびれ型円柱攻玉ドリル」は、インダス文明盛期にビーズ玉製作を行なっていたモエンジョ・ダロー、チャヌフ・ダロー、ドーラヴィラー、ハラッパーそれにカーンメール、シカルプル(Shikarpur)、キラサ(Khirasa)遺跡から発見され、それぞれの遺跡の玉作り工房で用いられていた[Law 2011: 544; Prabhakar 2015; Prabhakar et al. 2012]²⁹⁾。他方、上杉がビーズ玉の出土を詳細に報じたファルマーナーやミタータル遺跡から「くびれ型円柱ドリル」は出土せず、出土した長軸ビーズ玉は域内交易で遺跡内にもたらされたとしている[上杉 2015]。なかでもドーラヴィラー遺跡出土ドリル120点の内、99.17%がアーネスタイト製で、「くびれ型円柱ドリル」はその内の19.1%であった。アーネスタイトの産出地の一つとしてドーラヴィラー遺跡のあるグジャラート一帯が挙げられるとともに「くびれ型円柱ドリル」そのものが長軸ビーズ玉穿孔に特化したドリルであったことが、その出土点数か

ら窺える [Kenoyer and Law 2009]。

インダス文明で用いられた「くびれ型円柱攻玉ドリル」の機能的特性は、くびれ部がビーズ玉の穿孔途上に金剛砂と水を十分に循環させ、それによって長軸のビーズ玉を破損せずに穿孔できることである。ビーズ玉穿孔は両端より行なうのが通例で、それはパッキングで穿孔される短軸の白玉でも、長軸の管玉や長棗玉でも同じである [Kenoyer 1997]。「先細り型円柱攻玉ドリル」を使用すれば、その孔は当然ビーズ玉の中央部に向けて次第に円錐形となりながら細くなる。しかし、インダス文明期の長軸ビーズ玉には、そうした穿孔径の縮小は見られない。とくに長さ7 cmから10 cmにおよぶ紅玉髓製長棗玉の穿孔では、中央へ向けて数回の段差を作りながら直径が小さくなる管状の孔が残されている。このことから、少なくとも2種類、時には3種類の、作業部直径の異なる「くびれ型円柱攻玉ドリル」が用いられた、と指摘される [Kenoyer 1992: 505-506]。ケノイヤーは、こうした攻玉ドリルの形態とその作業能力の違いから、インダス文明併行期のメソポタミアで出土するビーズ玉のうち、腐食文様紅玉髓玉と、長さが7 cmを超えるにもかかわらず両端から中央までの孔径が円錐形にならない紅玉髓と瑪瑙のビーズ玉をインダス文明産と判断している [Kenoyer 1992: 507]³⁰⁾。

3 ビーズ玉交易

マッケイ、ジャリージュ、ヴィダーレやラトナガルらは、インダス文明産ビーズ玉がメソポタミアから出土することをもって、インダス文明地域とメソポタミア地域との交易活動を論じる [Mackay 1937; Jarrige, C. and Tosi 1981; Vidale 1987; Ratnagar 2004]。

C. ジャリージュとトシは、ビーズ玉石材産出地と遺跡出土ビーズ玉の石材を比較して、関連する遺跡が交易を介してどのように関係したかを読み解こうとして、長距離交易路上にいくつかの加工集散地を想定した [Jarrige, C. and Tosi 1981]。

また、ヴィダーレは、モエンジョ・ダロー遺跡内に発見したビーズ玉製作工房跡の調査成果から、ビーズ玉は材質によってインダス文明域内と域外への搬出品とに分別されていた、と指摘する [Vidale 1987]。

さらに、ラトナガルは、ペルシア湾岸域からインダス文明圏に至る広範な地域の鉱物資源と植物資源を考古学資料・文献史料から詳細に抽出して、前4千年紀から前3千年紀における多地域間交換・交易の可能性を指摘する。なかでも、前3千年紀のイラン高原にシャハダードが台頭した結果、シャハダードを経由地として、インダス文明が陸路による西アジア交易網に参入した、とする点が注目される [Ratnagar 2004]。しかし、

インダス文明がメソポタミア地域に向けたラピス・ラズリの搬出地として対西方交易に参入したとする視点は、モエンジョ・ダロー遺跡内の玉作り工房より出土したラピス・ラズリの少なさと相容れない。

インダス文明域内の石材交易

西方地域の諸文化とインダス文明との交易が、イラン高原での文化動態と関わりをもっていたとするラトナガルの見解は、大枠で首肯できるものである。しかし、ヴィダーレがモエンジョ・ダロー遺跡の玉作り工房地域の調査で発見したラピス・ラズリ製ビーズ玉は、3片でしかない [Vidale 1987]³¹⁾。ラフマーン・デーリ遺跡より出土したビーズ玉の石材別出土量と比べても、出土量の少なさは歴然としていた (図6・11)。このように、インダス文明の玉作りは、ラピス・ラズリ製が極端に少ないことを特徴とし、総じて文明域外産の石材を用いた玉作りは低調である (図6)³²⁾。

他方、インダス文明では、文明領域南東部に位置するグジャラート (Gujarat) 地方とその周辺のキャンバイ (Cambay) 湾を取り巻く一帯に産出する紅玉髓を用いた腐食文様紅玉髓玉と [Trivedi 1964]³³⁾ 瑪瑙の大型長棗玉が数多く作られた [Kureshy 1977: 48; Survey of Pakistan 1986: 86; Law 2011]。長棗玉や腐食文様紅玉髓玉の石材は、文明の域内交易によりモエンジョ・ダロー遺跡、チャヌフ・ダロー遺跡やハラッパー遺跡の玉作り工房にもたらされていたと考えられる。そのため、「くびれ型円柱攻玉ドリル」を使った特殊な穿孔技術を生み出したインダス文明の玉作りは、文明領域内とその近隣に産出する石材を都市内の玉作り工房に集中させる域内交易の確立と確保によって成立し、そして維持されていたと考えられる。それゆえに、インダス文明にとって、石材の確保と同様に、製作した特殊なビーズ玉を域外へ搬出するための交易路の維

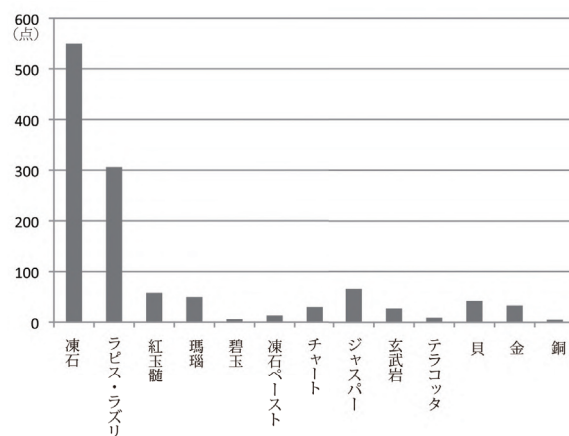


図11 ラフマーン・デーリ遺跡出土ビーズ玉材質別点数

持・確保が重要な社会的案件であったはずである。同時に、インダス文明は、それらを継続可能ならしめるために、何らかの力の行使と統制を必要としたであろう。

ビーズ玉作りと文明

現在、インダス文明と西方との接触を直接的に示すものは、メソポタミア各地から出土するインダス式印章に限られる。主に凍石を利用するインダス式の方盤状スタンプ印章は、キシュ [Mackay 1925: 697-8] とウル [Gadd 1932: no. 1] から出土している。しかし、インダス文字が解明されていない現在、印章の出土は、インダス文明の人間、または関わりのある者がメソポタミアの諸都市に存在していたことを示唆してくれるにとどまる。ビーズ玉作りをはじめとする工芸活動に関わる者が、どのように交易活動と関わっていたかは、不明とせざるをえない³⁴⁾。

他方、インダス平原の南北に遠く離れた複数遺跡で、それまでの「先細り型円柱攻玉ドリル」と大きく異なる特異な形態の「くびれ型円柱攻玉ドリル」を使ったビーズ玉製作の技術的斉一性と、ビーズ玉石材が広域にわたる複数遺跡に行き渡っていた状況は、文明域内での交通が間断なく、システムとして確立されていたことを示している。それは、文明の政治的・経済的機構の確立を前提としている [たとえば Shaffer 1982; Franke-Vogt 1993]³⁵⁾。

4 インダス文明におけるビーズ玉作り産業の位置づけ バローチスターンのビーズ玉作り

バローチスターンの諸遺跡におけるビーズ玉作りは、石器製作システムに基づいて、石刃を利用した、多分に突き錐の攻玉ドリルを使い、遅くとも前4千年紀前半から行なわれていた。前3千年紀前半にいたって、シャハリ・ソフター遺跡出土品を典型とする「先細り型円柱攻玉ドリル」を一部で採用した。しかし、そうしたドリルで穿孔されたバローチスターンのビーズ玉は、いきおい軸長の短い棗玉や管玉しか作ることができなかった。それでも、バローチスターンのビーズ玉作りは、文化領域内に産出する凍石を利用した他に、遠隔地に産出する瑪瑙などの貴石を用い、さらにファイアンス技法で着色した凍石で様々な貴石を模していた。なかでもラフマーン・デーリ遺跡では、アフガニスタン北東部のバダクシャーンに産出するラピス・ラズリ製のビーズ玉が全体の1/4を占めるほどに多く、玉作りは域内と同時に域外交易を前提としていた [宗基 1998b; Piperno 1973a]。

文明期になると、従来の「先細り型円柱攻玉ドリル」に加えて、石器製作システムから脱した、玉作りのための原石成形技法から生み出された新たな「くびれ型

円柱攻玉ドリル」が現れた。このドリルの出現によって、インダス文明は、メソポタミアのウルやキシュ、ニップールなどの諸遺跡から出土する紅玉髓製や瑪瑙製の長棗玉を対外交易製品として創出した。利用された石材は、紅玉髓が圧倒的多数を占め、アフガニスタンに産出するラピス・ラズリは激減する。インダス文明のビーズ玉作りは、新たに作り出した攻玉技術を文明域内に産出する石材を用いて、特色あるビーズ玉を作出するものであった。

域外交易を踏まえたバローチスターンの玉作りと域内交易を前提としたインダス文明の玉作りの存立背景の違いは、穿孔技術の相違の他に、インダス文明社会の特質をも示している。その特質とは、「くびれ型円柱攻玉ドリル」によるビーズ玉製作技術を文明域内の大規模都市工房に浸透せしめ、それら工房へのビーズ玉石材の分配経路を確立・維持せしめた社会体制である。そして、石材の入手や分配経路の確保は、交易システムの再構成がその背景にあり、文明成立を可能ならしめた要因であった³⁶⁾。

バローチスターン丘陵の文化とハラッパー文化

第4の課題として、文明形成期におけるバローチスターン丘陵とインダス平原部それぞれの社会文化の関係について、土器から考える。

文明直前の土器様式

筆者は、ムガルがコート・ディジー文化の指標とした齔付（広口短頸）壺の広がりから、コート・ディジー文化を2つの類型、すなわちパンジャープ類型とシンド類型に分け、またゴーマル平野からパンジャープ北部をゴーマル文化とした。同時期に齔付（広口短頸）壺を内包しないバローチスターンのメヘルガルをはじめとするクエッタ文化圏は、これらとは一線を画していた、とした [宗基 1998a]。

インダス文明成立以前、いわゆる初期ハラッパー文化（または先ハラッパー文化）併行期の土器文化を比較検討すると、肩と頸部が明瞭となった爪形口縁の壺8類と、「端反口縁」形態の齔付壺と鉢のそれぞれ7類とした土器器型がインダス平原部のコート・ディジー文化の指標であった。平原北西部のゴーマル平野から後に仏教文化が栄えたパンジャープ北部のタクシラーン一帯のシスワル高原にあるサライー・コラー遺跡の土器群に存在するそれらの器型は、コート・ディジー文化からの影響によるものであるが、コート・ディジー文化に取り込まれることはなかった。

パンジャープのコート・ディジー式土器文化と平原北西部の先ハラッパー土器文化が、早い時期から接触

を有しており、パンジャブ地方とインダス平原北西部の密接な関係は、彩文手法にも現れている。バローチスターン丘陵の土器伝統を色濃く表わすラフマーン・デーリ遺跡ⅠA期の淡黄色胎土とⅠB期以降の赤褐色胎土に赤色スリッを全面に施した壺2類は、黒色顔料で描く幾何学文帯の下地に白色ペーストが塗布される。この彩文帯に白色ペーストを塗布する手法は、コート・ディジー式土器以前のソーティー式土器に数多く見られるものである³⁷⁾。こうしたコート・ディジー式土器文化とゴーマル平野を中心とするインダス平原北西部土器文化の接触は、ゴーマル平野の土器群に特徴的な壺1類と5類の器型に鏝を付けた鏝付壺1類と5類を製作せしめ、単純な新器種の模倣と導入に終わらず、自文化内の土器器種として消化していた。このように、両文化間の文化交渉は、一方が他方を包摂せず、両文化が併存し続けたことを示している。

上杉と小茄子川は、コート・ディジー遺跡とカーリーバンガン遺跡より出土した土器を検討して、両者はインダス平原に併存した異なる土器文化に属するとし、前者を南方型コート・ディジー文化、後者をソーティー式土器文化と捉えた上で、ゴーマル平野のラフマーン・デーリⅡ期以降の土器文化を北方型コート・ディジー式土器文化と位置づけている〔上杉・小茄子川2008〕。確かに、器面調整などの調整技法や壺、鉢、坏に付けられた脚や高い輪高台は、カーリーバンガン遺跡より出土した土器群の特徴であり、コート・ディジー遺跡より出土した土器群と同一の土器文化とは言えない。しかし、3類の「爪形口縁」から発達した7類の「端反口縁」の鉢は、コート・ディジーとカーリーバンガン両遺跡出土土器の明らかな特徴であり、これらの土器文化が北西部のゴーマル平野の土器に影響を与えたと考えたい。

以上の検討から、平原部の先ハラッパー文化の土器群を様にコート・ディジー式土器とすることはできず、カーリーバンガン遺跡のあるパンジャブ地方東部をコート・ディジー式土器文化パンジャブ類型、コート・ディジー遺跡のあるシンド地方をコート・ディジー式土器文化シンド類型と捉えられる。そして、ゴーマル平野からサライ・コラー遺跡の立地するパンジャブ北西部にまで広がり、コート・ディジー式土器文化と併存した土器群をゴーマル式土器と規定することができる。

インダス平原からゴーマル平野に展開したインダス文明以前の諸土器文化を見渡した時、ドゥラーニーが言うように、ラフマーン・デーリ遺跡をコート・ディジー文化揺籃の地〔Durrani 1988: 27-30〕と捉えるのではなく、ラフマーン・デーリⅡ期を境として、ゴーマル平野の文化がバローチスターン丘陵に閉じこもっ

ていた状態から、インダス平原の文化により柔軟に接触する過程で、パンジャブ地方北西部を包摂する文化へと変化していったと捉えられる。そして、その過程において、先にゴーマル平野の土器文化にとって異質であるとした器型が平原部のコート・ディジー式土器文化からの影響と、その咀嚼結果として現れたのである。

それでは、インダス平原部の文化と接触しながらパンジャブ地方北西部を包摂するまでに文化領域を拡大したゴーマル平野の文化的変化は、インダス文明の形成とどのような関わりをもったのだろうか。鎌田は、コート・ディジー文化からハラッパー文化への移行期とされるコート・ディジー遺跡の第7層以降から出土する土器に、ハラッパー式土器の初期相を認め、第7～3層をインダス文明の前期初頭に、そして、それ以前のコート・ディジー文化をインダス文明早期と捉えようとした〔鎌田2000〕³⁸⁾。こうした鎌田の議論を踏まえるならば、ラフマーン・デーリⅡ期以降がインダス文明早期に、そしてⅢ期はインダス文明前期に相当することになるが、今一度ラフマーン・デーリ遺跡の土器様相を確認することとしたい。

ゴーマル式土器とハラッパー文化

ドゥラーニーは、遺跡出土試料の放射性炭素14測定値結果から、ラフマーン・デーリⅡ期を前2850～2500年頃のコート・ディジー文化、Ⅲ期を前2500～前1900年頃まで下るハラッパー文化とした〔Durrani 1988: 29, 139〕。

筆者の土器分析によれば、ラフマーン・デーリⅡ～Ⅲ期の土器群の器種構成には、壺8類と鉢7類を指標とするコート・ディジー式土器を見いだすことができなかったものの、Ⅱ期出土の鏝付壺の葉付交差円文やⅢA期の魚鱗文に、鎌田の言うインダス文明前期第1期の、ⅢB期の水草文にインダス文明前期第2期の文様からの影響を窺える。このことから、ラフマーン・デーリⅡ期は、コート・ディジー文化併行からインダス文明最初期に相当する時期、Ⅲ期の遅くともⅢB期はインダス文明前期初頭に併行したと考えられる。それでも、土器器型様式からは、ラフマーン・デーリ遺跡の文化はⅢ期になってもハラッパー文化に変容せず、ゴーマル式土器文化を保持し続けていたことを示している(図12、表1)。

つまり、ゴーマル平野の先ハラッパー文化は、平原部のハラッパー文化・インダス文明の形成と直接的に関わらず、文明形成を横に見ながら併存していたことになる。こうした状況は、メヘルガル遺跡がハラッパー文化の空間的拡大とほぼ同時に衰退して、ハラッパー文化に文化交替したカッチー平野のクエッタ式土器文化とは異なる。

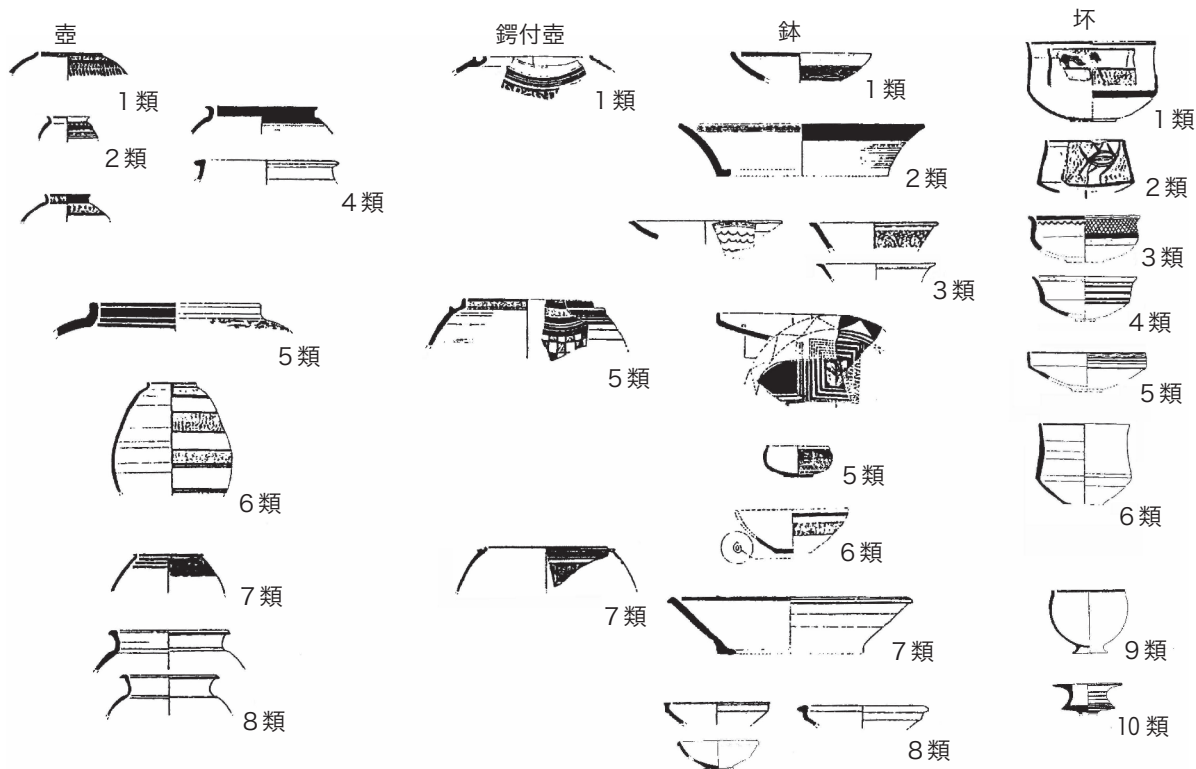


図 12 初期ハラッパー文化期土器器型分類図 [宗基 1998a]

表 1 初期ハラッパー文化期土器器型別出土遺跡一覧表 [宗基 1998a]

	ラフマン・デーリ	グムラー	サライコラー	カーリーバンガン	コート・ディジー
ラフマン・デーリ時期区分					
Ⅲb期	壺1・2・3・4・5・6・7類 罽付壺1・5類 鉢1・2・3・6類 皿2類 坏1・2・3・4・5・6類	Ⅳ期 壺5・8類 罽付壺5類 鉢1・3・7類 坏1・4類 ハラッパー式有孔土器			
ⅢA期	壺1・(2)・5・6類 罽付壺1・5類 鉢1・2・4類 皿1類 坏1類	Ⅲ期 壺1・3・4類 罽付壺1・5類 鉢1・2・6類 坏2類	Ⅱ期 壺1・2・3類 罽付壺5類 鉢1・2・6・(8)類 坏1・2類	Ⅰ期 壺2・7・(8)類 罽付壺7類 鉢3・7・8・9・9'類 坏2・3・9・10類	第4層以下 罽付壺7類 鉢3・7・8類
Ⅱ期	壺1・2・3・4 鉢1・4類 皿1類 坏1・2類				
ⅠB期	壺1・2・3・6類 鉢1・4・5類 坏1・2類	Ⅱ期 壺1・3・4・5・(7)類 坏1・2類 罽付壺7類近似型			
ⅠA期	壺1・2類 坏1・2類 罽付壺1類(混入?)				
			Ⅰ期 壺2類		

バローチスタン丘陵文化の衰退年代

土器文様変遷の視点から先ハラッパー期からインダス文明前期にかけての地域文化の融合と地域間交渉の再編に言及した上杉と小茄子川の論考における土器文様の相互関係については、首肯すべき点は多々ある。ただし、土器文様の融合と再編が行なわれたハラッパー式土器成立期の年代には、問題がある。彼らは、その年代をメヘルガル遺跡とラフマーン・デーリ遺跡の終末期であり、コート・ディジー式土器の末期と同時であったとする [上杉・小茄子川 2008: 105]。

前稿で記したように、メヘルガル遺跡最末期には、すでにハラッパー式土器が同時併存していたことは明らかであり、その後、カッチー平野にハラッパー文化が進出するのとはほぼ同時に、メヘルガル遺跡は衰退する。上杉らの論は、土器文様変遷の視点に立ったハラッパー式土器成立の論理が優先されるあまり、バローチスタンのクエッタ式土器やゴーマル式土器がハラッパー文化に吸収され、文化さえも飲み込まれたとする解釈であり、実際のカッチー平野やゴーマル平野の遺跡の盛衰と一致しない。

こうした時系列の矛盾を解消するため、ハラッパー文化の文化変容をより詳細に検討した小茄子川は、鎌田の提唱するインダス文明前期第1期に相当するコート・ディジー遺跡の第7～4層を先ハラッパー期からハラッパー式土器が成立するまでの「移行期」とする見解を示している [小茄子川 2008a]。「移行期」を経た後に、ハラッパー式土器が成立したとすれば、コート・ディジー遺跡第3層以降の時期にメヘルガル遺跡が衰退したとの解釈も可能になろう。いずれにしてもメヘルガル遺跡がハラッパー式土器成立後に衰亡していることは、遺物の出土状況から考えて間違いない。そして、ラフマーン・デーリ遺跡についても、ゴーマル式土器は小茄子川の提起する「移行期」の後にハラッパー式土器と接触したはずである。それゆえに、ラフマーン・デーリⅢB期に「移行期」より後のインダス文明前期第2期の水草文がゴーマル式土器に描かれることになった。同様の考え方は、バンヌー盆地の調査を続けているファリド・ハーンらも暗示している [Thomas *et al.* 1997]。

以上の検討を踏まえて、筆者は、ゴーマル平野におけるラフマーン・デーリ遺跡の衰退をハラッパー文化前期初頭の前2500～前2400年頃前後と考える。そして、ラフマーン・デーリ遺跡に比べて、小規模な集落であったグムラー遺跡のⅣ期は、有孔土器が現れたハラッパー文化前期後半頃の前2300年頃までハラッパー式土器とゴーマル式土器が混在して続いたと考えたい。

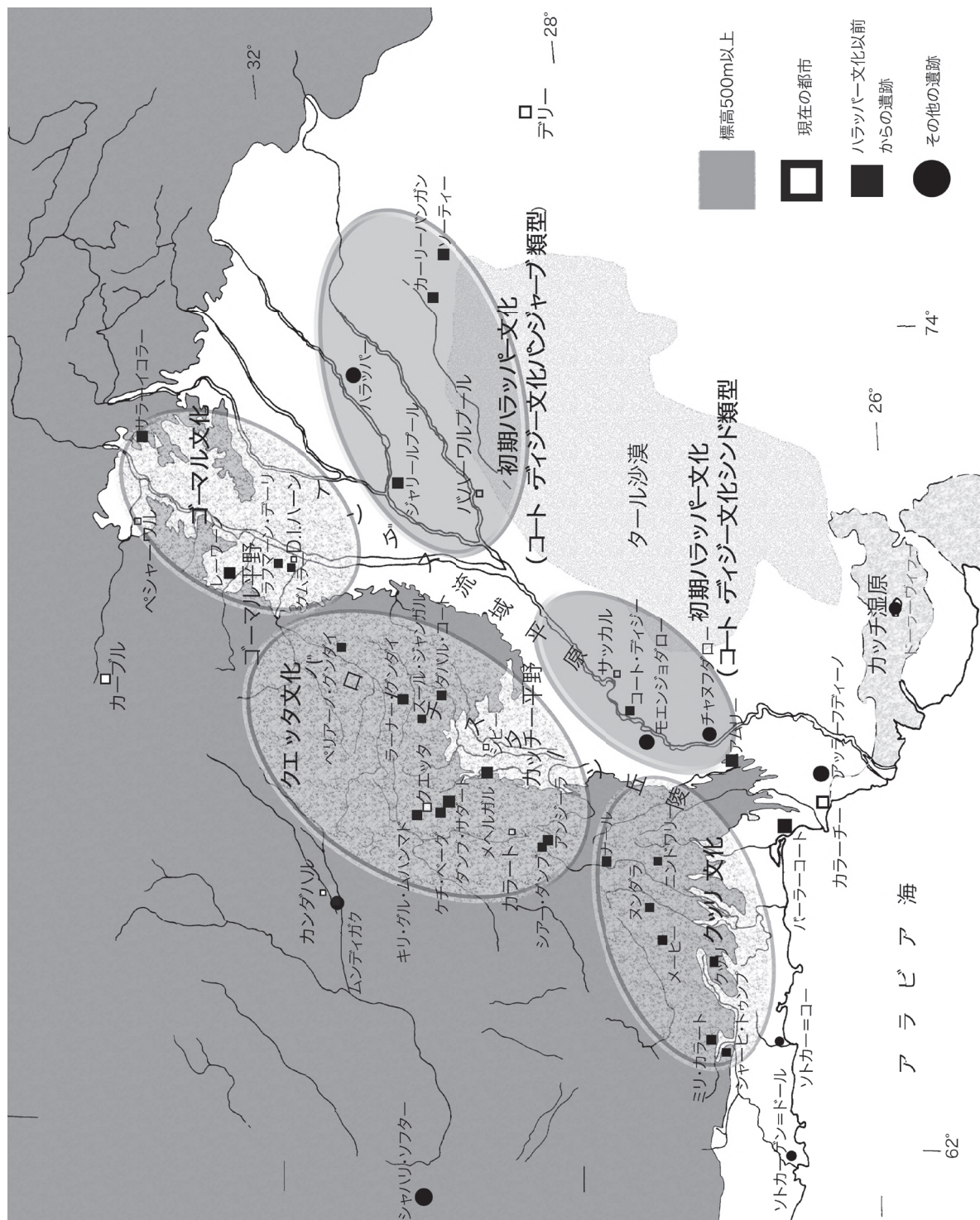
ゴーマル文化の提唱

コート・ディジー文化との接触を媒介として、バローチスタン文化の土器伝統から新たにゴーマル式土器を生み出したラフマーン・デーリⅡ期の文化は、パンジャブ地方北西部のサライー・コラー遺跡にまで広がり、コート・ディジー式土器文化パンジャブ類型との交渉を密接に行なっていた。これによって、インダス文明興隆以前のインド亜大陸北西部には、カッチー平野からバローチスタン北・中部に広がるクエッタ式土器文化、ゴーマル平野からパンジャブ地方北西部に広がるゴーマル式土器文化、そしてインダス平原のコート・ディジー式土器文化パンジャブ類型とシンド類型の諸文化が、それぞれにメヘルガル遺跡、ラフマーン・デーリ遺跡、カーリーバンガン遺跡やコート・ディジー遺跡を拠点遺跡として展開していたと捉え直すことができる。そして、ゴーマル式土器文化は、ラフマーン・デーリ遺跡のⅢB期でインダス文明前期初頭と併存した。

このようなインダス平原北西部にまで広がり、コート・ディジー文化やハラッパー文化とも併存しながら、独自の土器文化を保持し続けたラフマーン・デーリⅡ期～Ⅲ期以降の文化を新たな文化名として「ゴーマル文化」と呼ぶことが許されるだろう。したがって、これ以前にゴーマル平野からバンヌー盆地のトーチ川流域に広がったラフマーン・デーリⅠ期の文化をゴーマル文化の生成期としての「トーチ・ゴーマル期」とする。他方、丘陵地に展開した先史文化として、バローチスタン文化と把握した文化の内、クエッタ式土器が展開した時期と地域の文化をクエッタ文化としたい (図13)。

なお、上杉が指摘するように、メヘルガル遺跡最終期に相当するⅦc期に、形骸化した罌部を口縁部外面に貼り付けた罌付壺が1点出土している [Jarrige *et al.* 1995]。この他に上杉は、メヘルガル近郊のラール・シャー遺跡、イランのヘルマンド地方に位置するシャハリ・ソフター遺跡から同様の罌付 (広口短頸) 壺が出土するとして、これらが文明成立直前のシンド地方からカッチー平野、そしてシャハリ・ソフターまでに拡がる地域間文化交流を示すもの、としているが、下にみるように首肯けない [上杉 2008b ; Pracchia 1985]。

ラール・シャー出土土器群は、鉢3類と8類に罌付壺を交えたメヘルガルⅦc期に併行するものとされる。しかし、罌付き壺は7類ではなく、1類により近似した口縁を持つことに注意すべきである。また同様の罌付き壺がシャハリ・ソフター遺跡Ⅲ期からⅣ期の年代再考を迫る資料として提示されたテペ・ルーディ・ビヤバーン (Tepe Rud-i Biyaban) から出土している。これはラール・シャー遺跡の土器窯出土資料と近似するとされるが、やはりインダス平原部の罌付き壺7



類とは異なる口縁形態である [Biscione 1987]。メヘルガル遺跡地域、いわばクエッタ文化におけるコート・ディジー文化シンド類型からの影響は、クエッタ式土器文化の最終期であり、ゴーマル文化がコート・ディジー文化パンジャブ類型からの影響を自文化内で消化していたのとは異なり、模倣の域にとどま

る。ラフマン・デーリ遺跡出土資料のように、伝統的壺形式に鍔を付けたような自文化内での型式消化はみられない。そして、何よりもテペ・ルーディ・ピヤバーンが前 2300 年頃とされる年代観とあいまって、やや特異な器型の鍔付壺の出土をもって、シンド地方からイラン東部にまでに拡がる文明形成に向けた地域間文

化交流と捉えることはできない。

他方、小茄子川らによって主張されるクエッタ文化の土器文様意匠の導入がインダス文明のハラッパー文化形成の一要因であったとする見解も、上杉によるバローチスターンからシャハリ・ソフターに拡がる丘陵域文化とコート・ディジー文化の交流と通じる視点を有している。それは、インダス平原部の文化を文明形成へ向けた主導的主体に捉えるものである。そこには、なぜインダス平原部の文化が丘陵域の文化を導入する必要があったのかという視点の欠如がある。

上杉らの主張するクエッタ文化とインダス平原部のコート・ディジー文化の文化交渉を両地域における罌付（広口短頸）壺の存在に見ようとする見解は、コート・ディジー文化に通有の外反口縁から爪形口縁への展開をメヘルガル遺跡近傍のナウシャロー遺跡ⅠD期からⅡ期に指摘するキヴロンにも通じるが[Quivron 1994]、そうした展開は平原部でより早く始まっており、ハラッパー期のナウシャローⅡ期に現れるそうした器型変化は、文化交渉でなく、文化の移入と捉えるべきである。この点に関して、セカレリらも先史土器の技術展開が一線的でなく、受け入れ手の社会環境が大きく影響していたとして、本稿でゴーマル土器文化を設定したようにトーチ・ゴーマル土器文化を設定する[Cecarelli and Petrie 2020]。こうした思考法は日本の歴史考古学では良く示されているが、南アジア先史考古学でも重要な視点であろう[宗基 2018、2019]。

他方、バローチスターン丘陵の土器文化、とくにメヘルガル遺跡Ⅳ・Ⅴ期の台付き広口ゴブレット型容器の器型とケチ・ベグ式多色彩文が南西イラン地域との関連で考えるべきことが、ここ数年のジローフト近郊のコナール・サンダル南遺跡出土土器から強く示唆されている[Vidale and Deset 2013]。イラン高原やアフガニスタンを含めた中央アジアとの文化交渉を重ねてきたバローチスターンの文化が、瑪瑙や紅玉髓の獲得を介して、インダス平原のコート・ディジーなどと接触を持ち続けていたが、土器文化の視点からは西方との文化交渉がより強かったとしえる。そうした環境のなかで、バローチスターン丘陵とインダス平原の文化交渉がどのようにして、文明興起直前に強まったのかが、バローチスターンの文化展開とインダス文明の形成において重要な視点である。

インダス文明が西方のバローチスターン丘陵地域へ進展、そして浸透していく過程で、クエッタ文化も、そしてゴーマル文化もやがて衰亡・衰退していく。その時期が異なったのは、クエッタ文化とゴーマル文化のインダス文明への対応の相違であると同時に、インダス文明側が他文化と接触する際に、地域ごとに異なる

対応を採ったであろうことを示している。こうした対応の差違は、拠点集落を核としてクエッタ文化とゴーマル文化における凝集力の強弱に起因したのではないだろうか。その強弱の要因として、インダス文明遺跡モエンジョ・ダロー出土やムンディガク遺跡出土石製男性像と通底する額飾りと横長の細い目（アーモンド・アイ）を持った男性土偶を出現させ、より強い社会的凝集力を内包したクエッタ文化と、基壇を設けた階層化社会でありながら上述のような男性像を生み出せなかったゴーマル文化の社会的質の差異と見做すことが許されるだろう。

都市の成立とインダス文明の形成

これまでの議論を踏まえて、交易システムの観点から改めて当初に掲げた課題を検討する。

1 先史～インダス文明の交易形態

広大な領域に広がったインダス文明がシンド地方から拡大したのではないかとの議論は、文明発見当初からあり、また近年では小茄子川などが主張している[小茄子川 2016]。それでも、ほぼ等間隔に位置するインダス文明大規模遺跡のハラッパー、モエンジョ・ダロー、ガーンウェリワラー[Mughal 1990]、ドーラーヴィラー[Bisht 1999]のいずれが文明期の中心地であったかは、インダス文明政体論議にあつて様々である。しかし、これら大規模遺跡ごとに、または文明内部に、複数の政治集団の存否とその競合の中で、文明が形成されたかを問えるまでに研究は深まっていない。それでも、主要な都市遺跡は、すべてが河岸、または潟湖に面し、河川・海上交通の要所に位置しており、文明形成において、交易と交通が重要な要素となったことは容易に想定できる。

ここではインダス文明がその形成過程で、西方の丘陵地へと文明領域を拡大する際に、どのような目的を持ち、また従前の諸文化社会とどのような関係を築いたのかを、ビーズ玉交易を整理する中で考えたい。

前3千年紀前半のビーズ玉交易路とバローチスターンの交易形態

前3千年紀前半のバローチスターン丘陵周辺で、攻玉ドリルを用いてビーズ玉を製作した主な加工地は、南東イランのシャハリ・ソフター遺跡、アフガニスタンのムンディガク遺跡、バローチスターンのメヘルガル遺跡、ラフマーン・デーリ遺跡、シェーリ・ハーン・トラカイ遺跡、サライー・コラー遺跡、それにアムリー遺跡である。バローチスターン丘陵のビーズ玉作りに用いられた石材は、ラフマーン・デーリ遺跡より出土したビーズ玉に見たように、ラピス・ラズリと凍石が

そのほとんどを占め、それに瑪瑙と紅玉髓が続く。他にも碧玉、蛇文岩、チャートなども利用されていたが、その量は少ない。

ラピス・ラズリの産出地は、アフガニスタン北東部のバダクシャー地方がとみに有名である [Vidale 2000; Vidale and Lazzari (eds.) 2017]³⁹⁾。バダクシャーにラピス・ラズリ採掘や交易を担う集落跡は発見されていないが、おそらくナマズガー遺跡などの南トルクメニアを介して、再分配地であるムンディガク遺跡へ、そして大規模なラピス・ラズリ加工地であったシャハリ・ソフター遺跡へと運び込まれたと考えられる [Jarrige, C. and Tosi 1981]。シャハリ・ソフター遺跡とムンディガク遺跡からは、ラピス・ラズリの粗割から完成までの玉作り製作工程を復元できる削片が出土している [de Saizieu and Casanova 1993]。他方、ラフマーン・デーリ遺跡より出土したラピス・ラズリには粗割を示す例はなく、大きくても 2 cm ほどの破片である [宗基 1998b]。ラピス・ラズリがバローチスタン地域へ運ばれたルートは、南トルクメニアからムンディガク遺跡を経てクエッタへ、さらに他のバローチスタン丘陵の各地へと再々分配されたと思われる。

凍石は、バローチスタン丘陵のジョーブ地区のムスリル・バークに超塩基性岩として産出し、早くはメヘルガル遺跡Ⅲ期の玉作り工房跡で利用された。他方、ゴーマル文化のラフマーン・デーリ遺跡でも盛んにビーズ玉に加工された凍石は、白色で、ペーストに加工された例も多い。こうした加熱加工によって白化する凍石はドロマイト（苦灰岩・白雲石）であり、カイバル・パシュトゥンフワー州からスワート（Swat）やハザラ（Hazara）の山岳地域に産出する。ゴーマル文化のサライー・カラー遺跡などを介して入手したと考えられる [Law 2011]⁴⁰⁾。

ゴーマル平野のラフマーン・デーリ遺跡から出土したビーズ玉石材の種類から看取できる玉作りは、ムンディガク遺跡やシャハリ・ソフター遺跡へと連なる、ラピス・ラズリ交易網の一角に参画してラピス・ラズリを入手し、凍石を北部山岳地帯から近距離の自文化域内の交易で獲得していたと考えられる。他方、カッチー平野のメヘルガル遺跡のビーズ玉作りでは、イランのヘルマンド地区産とグジャラートのカンデク（Khandek）産の瑪瑙を利用している [Law 2011]。インダス平原の西方に広がる丘陵地のゴーマル文化とクエッタ文化は、地理的に遠く離れ、石材もその獲得経路も異なっていた。このように前 3 千年紀のゴーマル文化とクエッタ文化では、ムンディガク遺跡を再分配中継地としたラピス・ラズリの他は、石材産出地近郊で石材が集荷された後に、直接、街の玉作り工房へと運ばれていたゴーマル文化と、グジャラートの産出地

からおそらくはコート・ディジー文化シンド類型集落を経て瑪瑙や紅玉髓を、そして近隣から超塩基性凍石を入手していたクエッタ文化であったと考えられる（図 14）。

ビーズ玉石材が産出しない、東方の平原部にあるハラッパー遺跡の前 3000 年前後に当たるハークラー文化期⁴¹⁾からは、鹹水産貝製バングルの未成品と製品が出土している。これは、アラビア海沿岸から搬入した素材で貝製バングルが遺跡内で製作されていたことを示している [Kenoyer and Meadow 2000; Kenoyer 2001] が、ラピス・ラズリ、紅玉髓それに凍石製ビーズ玉製作は認められていない [Kenoyer 1991]。この時期の攻玉ドリルの出土は、バローチスタン文化遺跡に限られていたように、平原部に位置したコート・ディジー文化は、製品としての貴石製ビーズ玉をアムリー、メヘルガル、ラフマーン・デーリのバローチスタンの諸遺跡から搬入する消費地であり、他方では、グジャラート産の瑪瑙の搬出中継地であったと考えて良い。

このような前 3 千年紀前半のビーズ玉石材と製品の交換・交易は、隣接地域との互酬交換とビーズ玉加工地との中心地再分配が組み合わさった短・中距離の交換形態であったと考えられる（図 15）。

交易の対価

バローチスタン丘陵内の採石集団と、シンドを仲介としてグジャラートからもたらされた原石、そしてと平原部に搬出された製品としてのビーズ玉に対する対価は何であったろうか。

バローチスタンの諸遺跡は、丘陵内盆地とその麓に位置して、季節的な降雨を利用したムギ類を中心とする農耕を行っていた [Meadow 1982, 1989]。他方、インダス平原のコート・ディジー文化やそれ以前のハークラー文化もインダス平原に位置するとはいえ、灌漑を行わない溢流農耕という河川氾濫を利用した農法でムギ類を栽培していた [小西 1970; Miller 2006]。いずれの地域も自然環境に依存した農法で、単位面積あたりの収量はそれほど変わらなかったろうが、平原部の耕地面積はバローチスタン丘陵に比べて河川流域面積が広大であったと思われ、余剰穀物がビーズ玉製品の対価物として、バローチスタン丘陵の人々に渡されたと考えられる。また、綿花、および綿織物も主たる交換品になっていたろう [Meadow 1989; Singh 1994: 23; Fuller 2008; チャットパーディヤー 1992: 323-326]。バローチスタン丘陵の気候では成育しない綿花や綿織物の方が、ムギ類よりも、より有利な対価物であったかもしれない。また、バローチスタン丘陵内部での石材産出地と玉作り遺跡との交換においても、農作物の他

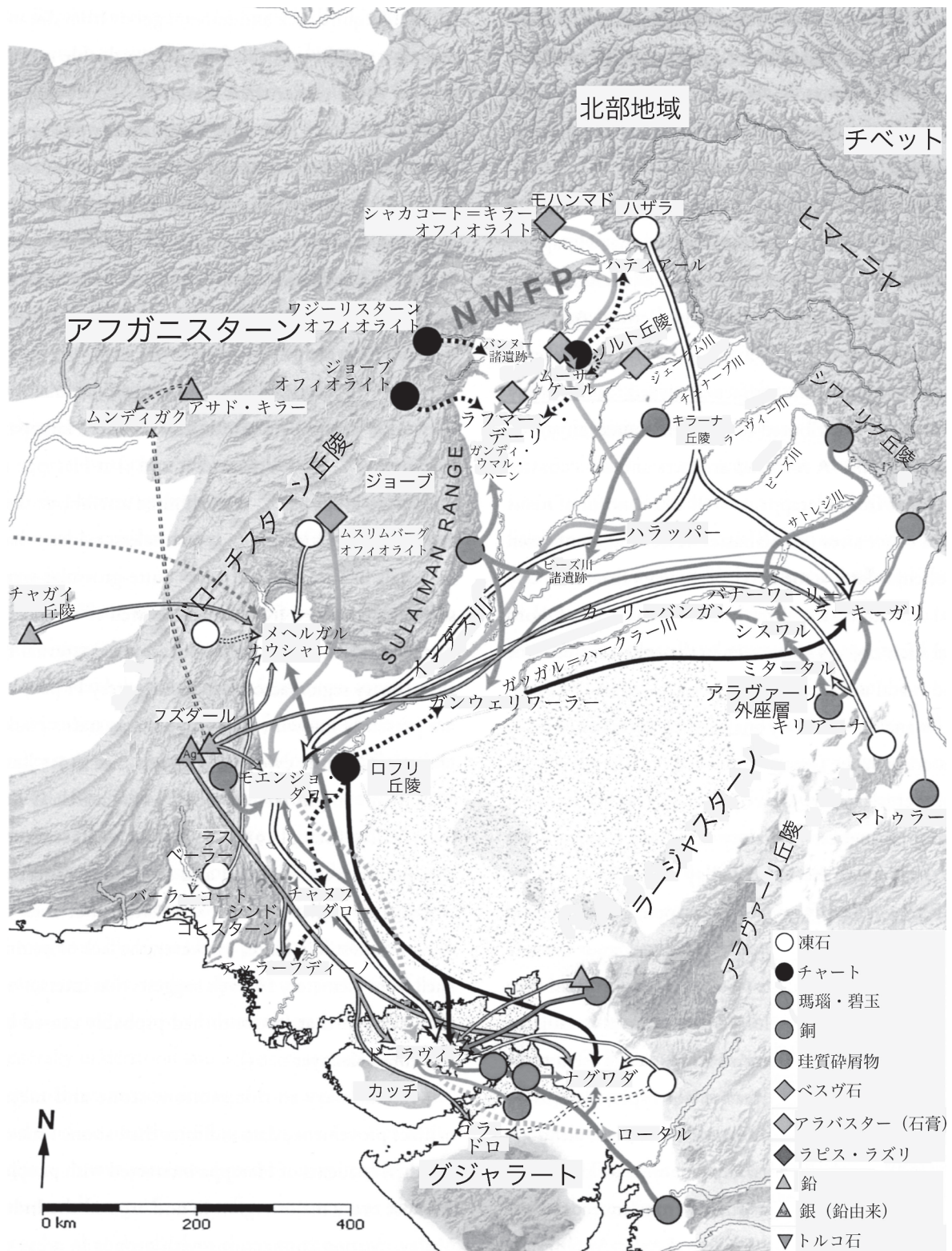


図 14 文明以前からインダス文明期における石材取得網 [Law 2001: 477] を一部改変

に、こうした平原部集落から入手した綿製品が用いられた可能性は高い。

インダス文明の交易形態

従前からの交換・交易形態は、インダス文明期にどのように変化したのだろうか。インダス文明の交易形態をビーズ玉交易における遺跡および地域が果たした

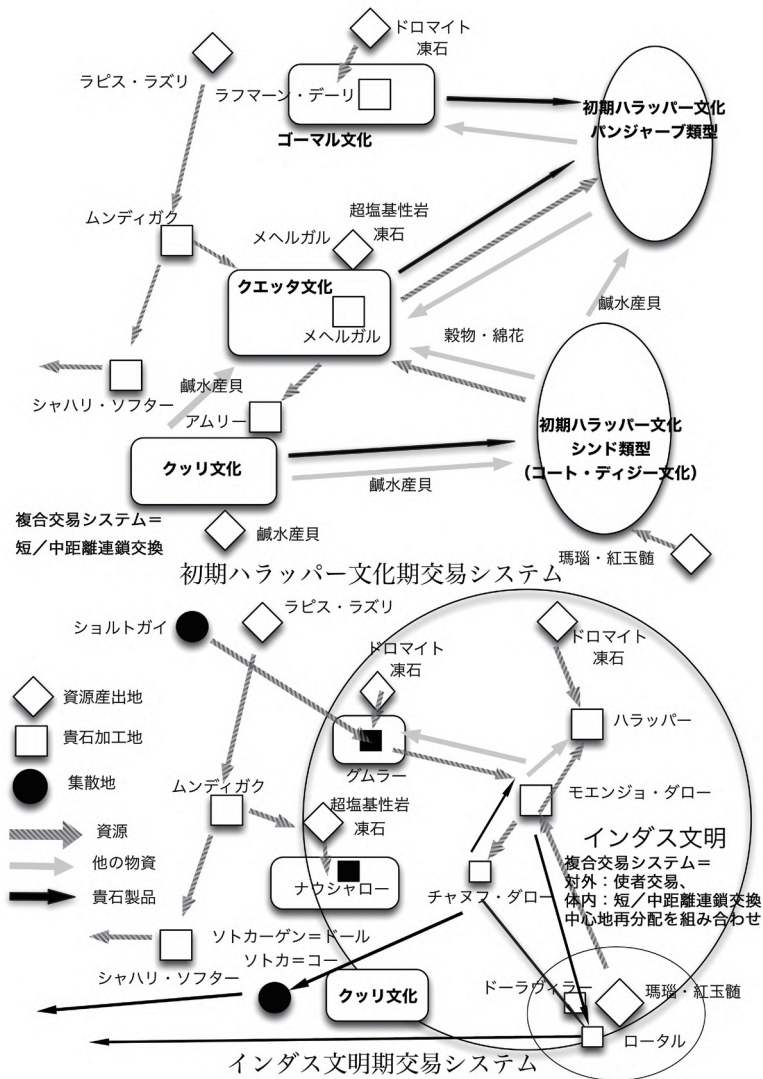


図 15 交易システム概念図

役割の推移から検討する。

玉作りを活発に行なったゴーマル文化のラフマーン・デーリ遺跡は、インダス文明前期にかけて衰微したが、近隣のグムラー遺跡は、そのIV期にハラッパー式土器を混在させて、ハラッパー文化との併存を続け、ゴーマル平野の拠点集落となった。同様に、クエッタ文化のカッチー平野は、ハラッパー文化と接触した直後に衰亡したメヘルガル遺跡に代わって、ナウシャロー遺跡がそのII期にハラッパー文化の拠点となった。

この文明期ナウシャロー遺跡から興味深い調査結果が報じられている [Jarrige, C. 1994]。それは、インダス文明前期にあたる前 2500 ～ 2400 年頃のナウシャロー遺跡II期のビーズ玉工房跡から 100 点強の凍石製、15 点の紅玉髄製、瑪瑙製とラピス・ラズリ製のそれぞれ 5 点のビーズ玉が発見されている [de

Saizieu and Bouquillion 1997: 290]。この凍石は従来からのムスリル・バーク産の他に、南バローチスターンのやはり超塩基性岩も含まれていた。そして、前 2400 ～ 2100 年頃のIII期の家屋 (700 m) から出土した、土器を除く遺物総量の 20.79% (600 点ほど) がビーズ玉で占められていたが、そのほとんどは紅玉髄の長棗玉を模倣した土製玉であった。一般住民が身に纏うことができたビーズ玉に土製がいかに多かったかを知ることができる。他方、文明期にビーズ玉製作を行っていたハラッパー遺跡からは、多くの施釉凍石や凍石ペースト製ビーズ玉が表面採集されているが [Miller 2000]、凍石は文明に先立つラヴィー期以来用いているシワリク (Siwalik) 産の他に、それと同じくドロマイトであるハザラ産やカイバル・パシュトゥンフワー産を加えている [Law 2011]。バローチスターン丘陵と平原部では用いる、そして採掘される凍石が異なり、平原部文化住民の白色への嗜好が強かったことを理解できる。

他方、凍石とは異なる交易形態を示すのが、紅玉髄産出地のグジャラートである [Trivedi 1964]。グジャラートは、インダス文明領域の南東端に位置し、アラビア海に面したサウラーシュトラ (Saurashtra) 半島

とキャンベイ湾を挟んだ東方対岸の地からなる。インダス文明期には、キャンベイ湾に程近いロータル遺跡で盛んにビーズ玉製作が行なわれた [Rao 1979; 小西 1983]。遺跡からは、紅玉髄製ビーズ玉の未成品や攻玉ドリル、それに玉作り工房跡からは完成品が発見された他に⁴²⁾、ビーズ玉製品などを積み込んだであろう南北 214.5m、東西 36.9m、深さ 3.5m を測る船着き場も発見されているという [Rao 1979: 123-129]。

インダス文明期に長大化した瑪瑙や紅玉髄製ビーズ玉や特殊な文様の施された腐食文様紅玉髄製ビーズ玉の攻玉活動は、アーネスタイト製ドリルを出土するドーラヴィラー遺跡の東方に位置するグジャラート北部のカンデクとマンデク (Mandek) 鉱床の豊富な瑪瑙・紅玉髄産出と高度な穿孔技術を伴ったビーズ玉製作システムを背景にして生まれ、製品はメソポタミア地域へも搬出される交易品となっていた [Kenoyer

1992: 507]。グジャラートは、自らの地でビーズ玉作りを行なうと同時に、石材を文明域内の他の玉作り工房へも供給するインダス文明にとって重要な地域であった⁴³⁾。しかしながら、カンデク鉱床産出の瑪瑙はモエンジョ・ダローやチャヌフ・ダロー遺跡の攻玉工房では用いられず、先に見たメヘルガルやナウシャロー遺跡のカッチー平野のクエッタ文化からハラッパー文化期で利用されたとロウが指摘するように、グジャラートの瑪瑙や紅玉髓は選択的に搬出されていた[Law 2011]。

インダス文明は、もう一つのビーズ玉石材入手法を試みている。それは、ゴーマル平野でラピス・ラズリ製ビーズ玉を製作したラフマーン・デーリ遺跡が衰微する時期の、前 2500 年頃のインダス文明前期に、ラピス・ラズリ産出地と南トルクメニアとの間に位置するアム・ダリヤー (Amu Darya) 川上流の河畔にハラッパー文化のショルトガイ遺跡を進出させたことである[Dupree 1981; Francfort 1978-79, 1984]。それまで、ハラッパー文化は、バローチスタン文化遺跡を経由して、ラピス・ラズリを獲得していたが、直接入手するために設けた交易集落がショルトガイ遺跡であったと、想定されている[Francfort 1983, 1984]。

しかし、この交易集落をアルガゼの言う前哨(基)地とすることはできない。なぜならば、アム・ダリヤー河畔一帯に、ショルトガイ遺跡の他のインダス文明遺跡は、前後の時期を通じて全く発見されていない。しかも、この頃にはインダス文明領域となったバローチスタン丘陵まででさえ、ワジーリスターンとヒンドゥークシュ (Hindukush) 山脈を隔てて、800km も離れている。インダス文明域から隔絶して立地するショルトガイ遺跡は、前 2 千年紀前半のインダス文明衰退期まで孤立するように存続した。その上、モエンジョ・ダロー遺跡からのラピス・ラズリの出土数は、ラフマーン・デーリ遺跡のそれと比較して、非常に少ない。ラピス・ラズリを獲得するために、長期間にわたって、しかも孤立するような地域に存在したショルトガイ遺跡がアム・ダリヤー河畔に存続し続けた理由は、判然としない。そのため、モエンジョ・ダロー遺跡内で作られたラピス・ラズリのビーズ玉石材は、クエッタ文化とゴーマル文化が保持した、従来までの交易路を経て持ち込まれたと考えるのが自然である。

インダス文明期のバローチスタン地域は、入手の容易な超塩基性岩凍石製ビーズ玉を多少は加工したが、より入手困難な貴石は従来からの貴石交易網への参画を維持しながら、集めたビーズ玉石材をインダス平原へと搬出する集荷地に転化していた、と考えるのが順当であろう。バローチスタン丘陵が西方社会とインダス文明とを結びつける仲介者であったとする

トーシらの見解は、インダス文明期に限れば首肯けると同時に、バローチスタン丘陵やゴーマル平野の拠点集落はハラッパー文化に移行して、交易路を掌握した。それによって、かつてのクエッタ文化やゴーマル文化の拠点都市遺跡は、衰微した、と考えられる [Tosi 1979, Shaffer 1982b, Cortesi et al. 2008]。

ビーズ玉石材の獲得を視点としたインダス文明期の交易形態は、次の 3 形態に分類できる (図 15)。

- ①クエッタ文化とゴーマル文化領域に新たに拠点を設置することによって、それまでのバローチスタン丘陵から、またはバローチスタン丘陵を介してビーズ玉を入手していた交易形態をインダス文明が間接的に西方交易路に接続できるように再編成した。
- ②文明域の拡大によって、グジャラート地方や北部山岳地域から直接石材獲得を行なう。
- ③特異な交易集落としてのショルトガイ遺跡をアム・ダリヤー河畔へ進出させる。

①のインダス文明の対外陸上交易に関して、フランケ＝フォクトは、インダス文明の周縁地域に組織された交易ルートを利用して、品物はまずインダス平原の拠点都市に運ばれた後に、領域内へと再分配される経済構造を想定し、その時点でバローチスタン丘陵の物流の玄関としての重要性は失われたと指摘している [Franke-Vogt 1993]。すなわち、バローチスタン丘陵の文化がそれまで強く関与していた西方地域との交易経路をインダス文明の交易網中に組み入れることで、交易物資の管理を掌握したハラッパー遺跡やモエンジョ・ダロー遺跡など、インダス文明主要遺跡による中心地再分配だけを想定している。しかし、バローチスタン丘陵内で完結する超塩基性岩凍石を使用したビーズ玉作りは残存した一方で、北部地域のドロマイト凍石の入手ルートをゴーマル文化から移転させている。インダス文明にとって必要な石材とそうでない石材を選り分けた交易経路の取り込みを行なった様子を見ることができる。また、ラピス・ラズリ獲得を目指した貴石交易における交換機能がバローチスタン丘陵に残されていた。インダス文明は、バローチスタンの貴石集荷交易機能を十分に利用し、バローチスタンを石材の交易中継地や西方地域との仲介者へと転化させたと考えてよい。加えて、アフガニスタンからイラン方面に存在するインダス文明社会に必要なではない超塩基性岩凍石をビーズ玉に利用するクエッタ地域のナウシャロー、ダバル・コート遺跡等をインダス文明のハラッパー文化集落に変転させる。

インダス文明は、その領域内に①と②の交易形態を加えた二系統の中心地再分配形態を併存させる重層した物流システムを作り上げ、見かけ上はインダス平原

部とバローチストーン丘陵に交易中心地が分散する交易形態となった。しかし、かつては域外交易の対象であったバローチストーン丘陵が域内交易圏に包摂され、加えてビーズ玉加工地をインダス平原に移動させることで、実質的にはインダス平原部が主導的立場を掌握し、その結果、石材はインダス平原に集中することになったと考えられる。

インダス文明における交易形態を探る際に注意しておかなければならない点は、もう一つある。それは、インダス平原に集められた石材を使ったビーズ玉製品が文明領域内で消費されたものであるのか、加工後に再び対外的に搬出される商品であったのかである。インダス文明のビーズ玉交易形態の②は、いずれも西方へと搬出されるインダス文明特有の大型の瑪瑙や紅玉髓製ビーズ玉、それに腐食文様紅玉髓製ビーズ玉の原材料入手を主目的とする交易と関わるものである。また、①における凍石と②における紅玉髓は、ナウシャロー遺跡のような小規模集落ではないインダス文明都市の住民に佩用されるビーズ玉製作にも用いられた。

他方、③に示した文明領域から遠く離れたショルトガイ遺跡は、インダス文明が対外的に搬出しなかったと考えられるラピス・ラズリの産出地に接して存在し、西方世界へと広がっていたラピス・ラズリ交易網の東端に位置した。確かにラピス・ラズリ製品は、モエンジョ・ダロー遺跡からの出土点数が少なく、インダス文明の特産品ではなかった。そして、インダス文明のビーズ玉製作システムの特徴である「くびれ型円柱攻玉ドリル」の特性が発揮されないラピス・ラズリ製ビーズ玉は、加工後に搬出されるものではなかったであろう。しかし、その希少性は以前から変わらず、おそらくはインダス文明都市の城塞部や市街地内の一部の階層を対象としたラピス・ラズリの確保のために、設けられた交易基地がショルトガイ遺跡であったのではないだろうか。それを裏付ける考古学的証拠を示せず、さらに①の交易形態の再編成の目的とも矛盾する。しかし、交易基地として理解する他に、ショルトガイ遺跡周辺や交易路上の地域を政治経済支配下に置こうとするインダス文明側の意図を、遺跡の長期単独存続という状況から読み取ることは難しい⁴⁴⁾。

2 交易形態の再編成—小結

①～③の交易形態に再編成された、インダス文明のビーズ玉交易に基づく石材獲得やビーズ玉製作は、一般民衆や村落を対象としていなかった。インダス文明期ナウシャロー遺跡から出土した土製ビーズ玉に見られたように、当時の貴石交易・流通経済は、あくまでも都市を対象としていた。そして、インダス文明の玉作りを見るかぎり、石材確保の如何とビーズ玉製品を

西方へ向けて搬出する遠隔地間交易の盛衰は、容易に文明の衰退要因にもなり、また同様に、インダス文明の重要な成立要因でもあったと考えられる。

インダス文明の交易形態は、文明領域内での重層した中心地再分配であり、その目的の一つは、対外的にインダス文明のビーズ玉製作システムを活かした長大な長棗玉や腐食文様紅玉髓玉を生産し、そして、西方へと搬出するためであった。

インダス文明形成期におけるカッチー平野やゴーマル平野のインダス文明領域化は、ウルク・ワールド・システム論と一見、類似するようにも見える。「中心」としてのインダス文明は、鉱物資源を産出する「周辺」としてのバローチストーンを取り込んでいくが、その実態は、従来のバローチストーンの諸文化が保持していたビーズ玉の中心地再分配交易形態から加工機能を奪って再編成したものであり、また前哨地や駐屯地といった交易路上の要衝を順次押さえていく手段も採られていなかった。インダス平原の社会とバローチストーン丘陵およびゴーマル平野の社会は、対等政体間相互作用の関係を想定できるように思われ、インダス平原社会が丘陵地やその麓の都市社会が押さえていた西方との交易路の重要性を低下させる新たな石材入手先の開発とアーネスタイト製「くびれ型円柱ドリル」を用いた新たな加工技術をもって、文明社会形成への地歩を固めたと考えられる。

3 社会の再編成とインダス文明の成立へ

以上の検討に主要遺跡変遷の概要を加えて〔宗基1997〕、バローチストーン丘陵の社会に都市を認めうるか、そしてそれらの社会と平原部の社会とがどのように関わりつつ文明が生じたのかを考えてみたい。

都市の興隆

無土器新石器文化から始まるバローチストーンの初期農耕村落は、中・小河川扇状地単位の地域間文化交流を経ながら、地域社会における人々の世界観の一部を表わしている土偶のジョーブ式、ゴーマル式、クッリ式の3型式と対応するクエッタ盆地とカッチー平野のクエッタ文化、ゴーマル平野のゴーマル文化、そして南部バローチストーンのクッリ文化に統合された。これらの諸文化社会のクエッタ文化のメヘルガル遺跡と、ゴーマル文化の主要遺跡であるラフマーン・デーリ遺跡に都市社会の成立を認めうるのかを、①センター機能②集住地における階層性を明示する住み分け③都市計画の3要件を念頭に検討する(表2)。

〈メヘルガル遺跡〉

前6千年紀前半から前5千年紀前半と考えられるメヘルガル遺跡I期の集落は、総面積が1ヘクタール未満の小さな村落ながら円形の周壁に囲まれていた。し

表2 バローチスタン丘陵諸文化の都市要件

都市要件	メヘルガル遺跡Ⅵ期・Ⅶ期	ラフマーン・デーリ遺跡Ⅱ期
センター機能	ファイズ・ムハンマド彩文灰色土器の大量生産センター	ビーズ攻玉センター
	中心地再分配・交易センター	文字の使用
都市計画	建物規制	直行街路
住み分け	公共施設(基壇)(Ⅵ期) 大規模基壇が市街地から分離して現れる(Ⅶ期)	大型基壇
周壁の形状	矩形	矩形

かし、周壁を家の壁に援用する家屋が一部に見られるなど、集落形態に計画性を見いだすことはできない。また、ビーズ玉の貴石をめぐる交易では、貴石の保持や交易に、特定の階層や集団が独占的に関わる様子も認めることはできない。

前5千年紀後半から前4千年紀中頃のⅢ期には、穀物倉と考えられる建物が目立ち始め、集落内での食糧管理が見受けられるようになる。また、凍石製のビーズ玉作りが活発化し、互酬連鎖交換によるビーズ玉石材交易には、一定数の男性と一部の女性が主に関わっていた。概して、Ⅰ期からⅢ期の集落遺構には、住居の大小の差や質的差を看取できない一方で、副葬品に性差、葬制に世帯や親族によるそれぞれの差を見いだせるものの、いまだ氏族集団を基礎とした集住社会であった。

前3千年紀前半のⅥ期の建物建て替えからは、ほぼ同位置に繰り返される程に、集落内の余地の少なさと建物配置に規制が働いていたことが窺え、また同時に、穀物集積と何らかの関係をもった大型の基壇状建物が集落内に築かれた。これらは、社会規範と集団行動を律する何らかの権威が存在したことを示している。さらに、集落は、直線的な周壁で矩形に囲繞され、従来の円形集落とは異なる新たな都市計画理念が生じていた。

前4千年紀末のⅤ期に現れたファイズ・ムハンマド彩文灰色土器は、Ⅵ期に大量生産されて、クエッタ文化土器群の特徴を鮮明にし、その生産地であったメヘルガル遺跡は、Ⅲ期以来の凍石製ビーズ玉作りと合わせて、クエッタ文化領域内での工芸品の生産と分配のセンターとなる。この時期に、クエッタ文化の精神世界の一部を具現化した女性土偶は、ジョーブ型として定型化する。

前3千年紀中頃のⅦ期になると、大型の基壇構築物が市街地の外方西側に築かれ、公共施設と他の建物とが空間的に分離する「住み分け」が明確化する。同時に、建物に利用される日乾煉瓦の大きさも規格化される。社会経済活動では、メヘルガル遺跡から西方へ200 mに位置するラール・シャー (Lal Shah) 遺跡に、

土器焼成窯が発見されている [Pracchia 1985]。窯は南に開いた焚口、燃焼室と焼成室からなる昇炎式で、燃焼室中央の柱が焼成室の床を支え、燃焼室の脇に温度調節用の孔が一つ開けられている。ラール・シャー遺跡での表採遺物によれば、ここでの土器焼成はメヘルガルのⅣ期以降、継続して続けられていた。また、メヘルガル遺跡でも、Ⅵ期に、野焼き跡と共に、窯状の遺構も発見され、遺跡からはそれまでには見られなかった程に多量の土器が出土する。調査者らは、ラール・シャー遺跡の土器焼成窯とメヘルガル遺跡の土器焼成遺構と土器出土量から、Ⅵ期以降のメヘルガル遺跡は、バローチスタン丘陵の他の諸遺跡に搬出されるクエッタ式土器やファイズ・ムハンマド彩文灰色土器を焼成する土器作りセンターであったとする [Audouze and C. Jarrege 1979; Quivron 1980; Lechevallier and Quivron 1981; Wright 1995]。

考古学的証跡から読み取れる以上の事象によって、Ⅵ期、遅くともⅦ期のメヘルガル遺跡は、先に掲げた都市要件を満たした都市であったと考えられ、とくにⅦ期の大型基壇の出現には、他とは隔絶した階層が社会の中に誕生していたことを示している。くわえて、特異な男性土偶の出現は、「力」の男性原理にもとづいた統治理念を根底に持つ階層の登場を示唆している。

〈ラフマーン・デーリ遺跡〉

ゴーマル平野に位置するラフマーン・デーリ遺跡の街並みは、最古期より矩形の周壁に囲まれていた。周壁内部には、ほぼ直交する道路も施設され、街は明らかに一定の計画の下に営まれていた。また、前3千年紀前半に相当するⅡ期には、周壁内に公共施設と考えられる大型基壇が築かれ、公共施設と一般住居との「住み分け」が進行していた。高度に発達した攻玉活動は専業工人の存在を示し、集落は攻玉活動のセンターとしての位置づけを強めた。そして、前3000年前後のⅠ期後半から現れた、絵文字様の印章や刻文サインが示唆する記号の使用は、社会の分業と階層化が進行し、物資を管理する階層が生まれていたことを明示している。

以上のように、前3千年紀前半のメヘルガルとラフマーン・デーリ両遺跡には、社会統治理念における男性原理の強弱はあるにしても、都市の3要件を全て満たす都市が成立していたと考えられ、それらの都市を中心として、クエッタ文化やゴーマル文化が展開したと考えられる⁴⁵⁾。

バローチスタン文化と西方の諸文化

クエッタ文化とゴーマル文化に現れた、ビーズ玉製作や土器製作センター、そして交易センターとしての役割を合わせ持つ都市は、中央アジアからアフガニス

タン、南東イラン高原の諸文化を直接的に認識した交易を行っていたことが出土する区画文印章から窺える〔後藤 1997、1999; Uesugi 2008〕。区画文印章は、南トルクメニアのナマーズガー文化を起源とし、後藤が示すように、前3千年紀前半の南トルクメニアからイラン南東部の諸遺跡の間での交換・交易の際に用いられていた〔後藤 1999〕。バローチスターンからは、クエッタ地域のダバル・コート遺跡からジョブ式土偶に伴って1点が〔Fairervis 1956〕、南バローチスターンのミリ・カラート遺跡のダンプ・サダートⅡ・Ⅲ期併行期の前3千年紀前半に相当する土層から4点が〔Besenval 2000〕、メヘルガル遺跡からは、より多くの区画文印章が出土している（図16）。確認できる最古の例は、Ⅳ期から出土した方形のテラコッタ製印章である。Ⅴ期以降は、骨製や凍石製を含めて28点が出土し、遺跡が放棄されるまで途切れることなく出土する⁴⁶⁾。印章の形状は方形、矩形、円形を主としながらも、星形や卍型などの文様がそのまま印章の外形になっている例もある⁴⁷⁾。

表3に示した区画文印章の時期別出土点数は、メヘルガルⅣ期以降に、クエッタ文化が南トルクメニアから北東イランを認識した上で、それらとの文化交渉を保ち続け、その関係はメヘルガルⅥ期以降に急速に強まっていたことを示している。とくに図16:31は、瀝青に押印された区画文印章の封泥であり、区画文印章を用いて、それら地域との間で物資のやり取りが行われていたことを如実に示している。さらに、これらの区画文印章は、おそらくは互酬連鎖交換によって、域外に産出するビーズ玉石材を獲得していたと想定されたⅢ期までの交換・交易形態が、Ⅳ期以降に変化していたことを明示している。

しかし、精神的・宗教的中心地のセンター機能を想定させる遺跡や遺構が不明瞭であるなど、社会集団の凝集性が一定以上に高じなかったことが、バローチスターン丘陵の文化をして文明への歩みをさらに踏み出させなかった一つの要因であると考えられる。

バローチスターン丘陵諸文化の都市とその後に興隆するインダス文明の都市との違いは、巨大な基壇上に建つ城塞部の有無に端的に見ることができる。マンフォードは、城塞を権力の所在場所と見なし、それが都市の中核であり、象徴でもある、としていた〔マンフォード 1969〕。巨大な城塞を持つインダス文明都市と明瞭な城塞部を持たないバローチスターン丘陵都市の差違は、両者の社会体制の相違にあると考えられる。

ボセール〔Possehl 1998〕やシェーファー〔Shaffer 1992a〕、ジェイコブソン〔Jacobson 1986〕らは、社会経済の維持・管理システムの確立した都市社会がインダス文明の特徴であり、その政治体制は、西アジアの

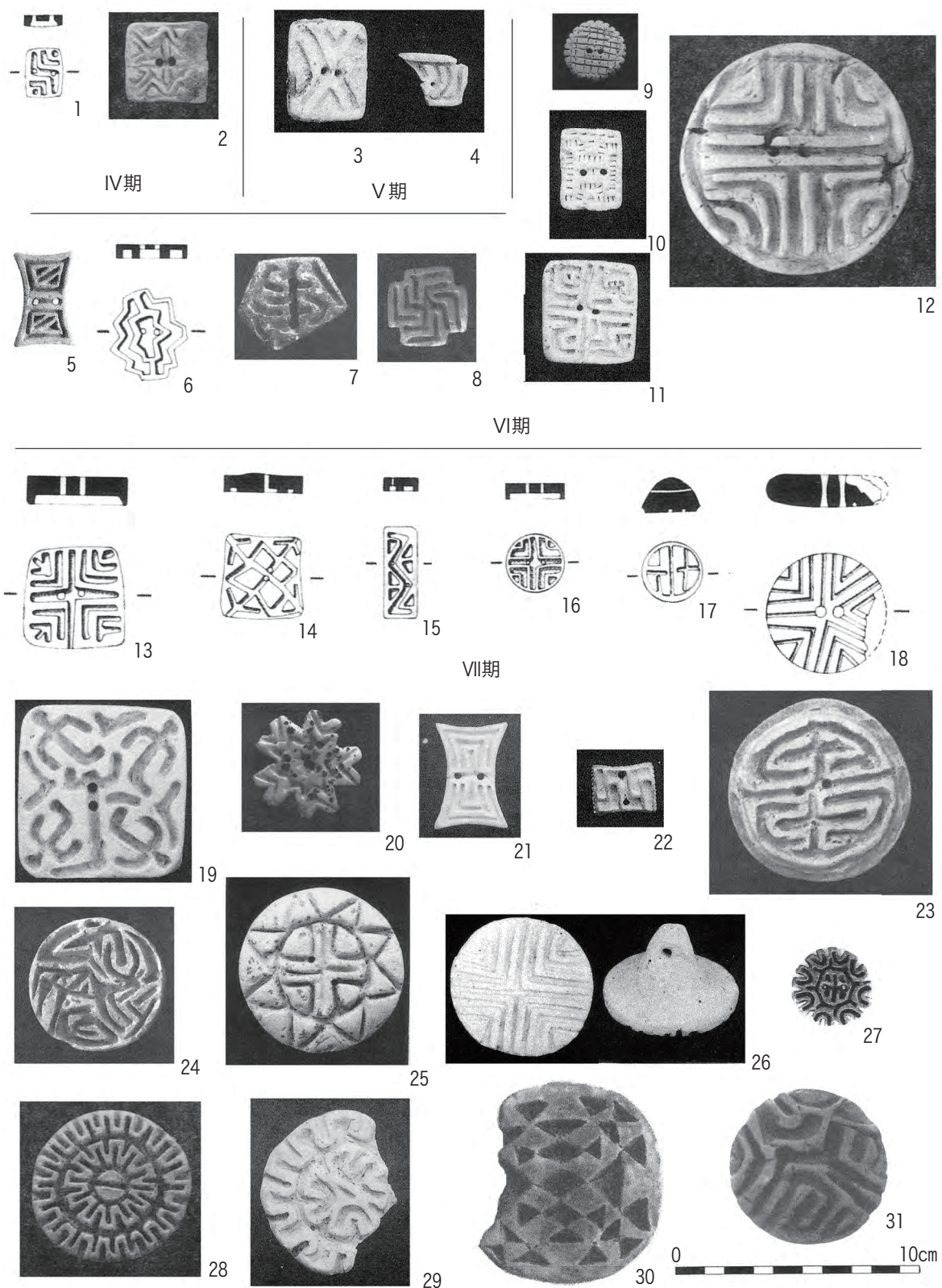
古典的国家とは異なる国家であった、と考えている。本稿で見えてきた攻玉技術の斉一性とシステムとして確立化されていた物資流通は、彼らの言う、インダス文明における社会経済の維持・管理システムの一例としてあげられよう。では、バローチスターン文化の都市は、どのような社会体制であったのだろうか。

バローチスターン丘陵都市の社会政治形態

メヘルガル遺跡に発見された埋葬墓の副葬品分析から、新石器文化段階の互酬交換・交易は職能集団に付加された役割であり、そして、銅石器時代には男性集団に一部の女性が交換・交易に関わる姿を想定できる〔宗基 2002〕。この段階を経て、土器製作センターをはじめとする、中心地再分配拠点へと展開したⅤ期からⅥ期までの社会は、クエッタ式女性土偶の定型化に見られるように、集団の紐帯を擬制的関係を含めた血縁に求めた首長制社会であったと考えられる。

それでも、クエッタ文化とゴーマル文化、とくにクエッタ文化の社会集団は、対外交換・交易における他地域の文化を意識した接触から誘発された世界観の変化に伴って、精神的拠り所を男性原理に求め、個人に社会・政治・宗教機能を付与する新たな社会状況をメヘルガルⅦ期に生じさせていたのであろう。少なくとも、男性土偶の出現は、女性土偶のみであったそれまでの祭祀に大きな変化をもたらしたことに間違いなく、観念的権力の基盤である従来の世界観が次第に揺らぎ、変化し始めていた。そうした観念の変化を惹起した外界との接触経路を掌握することによって、首長権は次第に強化していったと考えられる〔Earl (ed.) 1997; Jacobson 1986〕。しかし、玉作りが様々な石材を対象としていたように、バローチスターン丘陵内の資源への接近・開発管理にも一元化された権力の行使を認めることはできない。したがって、バローチスターン丘陵の都市、とくにメヘルガルⅦ期の社会には、男性土偶を出現せしめた世界観の変化があった一方で、集団リーダーによる資源への接近に強い縛りを認め難い。メヘルガル遺跡Ⅶ期とラフマーン・デーリ遺跡Ⅱ～Ⅲ期の都市は、「首長制に発する、王権を、、、」と想定したマンフォードの言葉〔ホークス 1978〕や、地縁社会を前提とするチャイルドの都市要件からすれば、王の居所である宮殿や神殿遺構も発見されていないために、成熟した都市とはいえないのかもしれない。しかし、かえってインダス文明都市を含めて、宮殿や神殿の存在を確認できないことが、南アジア古代都市の特徴である可能性もあろう。

以上の特徴を備えたバローチスターン丘陵のメヘルガルとラフマーン・デーリの両遺跡を王権が存在しないものの、分節性と集権性の双方の様相を合わせ持つ、首長制と国家政体の中間に位置する「階層化社会」



凍石製：7, 8；骨製：15～22；歴青への押印跡：31；他は土製

図 16 メヘルガル遺跡出土区画文印章 [Jarrige *et al.* 1995 より集成]

表 3 区画文印章出土点数

遺跡名 時期	メヘルガル		ダバル・コート	ミリ・カラート
	印章	封泥	印章	印章
VII	18	1	1	1
VI	8			
V	2			
IV	2			
III	(1)			

(時期はメヘルガル遺跡を基準とする)

段階の都市であったと規定できる [Kristiansen 1991 ; Green 2020]。

バローチスターン丘陵、およびインダス平原の先史文化とハラッパー文化

バローチスターン丘陵の先史文化には文明形成への萌芽を窺わせる都市社会が存在した。しかし、インダス文明社会は、バローチスターン丘陵の文化が関与していた内陸部との交易路を取り込んで、それまでの域外交易を重層した中心地再分配システムの域内交易に再編成することで、バローチスターン丘陵都市の衰退と引き換えに、南アジアに成立したと考えられる。

ここでは、交易形態の変換と再編成によって、南アジアに文明社会の出現を可能ならしめた要因が何であったのかを、紀元前 3000 ～ 2600 年頃のバローチスターン丘陵と平原部諸遺跡の変遷に焦点を絞って検討する。

前 3 千年紀前半の丘陵地文化拠点遺跡の移動

メヘルガル遺跡は、クエッタ文化の中心地としての役割を担う拠点集落であったが、終末にハラッパー式土器が出土するようになる。カッチー平野にハラッパー文化集落が進出したのではなく、あくまでも同時期に併存した他のハラッパー文化遺跡からハラッパー式土器が持ち込まれたものである一方で、メヘルガル遺跡衰亡後のカッチー平野では、ナウシャロー遺跡がそのⅡ期にハラッパー文化遺跡へと推移する。

クエッタ地区の拠点遺跡であったダンプ・サダート遺跡も最終居住期のⅢ C 期に基壇を消失し、その直後に放棄される。その一方で、比較的規模の小さなキリ・グル・ムハンマド遺跡とダバル・コート遺跡がクエッタ文化居住層の上にハラッパー文化居住層を残す。カッチー平野と同様に、ハラッパー文化との接触後に地域の中心的遺跡が衰退し、小規模遺跡がハラッパー文化に吸収されるようにして存続する [宗基 1999]。

ラフマーン・デーリ遺跡でも、前 3 千年紀前半にゴーマル文化の都市となり、その後、インダス文明初期までハラッパー文化と併存する [鎌田 2000]。メヘルガル遺跡のように、ハラッパー文化との対立関係を見せないまま衰退するものの、隣接するグムラー遺跡がゴーマル式土器とハラッパー式土器を混在させなが

ら文明前期まで存続してゆく [Kondo *et al.* 2006]。ゴーマル平野には、他にハラッパー文化遺跡が数多く発見され、その内の一つにはラフマーン・デーリ遺跡に隣接する小規模なヒシャーム・デーリ遺跡もある [Dani 1970-71: 31]⁴⁸⁾。

インダス平原に位置する「初期ハラッパー文化」諸遺跡

インダス平原のシンド地方に展開したコート・ディジー遺跡では、コート・ディジー文化シンド類型層の上にハラッパー文化居住層が堆積し、ハラッパー文化へと推移する。パンジャブのジャリールプール、ハラッパー、カーリーバンガン、バナーワーリー、ミタタル、シスワル遺跡のコート・ディジー文化パンジャブ類型層の上にも、ハラッパー文化層が必ず遺されている [Shaffer 1992b ; 宗基 1999]⁴⁹⁾。

こうした多くの平原部の遺跡が灰層を挟む遺跡もありながらも、いわゆる「初期ハラッパー文化」からハラッパー文化へと移行した文化的状況は、バローチスターン丘陵のメヘルガル遺跡やラフマーン・デーリ遺跡、ダンプ・サダート遺跡とは対称的である。ハラッパー文化の成立は、平原部のコート・ディジー文化がバローチスターンの地域文化社会とどのように関係を結ぶかに腐心し、その成果としてハラッパー文化とインダス文明が成立したと考えられる。

文明拡張の戦略

インダス平原に興ったと想定されるハラッパー文化がバローチスターン地域に展開していく途上で、それぞれの地域や峠道に位置したバローチスターン丘陵の都市は衰亡し、または一時的にハラッパー文化と併存しながら後に衰退して、近傍の小規模な集落にハラッパー文化の居住が始まる。そこには、ハラッパー文化が西方へと領域を拡大するとき、インダス平原と西方地域を結びつける峠道上のバローチスターンの都市から距離を置いた小規模集落に居住地を定め、一時的にそうした都市と併存し、やがて当該地域の都市が衰退していかざるを得ない状況を作り出していたと想定できる。そうした遺跡の盛衰の背景に、交易路を掌握する交換・交易形態の再編を目指したハラッパー文化側の戦略が窺える。しかし、両文化の一定期間の併存に示されるように、両者の間に武力を伴った確執は認められない。その再編を対立無く行なわせたものは、ハラッパー文化側のバローチスターンの諸文化に対する意識的、かつ選択的裁可であった、と考えられる。

文化的裁可

近藤は、インダス文明成立を準備したものとして、インダス平原部に展開した社会における信仰の共通化を挙げている [近藤 2008: 36]。それは、有角神像の存在である。有角神像は、コート・ディジー式土器か

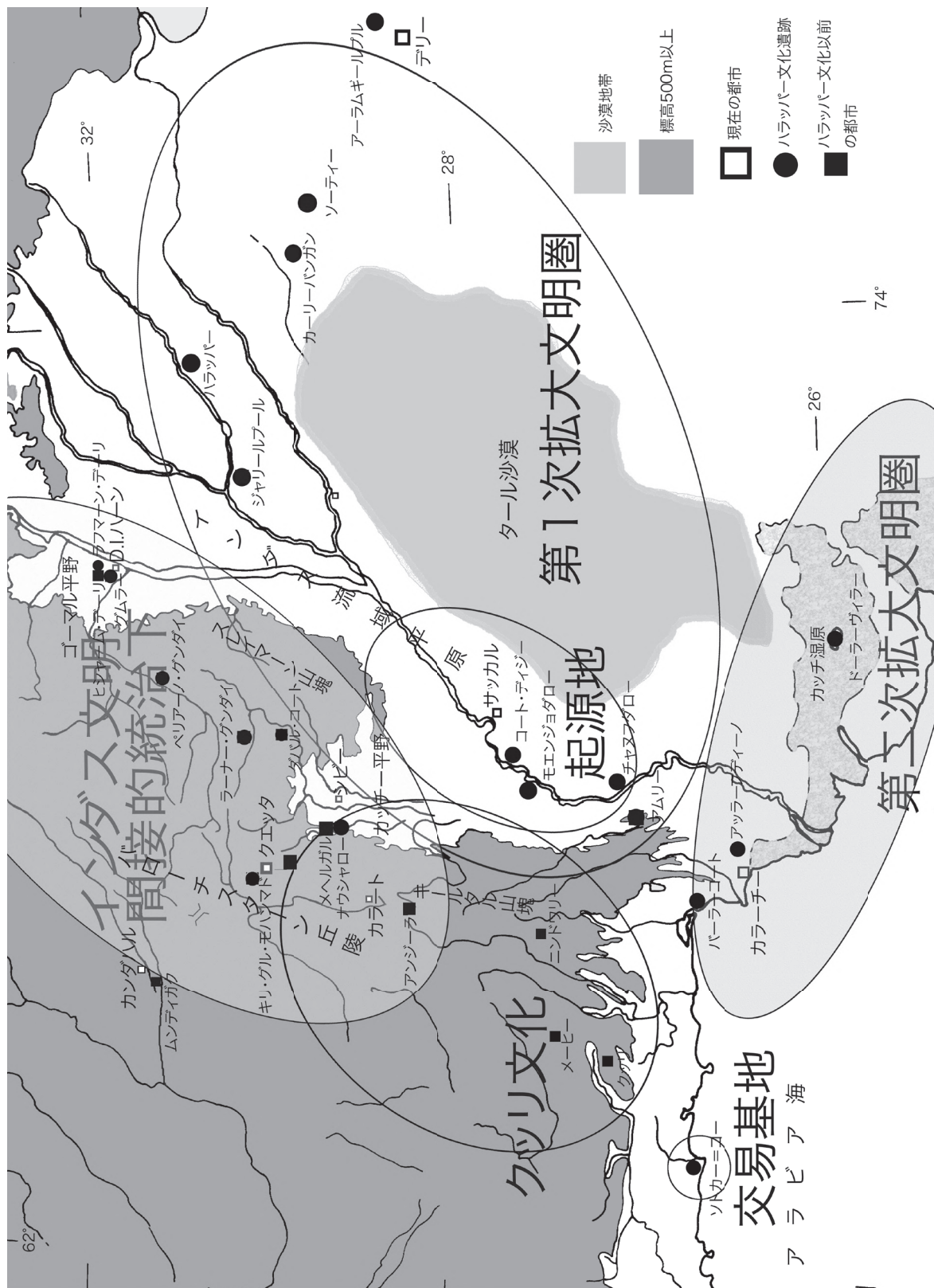


図17 インダス文明領域拡張開図

らハラッパー式土器へと引き継がれる魚鱗文と共に描かれ、また、カーリーバンガン等の平原部のコート・ディジー文化パンジャブ類型と密接な関係を持し

ていたゴーマル文化のグムラー遺跡やレーワーン遺跡から出土した土器彩文にも認められる。しかし、クエッタ文化諸遺跡出土品の中に有角神像を見いだすことは

できない。この「角」に関連しては、有角の牛が文明期のインダス式印章に刻まれる文様として目立つ。印章に描かれた一角獣の分析を行なったジェイミソンは政治社会的グループを、フレネツは氏族や政治的役割集団を示しているとしている [Jamison 2016, 2018; Frenez 2018]。インダス文明社会にとって重要な図像であった有角神像と「角」の表徴は、インダス文明形成において、社会の再編成に向けた重要なアイコンであった。他方、小茄子川は、クエッタ文化の土器文様、とくにファイブ・ムハンマド彩文灰色土器に描かれるピーパル文、水草文、太陽文、それに鳥やコブ牛文様などは、コート・ディジー式土器に描かれる文様と共通し、これらのうち、ピーパル文、水草文、太陽文はインダス文明のハラッパー式土器にも引き継がれていく、と指摘する [小茄子川 2008a・b]。角のあるコブウシが排除されていることに注意したい。このようなインダス文明に継承されたゴーマル文化とクエッタ文化の図像の違いと、両文化の都市遺跡が衰退する遅速は、何に起因したのであろうか。

土偶を検討した際に、南方ジョーブ式男性土偶がモエンジョ・ダロー遺跡から出土した男性石像（「神官王」像）の表徴と共通していたと指摘した。この共通を言い換えるのであれば、クエッタ文化とハラッパー文化の男性像に表された世界観および社会統治理念が競合していたと捉えられる。それゆえに、インダス文明側にとってクエッタ文化の男性土偶に表徴された社会統治理念は、排除の対象となったのではないだろうか。クエッタ文化に現れた新たな世界観は、平原部の文化との文化交渉の障壁になったのである。そうであるならば、ゴーマル文化、およびクエッタ文化からハラッパー文化に継承された、または排除された文化要素の相違を生んだ原因は、次のように考えられる。

土器文様はインダス文明に引き継がれたものの、統治理念は排除されたであろうクエッタ文化に対して、南方ジョーブ式のような男性土偶を生み出さなかったラフマーン・デーリ遺跡のゴーマル文化は、インダス文明にとって急激な排除の対象とはならなかった。その背景には、ラフマーン・デーリⅡ期以降のゴーマル文化とパンジャブ地方のカーリーバンガン遺跡に、それぞれの土器群に観察できた両地域間文化交渉の継続に見られる親密性を文明初期まで引き継いでいたことに表されている。他方、ゴーマル文化とコート・ディジー文化に共通して見られる有角神像には、ジェイコブソンが指摘する神話的特権に由来する社会集団の祖先観念が両者の間で通底するところがあったのであろう。そのため、ハラッパー文化の対応は、クエッタ文化とゴーマル文化に対して一様ではなかった、と理解できよう。すなわち、インダス文明の成立とその後の

拡大過程で、インダス文明社会はバローチスターン丘陵の社会を取り込んでいく際に、競合する社会統治理念を排除しながらも住民を懐柔するために、それぞれの地域文化に応じて土器文様の継承という「文化的裁可」を意識的に、そして選択的に与えることで、文化的対立を避けながら、バローチスターンの都市周辺に新たなハラッパー文化集落を設置、または従来の集落をハラッパー文化と併存させて交易路の確保と新たな交易形態を再編成したと考えられる⁵⁰⁾。

まとめ：インダス文明の形成過程 －研究課題と展望

インダス文明の起源と形成過程を探る研究は、文明の主要都市であるモエンジョ・ダロー遺跡とハラッパー遺跡が発見された1920年代から遅れて1940年代後半から始まった。なかでも、1960年代におけるインダス平原でのコート・ディジー遺跡の発見は、平原部都市遺跡の社会的・経済的拡大が文明の直接的基盤を築いたとする「初期ハラッパー文化」論を生み出し、それがインダス文明起源研究の大きな潮流となった。その後、1970年代にバローチスターン丘陵の麓でメヘルガル遺跡が発見されてからは、新石器文化から始まる丘陵地での文化展開の延長に文明形成過程を跡付けようとする研究が促された。

本稿では、平原部に生起した諸遺跡の文化を視野に入れながらも、基本的には丘陵域での新石器文化社会の成立と、それ以降の展開が文明の形成と興隆にどのように関わったかを検討してきた。

バローチスターン丘陵の社会は、クエッタ文化期以降に、都市社会へ向けた社会的・文化的求心力を高めていたが、バローチスターン丘陵での文明形成への動きは、インダス文明の興起とその領域拡大を前にして頓挫した。バローチスターンの地域拠点都市は、ハラッパー文化・インダス文明によって排除される一方、小規模遺跡がハラッパー文化集落として存続した要因の一つにアフガニスタンに産出されるラピス・ラズリを始めとする中央アジア地域に産出するビーズ玉石材を求めた西方との交易路確保のために、インダス文明に取り込まれたことにあったと見做しえた。そのため、インダス文明の形成とその地理的領域を理解するには、文明の興起以前とその後に分けて、文明の存立・維持の条件を考察していく必要がある。対外交易は、文明の拡大とその後の維持にとって重要であったろうが、ハラッパー文化がどのように文明形成への歩みを踏み出したのであろうかという問いには、西方との交易よりも文明領域に内包されたグジャラート、シンド、パンジャブ地方を結び付ける域内交易の成立がどの

ようにして築き上げられていったかを検討しなければならない。アールが述べていたように、社会変化の要因については「資源開発と交易を主導する権限」を文明形成への基点として、「遠距離交易」を文明の社会体制維持の機構に置き換えることが必要である。

文明領域内の地域ごとの遺跡の規模と変遷、そして地域文化統合の背景にある経済要因を探ることによって、ハラッパー文化とコート・ディジー文化との関連も、より明瞭になるであろう。以下に、インダス文明を生み出したハラッパー文化の中心がどこにあったかを考えるための視点を示しておきたい。

1. 文明形成の主導的地域

インダス平原のパンジャブとシンドに展開したコート・ディジー文化は、バローチスターンのゴーマル文化とクエッタ文化との間に、それぞれに異なる文化的関係を有していた。コート・ディジー文化パンジャブ類型は、ゴーマル文化と共通する土器器型をいくつか共有したように、継続的に文化的接触を維持していた。他方、クエッタ文化はコート・ディジー文化シンド類型と共通した土器器型を持たず、文化的接触は希薄であり、最末期のメヘルガルVIIc期にいたってクエッタ文化は鋳付（広口短頸）壺を模倣したぐらいいにとどまる。こうした状況に、ゴーマル文化がインダス文明前期まで併存したことを勘案すると、コート・ディジー文化パンジャブ類型は、ハラッパー文化の中心地域であったとは考えにくい。他方、土器型式は大きく異なりながらも、人々の心性が反映された土器文様がハラッパー文化によって「文化的裁可」を与えられた一方、男性土偶に表わされた社会統治理念が排除されたクエッタ文化圏に隣接したシンド地方をインダス文明形成の主動的役割を果たした候補地として挙げることができる。

シンド地方には、インダス川の西岸にモエンジョ・ダロー遺跡が位置している。モエンジョ・ダロー遺跡の下層文化は、未発掘のまま残されており、遺跡に人々が居住し始めた頃に、どのような文化が営まれていたのか不明なままではあるが、コート・ディジー文化シンド類型の社会は、クエッタ文化を取り込むことで、西方域外交路に直結し、資源開発と交易を主導する文明形成へ向けて大きな足がかりを得たであろう⁵¹⁾。

ここで注意しておきたいのは、クエッタ文化の土器文様のコブウシがバローチスターン丘陵南部を中心に展開したクッリ文化の影響を表すものであり、クエッタ文化終末期のナウシャロー 1D 期にコブウシと植物文をセットとして描く文様が土器に描かれることによって、クッリ文化がカッチー平野にまで拡大していたことを明示している。インダス文明形成期において、

バローチスターン丘陵のクッリ文化の領域拡大とインダス文明における「角」またはコブウシ図像の裁可にはクッリ文化とハラッパー文化との関係性についても視点を広げる必要があるだろう。

2. バローチスターン丘陵と平原部の文化

なぜバローチスターン丘陵の文化は、社会統合を遂げた文明段階に至らなかったのだろうか。その要因を単純に季節的天水農耕のバローチスターン文化と溢流農耕のインダス平原諸文化による環境利用法の相違に求めて事足りるだろうか。灌漑水路は、インダス文明遺跡には発見されていない。平原部での溢流農耕は、社会統合と権力の存在を前提とする大規模な社会資本投下と人的な統制を絶対的必要条件としない。インダス文明の農耕と社会体制を水利用と耕地保有形態から論じたミラーは、溢流農耕（河川氾濫冠水）、河川氾濫を利用した小規模灌漑、それに井戸水汲み上げ灌漑の3形態を想定し、いずれもが小規模な給水であって、親族組織グループ程度の単位で給水を行なう耕地の保有形態であったとする。それゆえに、インダス文明の社会は平板な階層性による親族グループ（＝氏族）集団を基盤とした社会であったとする [Miller 2006]。インダス式印章研究における「角」や「ウシ」図像解釈にも窺われたインダス文明が氏族を社会単位とする見解と同様の指摘である。いずれにしても、両地域文化の環境利用法に大差はないように思われる。それは、インダス平原に隣接した丘陵縁辺地域で、南アジア最古の新石器文化を形成したメヘルガル遺跡が、丘陵の雪解け水を利用するムギ類栽培農耕を基盤としながらも、農耕開始直後から夏作物を栽培し始め、モンスーンの影響を受ける大河流域沖積地の自然地理環境に早くから適応していたことに良く示されている。しかし、それではなぜ、バローチスターン丘陵の文化は、平原部に進出し、大河流域を開発しなかったのであろうか。その理由を探る努力が今後は必要であろう。

また、本稿では、前3千年紀中頃のバローチスターン文化に都市社会が築かれ、文明形成への胎動が現れていたとした。その文明形成へ向けた社会の凝集性を示すものとして、従来の女性像に代わって、社会的心性の変化、世界観（社会統合理念）の変化を表わしているとした男性土偶の新たな出現を挙げた。しかし、男性土偶の持つ象徴性をそれまでの女性土偶だけの時代からの変化と、モエンジョ・ダロー遺跡やムンディガク遺跡出土の男性石偶との類似性から、社会の変化を類推したにとどまった。バローチスターン丘陵の社会とその集団統治の形態を考察するにあたって、圍繞された集落の遺構配置や出土遺物の他に、メヘルガル遺跡の周壁の西方外側に現れた基壇の性格をより詳し

く検討していくことも必要であろう。また、バローチスターンの都市に設営された基壇とインダス文明の都市遺跡における城塞との関連性の有無が両社会の相違、もしくは類似性を探る際にも重要な視点となろう。

バローチスターンの基壇とインダス文明の城塞には、市街地からの隔絶性に相違がある。インダス文明都市遺跡の多くに見られる城塞は、高さ数メートルに及ぶ基壇上に築かれることで、垂直的位置関係をもって市街地を見下ろしている。他方、バローチスターンの基壇は、市街地との間にそれほどの隔絶性を作り出さず、水平的位置関係において市街地と分離されている場合が多い。バローチスターンの基壇とインダス文明の城塞の違いは、両社会の凝集性と社会組織の違いも示している。バローチスターンの社会は、市街地との間に隔絶性を有した施設を築けなかったことが、階層化した社会を組織的に統治する強力な政体（国家）を作り上げなかったことを示唆している [Earl (ed.) 1997]。ポセールは、強大な統一政体（国家組織）を持たないことがインダス文明の特徴であったと指摘したが、バローチスターンの基壇と比べると、インダス文明の城塞はその社会に強力な政体の存在を示している。

3. バローチスターン文明の提唱

インダス文明の勃興を前にして衰退したバローチスターン丘陵をめぐる先史～古代南西アジア地域の研究は、トーンがバローチスターン地域をイラン高原とインダス平原の仲介者であったと捉えたのを嚆矢として [Tosi 1979]、インダス文明、またはイラン高原との二者関係でのみ語られてきた。アフガニスタンからバローチスターンにかけての地域における、新石器文化から都市社会へ向けた文化展開は、南トルクメニアを含めた他地域からの影響なしに独自になされたとのグプタの見解は極論としても、彼が言うように、バローチスターンは決して文化的退避地域 (refuge area) などではなく、むしろ地域文化の核地域 (nuclear zone) [Gupta 1979] として把握されるべきである。

インダス文明は、バローチスターン丘陵が先史文化から都市社会を形成するまでの、長期間にわたって行なってきた西方地域との文化交渉を基盤としてはじめて興隆したのであって、今後、南西アジアにおける社会と文化を考察していく際には、バローチスターンを一つの文化圏として捉えた視点をもって臨まねばならないと、筆者は考えている。

エルトゾフはガンジス川流域に現れた古代都市の源泉は、インダス文明都市にある、とする見解を示し、宇野はインダス文明の矩形を呈する城塞が方形を基本とするインダス式印章に付託された世界観の反映であ

る、と想定する。彼らは、矩形の城塞が南アジア古代都市に通底する要素であり、とくに城塞や城壁の出現と都市を統治する権威の形成過程が併行して現れる、と主張する [Eltsov 2008; 宇野 2008]。彼らの言うように、矩形の城塞が世界観を表わしているのであれば、市街地にもそうした世界観が敷延されるものと想定できるが、ここでは立ち入らない。しかし、城塞をメヘルガル遺跡の基壇に置き換えるならば、エルトゾフの示した南アジア古代都市の淵源は、バローチスターン文化に求められるものとなろう。メヘルガル遺跡において、市街地から分離された基壇が現れたⅦ期には、平原部のコート・ディジー遺跡などでも矩形の城塞が現れていたのであるから、南アジア古代都市の淵源をバローチスターン文化にのみ求めることはできないのは確かである。それでも、市街地までもが矩形の周壁で囲まれていたメヘルガル遺跡やラフマーン・デーリ遺跡の都市平面形は、とくにバローチスターンの文化とインダス文明都市に特徴的である。本論の中でも矩形の市街地と都市計画、そして神殿の不明瞭さは、バローチスターンの社会とインダス文明都市に通底する特徴であろう、と指摘した。

バローチスターンの諸都市は、ついに国家としての古代文明を形成しなかったが、市街地から分離して設営された基壇の形状は、南アジアの古代世界に多大な影響を与え、さらに矩形に囲繞された市街地の都市計画は、インダス文明の都市平面形を準備した、ともいえる。

この都市を擁し、南アジア古代世界に影響を与えた一方で、南アジアにとどまらない地域間文化交渉を行なうバローチスターン丘陵文化をあえて「バローチスターン文明」と捉えて研究対象とすることが、今後は必要であろう。

追記

日頃の不勉強がたたって本稿の校正時に至り、小茄子川氏の近業に触れた。氏は近年、J.C. スコットらの「国家に抗する社会」を念頭に、ウィットフォーゲルの「中心」・「周辺」・「亜周辺」の概念を援用したインダス文明の成立要因とその特徴を描き出そうとする。また、その理論的帰結として発展段階論的社会ではなく、「類型論史観にもとづく複線の相互作用」による歴史理解を見え据えている。傾聴すべき点に富む論考群である。

小茄子川歩 2021「インダス文明と「亜周辺」における社会進化 - バッファ・都市・文明・国家」は、北條・小茄子川・有松の編集による『社会進化の比較考古学 - 都市・権力・国家』雄山閣に収められた

20 頁の最新論考である。インダス地域は、中心となる第 1 次国家を擁する文明域から遠く離れた周辺のさらに外側に広がる亜周辺に位置づけられ、そこは中心による「直接的支配の恐れがない。したがって中心に存在する国家体制や官僚制のような中央集権的あるいは集権的制度を根本的に拒否するなど、文明制度の取捨選択を行ない、それらを独自に発展させることができる」。そして「高度の文明を実現しながらも、経済的には交換や再配分は国家による管理が少なく、市場に委ねられることで商品交換（貨幣経済）の優位を確保し促進する」環境であり、インダス文明は国家を形成せずに興ったと主張する。しかしながら、いくつかの点が気にかかる。

一つが「中心」・「周辺」・「亜周辺」は図式として解り易いものの、時代によって中心は移動し、同時代においてさえ亜周辺のさらに遠方にとっては亜周辺が中心になりかねない。こうした疑問はどのような枠組み設定においても提出される性質のものであるけれども、「中心」・「周辺」・「亜周辺」を一つの歴史空間と見做す個別史にならぬよう切望したい。また、亜周辺にも複数の社会集団や都市、または文明が生じるであろう。パロースターンに現れた都市とインダスの都市形成との関わりについて、対等政体間相互作用や多頭的政体モデルとの関連をどのように捉えるのだろうか。また、クリスチャンセンが示した社会進化モデルは一線進化モデルであるが、各社会段階における複数の社会体制は流動的であり、複線的モデルに変換できるのではないだろうか。

2 点目は、「市場に委ねられた商品経済」は、現在の新自由主義と通底する経済体制であり、そこでは貧富の差が助長され、その結果は中心のそれとどのように異なるのであろうか。同様に社会経済史の視点からは、伝統社会への急激な商品の流入が、共同体の人的紐帯を破壊するために、それらから守らねばならないと主張するマルクスらの言説を頼りに、モエンジョ・ダロー遺跡が周辺遺跡から孤絶している理由と直結させる解釈に違和感を感じる。商品流入に対する先人達の危機は、社会的・心的反応であり、その対応には時間を要するとともに主導者が必要である。むしろウェーバーのいう工芸職人集団のライトウルギー（対国家奉仕義務）と都市管理者との関連において都市立地を窺う方が良いのではないだろうか（『古代社会経済史』）。そうした前提の上で、「市場に委ねられた商品経済」から生み出される弊害を抑制するために、都市が周辺集落から離れて形成されたとの見通しを提出できないだろうか。

都市の勃興と商品経済における貨幣論議でも、考古学的現象に社会経済史の議論を直接的に対応させ過ぎ

る点は否めない。貨幣の意味・機能論につづいて、その存在形態に関する議論にみられる計数貨幣と実物貨幣については、列島内で近世まで計数貨幣と秤量貨幣が併存し、また計数貨幣においても金本位制や銀本位制に見られるように、秤量貨幣（実物貨幣）との交換を前提としていた。貨幣にとって国家が重要な役割を果たす事象は、実物貨幣との交換率を設定する銀行の役割であり、その交換率は交換の頻度と量において決定されるものである。

最後に、「国家に抗する社会」について一言述べるならば、『ゾミア』に続いて発表されたスコットの『反穀物の人類史－国家誕生のディープヒストリー』の原題である“Against the Grain”には「いやいやながら」の意味がある。筆者は邦訳を未読であるが、本書には「いやいやながらも（しょうがないから農耕を始め、都市を形成し、国家を成した）」という言外の意図が込められている。一定の土地に留まり、集団規模の拡大で生じる様々な弊害を内包しつつも、なぜ農耕を始めたのか、なぜ物資や「商品」を域外に求める交換・交易を行なったのか、なぜ都市を形成したのかを問わなければならない。そうした視点にもとづいて本稿を記したつもりである。

註

- 1) 頒布が一部のみの学科内雑誌であったため、ここに新たな文献を加えて再録する。
- 2) なお、周壁については、他地域との比較や居住地の地勢変遷の観点から、南アジアの都市論議において、留意しておきたい。
- 3) 近藤は、辛島らが指摘したモエンジョ・ダローの大沐浴場と穀物倉の一体性〔辛島他 1980: 96-97〕を踏まえて、それらを「インダス型神殿」としている〔近藤 2011: 87-89〕。
- 4) 一方で、国家なき文明はありえるのだろうかとの疑問も生じるが、ここではその論議に深入りしない。
- 5) 国家を定義する考古学的指標について、H. ライト (Wright) と G. ジョンソン (Johnson) は、情報や資源へ接近する経路の確保を示す集落跡の階層分布、印章などの行政遺物、それに宗教機能を除く公共建造物の存在を挙げる〔Wright and Johnson 1975〕。また、W. イザベル (Isbell) と K. シュライバー (Schreiber) は、出土遺物の検討を通して、国家を規定する指標に遠距離の情報ネットワークと分配システムを加えて検討したが〔Isbell and Schreiber 1978〕、アールやクリスチャンセンが想定する首長制社会における首長の資源開発、または搾取の権限と国家統治者の情報・資源管理権限という抽象的議論との異同が明瞭ではなかった。
- 6) シェーファーは、インダス文明諸遺跡に王墓や宮殿が発見されていない一方で、分銅の出土が示すように、インダス

文明では広く認知された権威の存在を前提とした度量衡の統一を基盤とした工芸品の製作が行なわれ、それは都市内に権威を体現した階層の存在と専門工人を始めとする分業化の進展を表わし、国家の存在を示唆しているとした。彼は、王墓や宮殿という権力構造の具現化がなくとも、国家の成立を想定している [Shaffer 1992a]。

- 7) ①ある地域内で最も高次の社会単位を政体とすると、一つの政体が同定できれば、同じ地域で対等（同質）の政体群が発見されるであろう。②ひとつの政体内で重大な組織変化や複雑化の進行が認識されれば、ほぼ同時に域内の政体にも同様の変化が起こっている。③そのような変化に伴い、新しい制度の型が出現する。同じような型のモニュメントや、共通する文字、記号システムなどである。④可視的なものは、ひとつの場所や政体にとどまらず、同時にいくつかの異なる政体で発展する。⑤変化のプロセスは、内的なプロセスの結果ばかりでなく、また外来のある刺激に対する反応の中にだけでなく、対等（同質）な政体間の相互作用の結果として現れる。相互作用には、競争や張り合い、革新の伝達、交換の増大など、さまざまなタイプがある。⑥儀礼などの象徴の上でも、強い相互作用を示す対等（同質）の政体が存在する地域では、弱い相互作用を示す地域に比べて、政体の階層化がより進行し、より強い権力が生じやすい [岩崎・常木 2008: 9]（カッコ内は筆者による）。
- 8) なお、こうした議論の前提として、メソポタミア初期王朝時代の都市国家間での互酬交換から、より高次の中心地における再分配交換モードによる帝国成立を想定した、レンフルーによる交換形態（モード）の理念化がある [Renfrew 1975]。
- 9) ザヘダーン博物館に展示されている石灰岩製石像胸部にムンディガク遺跡出土石像を乗せるとモエンジョ・ダロー出土「神官王」像に酷似するという [Vidale 2018]。
- 10) アルカリ液を塗布した後に加熱することで、白く腐食する紅玉髓の性質を利用して施文された紅玉髓製ビーズ玉を指す。同様の技法は、現在でもグジャラート地方で用いられている [Mackay 1933; Vidale *et al.* 1993]。
- 11) 「玉作り」の語は、日本考古学における、弥生から古墳時代の「玉造」との混同を避けるために用いる。
- 12) チャヌフ・ダロー遺跡の玉作り工房跡からは、未成品を含めたビーズ玉が多量に出土しているが、凍石製ビーズ玉は、集積された状況で出土している [Mackay 1943: 205]。ロータル遺跡の発掘調査の正式報告は現在、遺構編 [Rao 1979]、遺物編 [Rao 1985] の他に、概報 [Rao 1956-57, 1962, 1973] がある。また、ロータル遺跡の玉作り工房跡を考察したものに [小西 1983] がある。
- 13) [宗墓 1998b] が、ラフマーン・デリー遺跡においても、前4千年紀末からインダス文明初期に併行する時期にかけての凍石ペースト製ビーズ玉にファイアンス技法の使用を指摘しているように、ファイアンス技法の南アジアにおける歴史は、先史時代に遡る。南アジアのファイアンス釉の初現は、施釉凍石ビーズ玉がメヘルガルⅠ～Ⅲ期より出土することから、遅くとも紀元前4000年頃に位置付けられてい

る [de Saizieu and Bouquillon 1994]。同論文では、メヘルガル遺跡より出土した凍石ペースト製ビーズ玉のファイアンス釉を技術的・鉱物学的側面から報告している。また、[山花 2005] が施釉凍石と凍石ファイアンスの相違について述べている。

- 14) 遺跡全体では、未成品を含めて114点が出土した。なお、本遺跡のⅠ期は、ハラッパー文化以前にサラスヴァティー川流域に広がったソーティー文化、ないしシスワル文化との関連で捉えられている。
- 15) なお、堀は南メソポタミアのエリドゥ (Eridu) 遺跡採取とされる石製攻玉ドリルを報告している [堀 1983]。堀は、メソポタミア地域を石製ビーズ玉の消費地としてのみ理解することへの再考を求めている。また、西アジアからインドにまでおよぶ広範囲な地域から出土する石製攻玉ドリルの製作技術が形成された地域を探り、その技術の拡散にあたっては、交易関係と同時に人的移動による伝播をも想定している。
- 16) シャハリ・ソフター遺跡の調査は1967年以来行なわれ、その報告は、*Easat and West New Series* Vol. 18, No. 1-2 [Tosi 1968] 以降に順次刊行されている。攻玉ドリルに関してまとまっているのは [Piperno 1973a・b, 1976] である。
- 17) マッケイによる、チャヌフ・ダロー遺跡の報告や玉作りに関する論考では、攻玉ドリルは図画されず、写真も不明瞭であった [Mackay 1937: pl. 2, 1943: pl. 86]。後述のように、このことがインダス文明の攻玉ドリルの解明を遅らせたが、ケノイヤーとヴィダーレによって再確認された。
- 18) 玉作り工房は、Ⅱ期の間に3度建て替えられる (Ⅱ a・b・C)。Ⅱ a 期には、壁沿いの床に埋め込まれた甕内にラピス・ラズリ製管玉の未製品、紅玉髓片35点、緑玉髓片10点の他に、出土量不明ながらアラバスター片、碧玉片、玄武岩片、水晶片、斑文岩片、砂岩片、そして攻玉ドリル、砥石などが納められた遺構が発見された。Ⅱ b 期には、母石の発色を促すための煉瓦製の炉が設置される [Tosi 1969]。Ⅲ期の墓の副葬品 (G12 グリッド) には、トルコ石製201点、ラピス・ラズリ製26点、アラバスター製5点のビーズ玉と、59点の細石刃がアラバスター製の鉢に収められた状態で出土している [Biscione *et al.* 1974: 38]。
- 19) フタナイト (phtanite) は、碧玉の一種 [Jarrige, C. and Tosi 1981: 135]、またはチャートの特異な一種 [Vidale 1987: 119] とされている。いずれにしても、珪酸結晶性岩石の一つである。フタナイトの詳細な岩石学的分析は行なわれていないが、蛍光X線成分分析によれば、鉄分の多い珪酸マグネシウムであるという [Kenoyer and Vidale 1993: 498]。
- 20) 年代と地域は異なるが、野島と望月は日本国内の弥生時代玉造遺跡より出土した「石針」の観察と分析を行ない、ここで示された攻玉ドリル製作法と異なる製作法と使用法を示している。彼らは、「石針」を攻玉ドリルと認定するとともに、製作当初は多角錐であった「石針」の作業先端部は、継続使用によって、端部の平坦な円柱状になるとしている [野島・望月ほか 2004]。

- 21) 筆者は、ファリード・ハーンが報告したラフマーン・デーリ遺跡より出土した攻玉ドリルを遺物収蔵庫内に求めたが、発見できなかった。ベシャーワル大学考古学部の関係者もその保管場所を把握していなかった。収蔵庫から抜き取られたままの可能性が高い。よって、[宗基 1998b] で紹介した合計 13 点のドリルは、ファリード・ハーン報告例とは重複しない。
- 22) アムリー遺跡のⅡ期からは、多くのハラッパー式土器が出土する。その土器群を他のハラッパー文化の遺跡より出土した土器群と比較したカザルは、アムリーⅡ期より出土するハラッパー式土器は古相を示している、とする [Casal 1979]。
- 23) 「宗基 1997」および本稿前編を参照。
- 24) 近年、ラフマーン・デーリ遺跡の人々は石器石材利用に際して、北部パンジャブのソルト (Salt) 丘陵とシンドのローフリー (Rohri) 丘陵に産出するチャートを、攻玉ドリル用と石器用の石材とに使い分ける技術体系を備えていたとの指摘 [野口 2008] があり、攻玉ドリルの製作が石器製作システムに縛られていたとは単純に規定できないことを示唆している。しかし、攻玉ドリルの形状とその加工技術は、攻玉ドリル製作が石器製作システムと一体であったことを示している。
- 25) ヴィダーレがこれらモエンジョ・ダロー遺跡より発見された攻玉ドリルを報じた調査は、遺跡の表面調査の第二次報告書であった。
- 26) 発掘調査報告書刊行に先立って発表されたインダス文明のビーズ玉製作に関する論考である。
- 27) アーネスタイトの成分について、ロウがX線回析 (XRD: 結晶物質の無機化合物同定) と電子線マイクロアナライザー (EMPA: 個体表面の元素分析) 分析から、硬化したトンスティンフリント粘土岩であり、出土品はハラッパー文化人によって加熱されて硬化したものとしている [Law 2011: 544-549]。
- 28) しかし、厚手のフタナイト製剥片から作られたシャハリ・ソフター型攻玉ドリルに観察できた作業先端部上方が少し細くなるようにくびれていた点は、「くびれ型円柱攻玉ドリル」との関係で問題となろう。まず、アムリー遺跡出土例については、これがイスラーム期の層位から出土した、と報じられている。また、基部は面取りされず、形態的にはシャハリ・ソフター遺跡の攻玉ドリルと近似している。このことから、アムリー遺跡例は、シャハリ・ソフター型が後世まで継続して使われたものとも考えられよう。南アジアでは、現在も紅玉髄を使った活発な玉作りが続けられており、そこでの玉作り工程がインダス文明期のチャヌフ・ダロー遺跡に発見された玉作り工房の系譜を引くものである、と考えられている [Kenoyer, Vidale and Bhan 1991]。イスラーム期のアムリー遺跡例が前 3 千年紀のシャハリ・ソフター型を継承すると即断するには躊躇を覚えるが、このアムリー遺跡例は、「くびれ型円柱攻玉ドリル」の一変異形態としておきたい。ただし、アムリー遺跡より出土した攻玉ドリルの報文中に、これと同様の攻玉ドリルがⅠ期からも出土している」とされるが、これはシャハリ・ソフター型であろう。では、そのシャハリ・ソフター遺跡出土ドリルをどのように考えたら良いのだろうか。出土例は、かなり使い込まれたものであった。そして、「くびれ型円柱攻玉ドリル」のくびれは、ビーズ玉の穿孔途上に金剛砂と水を効率良く循環させるために必要な工夫である。この 2 つの条件を勘案するならば、穿孔作業を重ねる中で、用いられた金剛砂によって意図せずに作り出されたものと考えられないだろうか。なお、報告者らによる紅玉髄を使った穿孔実験では、アーネスタイト製の「くびれ型円柱攻玉ドリル」が銅製攻玉ドリルよりもより効率的であり、チャート製やフタナイト製による「先細り型円柱攻玉ドリル」のおよそ 3 倍の作業効率であるという [Kenoyer and Vidale 1993: 516-517]。
- 29) モエンジョ・ダロー遺跡には、ファイアンス技法で着色された凍石製ビーズ玉 [Pracchia, Tosi and Vidale 1985] や、紅玉髄などのビーズ玉が多数発見される玉作り工房地域がある [Vidale 1987: 117-118]。また、ハラッパー遺跡では、遺丘 E と ET のインダス文明期層からの瑪瑙製ビーズ玉と「くびれ型円柱攻玉ドリル」、それに攻玉ドリル作りを示す多数の削片が市街地の工房地域で発見されている [Meadow and Kenoyer 1994; Meadow, Kenoyer and Wright (eds.) 1996: 7-9]。そして、チャヌフ・ダロー遺跡では、出土点数が不明ながらも、攻玉ドリルと製作途上のビーズ玉が多数出土し、さらに貴石ビーズの発色を促す窯を備えたビーズ玉製作工房が発見されている [Mackay 1943: 42-43]。
- 30) 論文や報告で、そう認めたのは「くびれ型円柱攻玉ドリル」を確認した同論文が発表された 1992 年であるが、筆者との私信では、1980 年代の中頃より、均一なドリル孔の直径がインダス文明工房で作られたビーズ玉の特徴である、と述べていた。
- 31) この数字は、あくまでも遺跡表面調査での発見数であって、モエンジョ・ダロー遺跡におけるラピス・ラズリ製ビーズ玉の出土総数ではない。しかしながら、表面調査で発見された、各種貴石製ビーズ玉の発見数をパローチスターン文化のラフマーン・デーリ遺跡出土貴石製ビーズ玉と比べたとき、モエンジョ・ダロー遺跡での出土数が非常に少ないことが判る [宗基 1998b: 1466]。また、シャハリ・ソフター遺跡における 1972 年調査時に、集落跡から出土した削片を含めた貴石類の中で、ラピス・ラズリ石材は、全体の 9 割を占めている。ただし、墓壙からは、トルコ石製ビーズ玉が全体の 7 割、ラピス・ラズリ製ビーズ玉は 3 割弱であったことから、ラピス・ラズリ石材は、より西方へと搬出されたと考えられている [Bulgarelli 1981]。
- 32) モエンジョ・ダロー遺跡内の複数地点で行なわれた表面採集調査で得られたビーズ玉製品やその削片の総重量と総点数の内、ラピス・ラズリとトルコ石は各地点で全石材中でも最低の比率、または全く発見されていないほど少ない [Vidale 1987: 118-122]。
- 33) [Vidale, Kenoyer and Bhan 1993] は、現在も盛んに紅玉髄製玉作りを行なっているグジャラート州カーンバート (Khambhat) で行なった民俗調査と考古学調査をもとに、貴

- 石類の加熱による発色工程を復原している。また、近年廃棄された工房での原石粗割りから始まる加工過程で生み出される廃棄物の量を示して、先史時代の工房跡発掘資料解釈のための材料を提供している。グジャラート地方の玉作りについては、1961年の国勢調査報告書にも詳しく報じられている [Trivedi 1964]。なお、3つの遺丘からなるチャヌフ・ダロー遺跡は、およそ3.6ヘクタールほどの小さな遺跡ながら、現地表からの高さは8.5m、地表下の文化層を含めると21mもの堆積層を持つ。こうした小規模集落でありながらも、高い遺丘を形成するほどに継続して活潑な建物の建て替えと多量の廃棄物を排出したチャヌフ・ダロー遺跡は、ビーズ玉作りを専門としたやや特異な「都市」遺跡と考えられ、マッケイはモエンジョ・ダロー遺跡で出土したビーズ玉もここで作られた、とするほどである [Mackay 1943: 214]。
- 34) 湾岸出土腐食紅玉髄玉は文様がインダス式であるものの穿孔技法が異なる例がある [Kenoyer and Frenez 2018]。インダス地域外で製作された可能性があり、インダス文明人が湾岸で行っていたことが考えられる。
- 35) こうしたインダス文明のビーズ玉作りの社会的意味について、民俗調査例からの示唆がある [Roux, Bril and Dietrich 1995]。それは、紅玉髄製長棗玉が熟練工によって、「特定階層」のために製作されたとするものであり、「特定階層」をインダス文明領域内の経済・行政統治システム内にある者、または西アジアへの搬出品に置き換えることによって、物資の交換を統制する社会経済組織の存在をインダス文明に想定している。
- 36) 筆者は、かつてパーキスターンにて出版されている地質調査成果をもとに、文明以前から文明期のビーズ玉製作と石材利用にもとづいて、パローチスターンの先史諸文化の交易形態とインダス文明の交易形態に差異を見出し、そこに文明形成の一端が垣間見えるとした。しかしながら、その後、ロー (Law) がハラッパー遺跡出土岩石と鉱物の産出地から、インダス文明における交易様態を探る作業の中で、ほぼ文明期に利用された石材と鉱物の産出地を限定した。その限定作業は地質学や鉱物学の地誌と文献を渉猟のうえ、地質学者と共に岩石ごとに複数地点の産出地に赴いて、それぞれ複数のサンプルを採取して分析・比較作業を行なった [Law 2011]。この調査と分析は複数サンプルと遺跡出土資料の比較による産出地の地質学的同定を行なう手堅い作業であり、ローが述べるように絶対ではないにしても信頼度の高いものといえる。ローの調査は、ビーズ玉などのハラッパー遺跡出土石製遺物の原産地比定であり、その後に他遺跡出土品の同定を少しずつ行なっているが、まとまったものはない。よって、ハラッパー遺跡で用いられた石材のみであるが、文明以前のラヴィ期から後ハラッパー期までの石材搬入元の同定とそれによって示された変遷は非常に重要である。よって、筆者は前掲論文を見直し、とくに文明期以前の瑪瑙と凍石の産出地についてここで訂正し、ローに従って、後述のように理解したい。
- 37) ソーティー遺跡を始めとするコート・ディジー文化遺跡からは、パローチスターン文化土器伝統の系譜を引いた土器がほとんど出土しない。したがって、ドゥラーニーが指摘するように、ラフマーン・デリー I 期の文化が II 期を経て、III 期にコート・ディジー文化期へと展開し、さらに他地域へと展開したとは考えづらい。
- 38) 鎌田は、この時期をハラッパー文化として、その始まりを前 2800 年に置くが、ラフマーン・デリー遺跡と同様に、葉付交差円文や魚鱗文の描かれた土器が出土するナウシャロー I D 期の年代としては 200 年ほど古すぎると思われる [Jarriage, C. 2000]。
- 39) F 区の調査で発見された中庭を囲む家屋の一角から、600 点の紅玉髄製ビーズ玉が入った壺と紅玉髄、瑪瑙原石を含む未製品ビーズ玉の入った壺が出土した。また、隣接地点に紅玉髄や瑪瑙原石を発色させるためのロストル式の攻玉用窯が発見されている [Rao 1979: 118-120]。
- 40) 紅玉髄のビーズ玉製作は、現在もキャンベ湾奥のカーンバートで行なわれており、現代にまで引き継がれた伝統産業となっている [Kenoyer, Vidale and Bhan 1991; Vidale, Kenoyer and Bhan 1993]。
- 41) ショルトガイ遺跡の設置によって、ラピス・ラズリ石材入手の新たなルートを確認したインダス文明であったが、西方交易路との関わり方を再編成した①は、搬出交易路としても重要な位置を占めていた。こうした搬出経路の確保に加えて、ショルトガイ遺跡と同様の交易基地機能を合わせ持った交易物資搬出入基地遺跡として、海上交易路上のアラビア海沿岸に位置したソトカーゲン＝ドール遺跡とソトカー＝コー遺跡を挙げることが許されるだろう [Dales 1962a・b]。
- 42) シャハリ・ソフター遺跡より出土したラピス・ラズリの成分を分析した M. カサノヴァ (Casanova) によれば、その成分は、アフガニスタンのバダクシャーン地方、中国のパミール (Pamir) 地方、パーキスターンのチャガイ (Chagai) 丘陵産出の成分に近似するという。シベリア (Siberia) のウラル (Ural) 地方産ラピス・ラズリの成分と一致する分析結果は、見られなかった [Delmas and Casanova 1990; Casanova 1992]。近年の詳細な検討は [Vidale 2000; Vidale and Lazzari (eds.) 2017] で行われている。
- 43) メヘルガル遺跡の I b 期でも凍石製ビーズ玉製作が行なわれていたと報じられるが、簡便な記述で、攻玉ドリルや石材の削片などについての報告はない [Jarrege, J.-F. 2000]。ラフマーン・デリー遺跡より出土したビーズ玉のうち、最も多く出土する凍石、および凍石ペースト製ビーズ玉の特徴は、その形状が白玉と管玉にほぼ限定され、加えて釉薬をかけられた例が非常に多い点にある。淡い黄色から青、緑、赤茶に発色する施釉凍石玉は、ラピス・ラズリ、トルコ石、瑪瑙など、貴石の色を凍石に置き換えた、貴石の代用品にされていたと考えられている [de Saizieu and Bouquillion 1997; 宗基 1998b]。
- 44) ハラッパー遺跡最下層の文化。「初期ハラッパー文化」以前のパンジャブ地方に展開した文化。
- 45) 無土器新石器文化から始まって、都市社会の成立に至るパ

ローチスターン文化、とくにクエッタ文化の歩みのなかで注意しておきたいのは、メヘルガル遺跡に見られたように、周壁が円形から矩形に変化し、大型基壇が周壁に囲まれた市街地の西方に築かれたことである。インダス文明都市の周壁の多くが矩形を呈し、市街地の西方に城塞部が位置することを勘案すれば、南アジアでは集落の矩形化とそれに伴う都市計画を都市化の一つの指標として挙げることができよう。ただし、インダス文明の城塞は、モエンジョ・ダロー遺跡では、最も低い時期でも5mを超える高さの基壇で、市街地を見下ろすような威容を備えている点がバローチスターンの大型基壇と異なる [Jansen 1987: Fig. 4]。

- 46) この他に、Ⅲ期の33号墓からも青銅製区画文印章が出土したとされるが、腐食が激しく不詳である。
- 47) 区画文印章の分類は [上杉 2015] を参照。
- 48) ヒシャーム・デリー遺跡の遺丘は、75×60 mの規模で、ラフマーン・デリー遺跡から350 mほどの距離にある。
- 49) シェイファール編年の下敷きとなったハラッパー遺跡編年を以下に掲げる [Meadow (ed.) 1991: 43-44]。
- | | |
|--|---------------------|
| Localization Era (地方分散化時代) | |
| Late Harappan Phase (後期ハラッパー文化期) ca. 1900 to 1300 BC | |
| Harappa: Periods 4 and 5 | 1900- 1700 BC |
| Integration Era (社会統合時代) | |
| Harappan Phase (ハラッパー文化期) | 2600 to 1900 BC |
| Harappa: Period 3C, Final | 2200-1900 BC |
| Harappa: Period 3B, Middle | 2450-2200 BC |
| =Nausharo, Period III | |
| Harappa: Period 3A, Initial | 2600-2450 BC |
| =Nausharo, Period II | |
| Regionalization Era (地域社会形成時代) | |
| Early Harappan several Phases (初期ハラッパー文化期) | ca. 5500 to 2600 BC |
| Harappa: Period 2, Kot Diji Phase 2800-2600 BC | |
| =Nausharo, Period I, | |
| =Mehrgarh, Period VII Kot Diji Phase [Kenoyer 2001: 4] | |
- 50) [小茄子川 2008b] がファイズ・ムハンマド彩文灰色土器の彩文をインダス文明が受容したと述べていることは、本文中に記した。しかし、文様要素の受容だけでは、ここでいう「文化的裁可」を直接意味しない。「文化的裁可」とは、競合する文化の一部を受容する一方で、何を排除したのかという、競合相手を懐柔するための手段である。そのために効果的な文化要素は受け入れるものの、決して受け入れられない要素が何であったかを探ることが、「文化的裁可」の意味を知ることとなる。本稿では、文化的裁可による排除の対象を社会統合理念の根幹を成す世界観を象徴している男性土偶と考えた。
- 51) モエンジョ・ダローの居住開始とその立地については、[小茄子川 2016] が「無縁・商品交換・市場」、「中心性・集約性・創造性」と都市を定義するなかで、網野善彦の『無縁・公界・楽』の「無縁」の地にモエンジョ・ダローを創設したとしている。交易の市と無縁とを結びつけて西方交易の

掌握を目指したとする論旨は、本稿と一脈通じるところがあるが、「無縁」の用語理解に難がある。網野の「無縁」とは、その地域の領有者や公有者はいるものの、河川などの氾濫、分水嶺やがけ崩れなどで恒常的に一定の土地として認識されない場所、常でない場所を指す。境界が「無縁」とされるのも境界を接する双方の地域の領有権が移動したりして一定でない場所を指す。そうしたあいまいな場所が精神世界や世界観において人々の生活領域から離れた地＝「無縁」の地と認識されている。フランス社会史におけるアジュールの論も同様である。

引用・参考文献

- Algaze, G. 1996 *The Uruk World System: the Dynamics of Expansion of Early Mesopotamian Civilization*. Chicago and London: University of Chicago Press.
- Allchin, B. (ed.) 1984 *South Asian Archaeology 1981*. Cambridge: Cambridge Univ. Press.
- Allchin, F.R. and B. Allchin (eds.) 1997 *South Asian Archaeology 1995*. Cambridge and New Delhi: The Ancient India and Iran Trust Booklands House.
- Audouze, F. and C. Jarrige 1979 "A Third Millennium Pottery - Firing Structure at Mehrgarh and its Economic Implications", in Taddei (ed.) 1979: 213-221.
- Beck, H. C 1933 "Etched Carnelian Beads", *Antiquaries Journal*, XIII: 339-98.
- Besenal, R. 2000 "New Data for the Chronology of the Protohistory of Kech-Makran (Pakistan) from Miri-Qalat 1996 and Shahi-Tump 1997 Field Season", in Taddei and de Marco (eds.) 2000: 161-187.
- Bhan, S. 1975 *Excavation at Mitathal (1968) and other Explorations in the Sutlej-Yamuna Divide*. Kurukshetra: Kurukshetra Univ.
- Biscione, R. 1973 "Dynamics of an Early South Asian Urbanization: First Period of Shahr-i Sokhta and its Connections with Southern Turkmenia", in Hammond (ed.) 1973: 105-118.
- Biscione, R. 1990 "The Elusive Phase 2 of Shahr-i Sokhta", in Taddei (ed.) 1990: 391-409.
- Biscione, R. *et al.* 1974 "Archaeological Discoveries and Methodological Problems in the Excavations of Shahr-i Sokhta, Sistan", in Lohuizen-de Leeuw and Ubags (eds.) 1974: 12-52.
- Bulgarelli, G.M. 1979 "The Lithic Industry of Tepe Hissar at the Light of Recent Excavation", in Taddei (ed.) 1979: 35-54.
- Bulgarelli, G.M. 1981 "Turquoise Working in the Helmand Civilization - Some Observations", in Hätel (ed.) 1981: 65-70.
- Casal, J.-M. 1961 *Fouilles de Mundigak*. Paris: Librairie C. Klincksieck.
- Casal, J.-M. 1964 *Fouilles d'Amri*. Paris: Librairie C. Klincksieck.
- Casal, J.-M. 1979 "Amri: an Introduction to the History of the Indus Civilization", in Agrawal and Chakrabarti (eds.) 1979: 100-112.
- Casanova, M. 1992 "The Sources of the Lapis-Lazuli found in Iran", in Jarrige, C. (ed.) 1992: 49-52.

- Ceccarelli, A. and C.A. Petrie 2020 “Cultural Evolutionary and Paradigms and Technological Transformations from the Neolithic up to the Indus Urban Period in South Asia”, in Greaves and Hardy (eds) 2020: 3-20.
- Cortesi, E., M. Tosi, A. Lazzari and M. Vidale 2008 “Cultural Relationships beyond the Iranian Plateau: the Helmand Civilization, Baluchistan and the Indus Valley in the 3rd Millennium BCE”, *Paléorient*, 32 (2): 5-35.
- Dales, G. F. 1962a “Harappan Outposts on the Makran Coast”, *Antiquity*, 36: 86-92.
- Dales, G. F. 1962b “A Search for Ancient Seaport”, *Expedition*, 4 (2): 2-10.
- Dales, G. F. 1979 “The Balakot Project: Summary of Four Years Excavations in Pakistan”, *Man and Environment*, 3: 45-54.
- Dani, A. H. 1970-71 *Excavations in the Gomal Valley. Ancient Pakistan*, V.
- Delmas, A.B. and M. Casanova 1990 “The Lapis Lazuli Sources in the Ancient East”, in Taddei (ed.) 1990: 493-505.
- de Saizieu, B. and A. Bouquillon 1994 “Steatite Working at Mehrgarh during the Neolithic and Chalcolithic Periods: Quantitative and Distribution, Characterization of Material and Manufacturing Processes”, in Parpola and Koskikallio (eds.) 1994: 43-59.
- de Saizieu, B. and A. Bouquillon 1997 “Evolution of Glazed Materials from the Chalcolithic to the Indus Period based on the Data of Mehrgarh and Nausharo”, in Allchin and Allchin (eds.) 1997: 63-76.
- de Saizieu, B. and M. Casanova 1993 “Semi-Precious Stone Working at Mundigak: Carnelian and Lapis Lazuli”, in Gail and Mevissen (eds.) 1993: 17-30.
- Dupree, L. 1981 “Note on Shortugai: an Harappan Site in Northern Afghanistan”, in Dani (ed.) 1981: 103-116.
- Durrani, F.A. 1981a “Indus Civilization: Evidence of West Indus”, in Dani (ed.) 1981: 133-137.
- Durrani, F.A. 1988 *Excavations in the Gomal Valley. Rehman Dheri Excavation Report No. 1. Ancient Pakistan*, VI.
- Durrani, F.A., I. Ali and G. Erdosy 1994-95 “The Beads”, *Ancient Pakistan*, X:15-81.
- Earle, T. 1987 “Chiefdoms in Archaeological and Ethnohistorical Perspective”, *Annual Review of Anthropology*, 16: 279-308.
- Earle, T. (ed.) 1997 *Chiefdom: Power, Economy, and Ideology*. Cambridge: Cambridge Univ. Press.
- Ehrich, R. (ed.) 1992 *Chronologies in Old World Archaeology*, 3rd edition, Chicago and London: The Univ. of Chicago Press.
- Eltsov, P.A. 2008 *From Harappa to Hastinapura: a Study of the Earliest South Asian City and Civilization*. Boston and Leiden: Brill. (本書の要旨を手短にまとめたものとして Eltsov, P.A. 2009 “Power Circumscribed by Space: Attempting a New Model of the Ancient South Asian City”, *Linguistics, Archaeology and the Human Past, Occasional Paper* 9: 35-72. がある)
- Fairservis, W.A. 1956 “Excavations in the Quetta Valley, West Pakistan”, *Anthropological Papers of the American Museum of Natural History*, 45 (2): 169-402.
- Fairservis, W.A. 1959 “Archaeological Surveys in the Zhob and Loralai District, West Pakistan”, *Anthropological Papers of the American Museum of Natural History*, 47 (2): 277-448.
- Farid Khan 1979 “A Preliminary Report on the Microlithic Blade Industry from Rahman Dheri”, in Taddei (ed.) 1979: 375-408.
- Feinman, G.M. and J. Marcus (eds.) 1998 *Archaic States*. Santa Fe: School of American Research Press.
- Francfort, H.P. 1978-79 “About the Shortughai Sequence from Mature Harappan to Late Bactrian: Bronze Age in Eastern Bactria (N.E. Afghanistan)”, *Purātattva*, 10: 91-94.
- Francfort, H.P. 1983 “The Relationship between Urban Lowlands and Mountainous Areas in Protohistory as seen from Shortughai”, *Journal of Central Asia*, 8 (2):125-131.
- Francfort, H.P. 1984 “The Early Periods of Shortughai (Harappan) and the Western Bactrian Culture of Dashly”, in Allchin, B. (ed.) 1984: 170-175.
- Franke-Vogt, U. 1993 “The Harappans and the West: Some Reflections on Meluhha’s Relations to Magan, Dilmun and Mesopotamia” 『金沢大学考古学紀要』 20 : 72 ~ 101.
- Franke-Vogt, U. and V. Lefèvre (eds.) 2005 *South Asian Archaeology 2001*. Archen: Linden Soft.
- Franke-Vogt, U. and H.-J. Weisshaar (eds.) 2005 *South Asian Archaeology 2003*. Archen: Deutsches Archäologisches Institut.
- Frenez D. 2018 “Private Person or Public Persona? Use and Significance of Standard Indus Seals as Markers of Formal Socio-Economic Identities”, in Frenez, Jamison, Law, Vidale and Meadow (eds.) 2018: 166-193.
- Frenez, D. and M. Tosi (eds.) 2013 *South Asian Archaeology 2007*. Oxford: Hadrian Books.
- Frenez, D., G.M. Jamison, R.W. Law, M. Vidale and R.H. Meadow (eds.) 2018 *Walking with Unicorn, Social Organization and Material Culture in Ancient South Asia. Jonathan Mark Kenoyer Felicitation Volume*. ISMEO.
- Frifelt, K. and P. Sørensen (eds.) 1989 *South Asian Archaeology 1985*. Nordic Institute of Asian Studies Occasional Papers No.4, London.
- Fuller, D.Q. 2008 “The Spread of Textile Production and Textile Crops in India beyond the Harappan Zone: an Aspect of the Emergence of Craft Specialization and Systematic Trade”, in Osada and Uesugi (eds.) 2008: 1-26.
- Gadd, C.J. 1932 “Seals of Ancient Indian Style found at Ur”, *Proceedings of the British Academy, London*, 18:1-22.
- Gail, A.J. and G.J.R. Mevissen (eds.) 1993 *South Asian Archaeology 1991*. Stuttgart: Franz Steiner Verlag.
- Greaves, L.R. and Hardy, A. (eds) 2020 *Religions, Society, Trade and Kingship: Archaeology and Art in South Asia and along the Silk Road, 3500 BCE – 5th Century CE. South Asian Archaeology and Art 2016*, Volume 1. Delhi: Dev Publishers.
- Green, A.S. 2020 “Killing the Priest-King: Addressing Egalitarianism in the Indus Civilization”, *Journal of Archaeological Research*, 16 September.

- Gupta, S.P. 1979 "Baluchistan and Afghanistan: Refuge Area or Nuclear Area", in Agrawal and Chakrabarti (eds.) 1979: 9-15.
- Gwinnett, A. J. and L. Gerelick 1979 "Ancient Lapidary - a Study using Scanning Electron Microscopy and Functional Analysis", *Expedition*, 22(1): 17-32.
- Gwinnett, A. J. and L. Gerelick 1981 "Bead Making in Iran in the Early Bronze Age - derived by Scanning Electron Microscopy", *Expedition*, 24(1): 10-23.
- Halim, M. R. 1970-71 "Excavations at Sarai Khola Part I", *Pakistan Archaeology*, 7: 23-89.
- Halim, M. R. 1972 "Excavations at Sarai Khola Part II", *Pakistan Archaeology*, 8: 1-112.
- Hammond, N. (ed.) 1973 *South Asian Archaeology 1971*. London: Gerald Duckworth.
- Hätel, H. (ed.) 1981 *South Asian Archaeology 1979*. Berlin: Dietrich Reimer Verlag.
- Isbell, W. and K. Schreiber 1978 "Was Huari a State?" *American Antiquity*, 43(3): 372-388.
- Jacobson, J. 1986 "The Harappan Civilization: an Early State", in Jacobson (ed.) 1986: 137-173.
- Jacobson, J. (ed.) 1986 *Studies in the Archaeology of India and Pakistan*. New Delhi: Oxford and IBH Press.
- Jamison, G.M. 2016 "Seal Production in the Indus Civilization: a Comparative Analysis of Regional Carving Tradition", in Widorn, Franke-Vogt, and Latschenberger (eds.) 2016: 79-89.
- Jamison, G.M. 2018 "The Organization of Indus Unicorn Seal Production, a Multi-faceted Investigation of Technology, Skill, and Style", in Frenez, Jamison, Law, Vidale and Meadow (eds.) 2018: 272-291.
- Jansen, M. 1986 "Moenjo-daro HR-A, House I, a Temple? Analysis of an Architectural Structure", in Schotsmans and Taddei (eds.) 1986: 157-206.
- Jansen, M. 1987 "Preliminary Results on the "forma urbis" Research at Moenjo-daro", in Jansen and Urban (eds.) 1987: 9-22.
- Jansen, M., M. Mulloy and G. Urban (eds.) 1987 *Forgotten Cities on the Indus - Early Civilisation in Pakistan from the 8th to the 2nd Millennium BC*. Mainz: Verlag Philipp von Zabern.
- Jarrige, C. 1994 "The Mature Indus phase at Nausharo as seen from a Block of Period III", in Parpola and Koskikallio (eds.) 1994: 281-294.
- Jarrige, C. 2000 "The Mature Indus Phase at Nausharo: Elements of Urban Infrastructure", in Taddei and de Marco (eds.) 2000: 237-258.
- Jarrige, C. (ed.) 1992 *South Asian Archaeology 1989*. Monographs in World Archaeology 14. Madison: Prehistory Press.
- Jarrige, C. and V. Lefèvre (eds.) 2005 *South Asian Archaeology 2001*. Paris: Reserche sur les Civilisation.
- Jarrige, C. and M. Tosi 1981 "The Natural Resources of Mundigak - Some Observations on the Location of the Site in Relation to its Economical Space", in Hätel (ed.) 1981: 115-142.
- Jarrige, J.-F. 1981 "Economy and Society in the Early Chalcolithic/Bronze Age of Baluchistan: New Perspectives from Recent Excavation at Mehrgarh", in Hätel (ed.) 1981: 93-114.
- Jarrige, J.-F. 1986 "Excavations at Mehrgarh - Nausharo", *Pakistan Archaeology*, 10-22: 63-131.
- Jarrige, J.-F. 1989 "Excavation at Nausharo 1987-88", *Pakistan Archaeology*, 24: 21-67.
- Jarrige, J.-F. 2000 "Mehrgarh Neolithic: New Excavations", in Taddei and de Marco (eds.) 2000: 259-283.
- Jarrige, J.-F. et al. (eds.) 1995 *Mehrgarh, Field Reports 1974-85 from Neolithic Times to the Indus Civilization*. Karachi: The Department of Culture and Tourism, Government of Sindh, Pakistan.
- Jarrige, J.-F. et M. Lechevallier 1980 "Les Fouilles de Mehrgarh, Pakistan: Problèmes Chronologiques", *Paléorient*, 6: 253-280.
- Kamada, H. 1990 "Chronological Change of Designs on the Harappan Painted Pottery in Sind", *Bulletin of the Ancient Orient Museum*, 11: 171-185. Tokyo.
- Kanungo, A.K. (ed.) *Stone Beads of South and Southeast Asia: Archaeology, Ethnography and Global Connections*. Gandhinagar, Indian Institute of Technology; Aryan Books.
- Kenoyer, J.M. 1991 "Urban Process in the Indus Tradition: a Preliminary Model from Harappa", in Meadow (ed.) 1991: 29-60.
- Kenoyer, J.M. 1992 "Harappan Craft Specialization and the Question of Urban Segregation and Stratification", *The Eastern Anthropologist*, 45(1-2) (Indus Civilization Special Number): 485-519.
- Kenoyer, J.M. 1997 "Trade and Technology of the Indus Valley: New Insights from Harappa, Pakistan", *World Archaeology*, 29 (2): 262-280.
- Kenoyer, J.M. 2001 "Early Developments of Arts, Symbol and Technology in the Indus Valley Tradition" 『インド考古研究』 22 : 1-18.
- Kenoyer, J.M. (ed.) 1989 *Old Problems and New Perspectives in the Archaeology of South Asia*. Wisconsin Archaeological Report Vol. 2. Univ. of Wisconsin.
- Kenoyer, J.M. and D. Frenez 2018 "Stone Beads in Oman during the 3rd to 2nd Millennia BCE: New Approaches to the Study of Trade and Technology", *BEADS: Journal of the Society of Bead Researchers*, 30: 63-76.
- Kenoyer, J.M. and R.W. Law 2009 "Dholavira Stone and Artifact Documentation and Analysis: Interim Report", *DHR Interim Report*.
- Kenoyer, J.M. and R.H. Meadow 2000 "The Ravi Phase: a New Cultural Manifestation at Harappa", in Taddei and de Marco (eds.) 2000: 55-76.
- Kenoyer, J. M. and M. Vidale 1993 "A New Look at Stone Drill of the Indus Valley Tradition", in Vandiver, Druzick, Wheeler and Freestone (eds.) 1993: 495-518.
- Kenoyer, J.M., M. Vidale and K.K. Bhan 1991 "Contemporary Stone Beadmaking in Khambhat, India: Patterns of Craft Specialization and Organization of Production as reflected in the Archaeological Record", *World Archaeology*, 23(1): 45-63.
- Kondo, H., Y. Hojo, M. Koiso, A. Noguchi, H. Noguchi and A. Uesugi

- 2006 "A Reconsideration of the Kot Diji Culture in the Gomal Plain: Preliminary Report of the First Season 2004-05", *Ancient Pakistan* XVII: 1-8.
- Kristiansen, K. 1991 "Chieftdoms, States, and Systems of Social Evolution", in Earle (ed.) 1997: 16-43.
- Kureshy, K.U. 1977 *A Geography of Pakistan*. Karachi: Oxford Univ. Press.
- Lamberg-Karlovsky, C.C., B. Genito and B. Cerasetti (eds.) 2014 *My Life is Like the Summer Rose: Maurizio Tosi e l'archeologia come modo di vita*. BAR International Series 2690.
- Law, R.W. 2002 "Potential Steatite Source for the Indus Civilization", in Halim, M.A., A. Ghafoor (eds.) *Indus Civilization. Dialogue among Civilizations*: 158-167. Islamabad: Ministry of Minorities, Culture, Sports, Tourism and Youth Affairs.
- Law, R.W. 2005a "A Diachronic Examination of Lithic Exchange Networks during the Urban Transformation of Harappa", in Franke-Vogt and Weisshaar (eds.) 2005: 111-121.
- Law, R.W. 2005b "Regional Interaction in the Prehistoric Indus Valley: Initial Results of Rock and Mineral Sourcing Studies at Harappa", in Jarrige, C. and Lefèvre (eds.) 2005: 179-190.
- Law, R.W. 2006 "Moving Mountains: the Trade and Transport of Rocks and Minerals within the Greater Indus Valley Region", in Robertson, E.C., J.D. Seibert, D.C. Fernandez and M.U. Zender (eds.) 2006 *Space and Spatial analysis in Archaeology*: 301-313.
- Law, R.W. 2011 *Inter-Regional Interaction and Urbanism in the Ancient Indus valley: a Geological Provenience Study of Harappa's Rock and Mineral Assemblage*. Occasional Paper II Linguistics, Archaeology and the Human Past. Indus Project, Research Institute for Humanity and Nature, Kyoto, Japan.
- Law, R.W. 2014 "Evaluating Potential Lapis Lazuli Sources for Ancient South Asia using Sulfur Isotope Analysis", in Lamberg-Karlovsky, Genito and Cerasetti (eds.) 2014: 419-429.
- Law, R.W. and R.H. Baqri 2003 "Black Chert Source Identified at Nammal Gorge, Salt Range", *Ancient Pakistan* XIV: 34-40.
- Law, R.W., R.H. Baqri, K. Mohamood and M. Khan 2005 "First Result of a Neutron Activation Study comparing Rohri Hills Chert to other Chert Sources in Pakistan and Archaeological Samples from Harappa", *Ancient Sindh* 7: 7-25.
- Law, R.W. and J.H. Burton 2006a "A Technique for Determining the Provenience of Harappan Banded Limestone "Ringstone" using ICP-AES", *Proceedings of the 34th International Symposium on Archaeometry, Zaragoza*: 308-314.
- Law, R.W. and J.H. Burton 2006b "Non-destructive Pb Isotope Analysis of Harappan Lead Artifacts using Ethylenediaminetetraacetic Acid and ICP-MS. (Practically)", *Proceedings of the 34th International Symposium on Archaeometry, Zaragoza*: 181-185.
- Law, R.W. and J.H. Burton 2008 "Non destructive Pb Isotope Sampling and Analysis of Archaeological Silver using EDTA and ICP-MS", *American Laboratory*, september.
- Law, R., A. Carter, K. Bhan, A. Malik and M. Glascock 2013 "INAA of Agate Sources and Artifacts from the Indus, Helmand, and Thailand Regions", in Frenez and Tosi (eds.) 2013: 177-184.
- Lechevallier, M. 1978 "L'industrie Lithique de Mehrgarh (Pakistan)", *Paléorient*, 4:307-318.
- Lechevallier, M. 1979 "L'industrie Lithique d'Amri, Pakistan", *Paléorient*, 5: 281-295.
- Lechevallier, M. 1980 "Les Armatures de Faucilles de Mehrgarh, Pakistan. Un Exemple d'évolution d'un Outillage Spécialisé du VIe Millénaire au Milieu de IIIe Millénaire", *Paléorient*, 6: 259-267.
- Lechevallier, M. 1984 "The Flint Industry of Mehrgarh", in Allchin, B. (ed.) 1984: 41-51.
- Lechevallier, M. 1995 "Mehrgarh - Nausharo - le Débitage par Pression du Néolithique à l'Age du Bronze" 『東京都埋蔵文化財センター研究論集』 14 : 127-138.
- Lechevallier, M. and G. Quivron 1981 "The Neolithic in Baluchistan: New Evidences from Mehrgarh", in Hätel (ed.) 1981: 71-92.
- Lefèvre, V., A. Didier and B. Mutin (eds.) 2015 *South Asian Archaeology and Art 2012, Vol. 1 Man and environment in Prehistoric and Protohistoric South Asia: New Perspectives*. Belgium: Brepols.
- Lohuizen-de Leeuw, van J.E. (ed.) 1979 *South Asian Archaeology 1975*. Leiden: Brill.
- Lohuizen-de Leeuw, van J.E. and J.M.M. Ubags (eds.) 1974 *South Asian Archaeology 1973*. Leiden: Brill.
- Lorenz, R. 2019 "Weight Metrology in the Harappan Civilization", *South Asian Archaeology and Art 2014*, 77-96.
- Mackay, E.J.H. 1925 "Sumerian Connections with Ancient India", *Journal of the Royal Asiatic Society of Great Britain and Ireland*, 57 (4): 697-701.
- Mackay, E.J.H. 1931 "Further Links between Ancient Sind, Sumer and Elsewhere", *Antiquity*, 5: 459-473.
- Mackay, E.J.H. 1933 "Decorated Carnelian Bead", *Man*, 33: 143-146.
- Mackay, E.J.H. 1937 "Beads Making in Ancient Sind", *Journal of the American Oriental Society*, 57: 1-15.
- Mackay, E.J.H. 1943 *Chanhudaro Excavations 1935-36*. American Oriental Series 20. American Oriental Society. New Haven. Connecticut. (rep. 1967 New York: Kraus Reprint Corporation).
- Meadow, R.H. 1982 "From Hunting to Herding in Prehistoric Baluchistan", in Pastner and Flam (eds.) 1982: 145-153.
- Meadow, R.H. 1989 "Continuity and Change in the Agriculture of the Greater Indus Valley: the Palaeoethnobotanical and Zooarchaeological Evidence", in Kenoyer (ed.) 1989: 61-74.
- Meadow, R.H. (ed.) 1991 *Harappa Excavations 1986-90. a Multidisciplinary Approach to Third Millennium Urbanism*. Monographs in World Archaeology No. 3. Madison.
- Meadow, R.H. and J.M. Kenoyer 1994 "Harappa Excavations 1993: The City Wall and Inscribed Materials", in Parpola and Koskikallio (eds.) 1994: 452-470.
- Meadow, R.H., J.M. Kenoyer and R. Wright (eds.) 1996 *Harappan Archaeological Research Project, Harappa Excavations 1996*. Karachi: Gov. of Pakistan.

- Miller, H.M.-L. 2000 "Reassessing the Urban Structure of Harappa: Evidence from Craft Production Distribution", in Taddei. and de Marco (eds.) 2000: 77-100.
- Miller, H.M.-L. 2006 "Water Supply, Labor Requirements, and Land Ownership in Indus Floodplain Agricultural System", in Stanish and Marcus (eds.) 2006: 92-128.
- Mughal, M.R. 1970 *The Early Harappan Period in the Greater Indus Valley and Northern Baluchistan (c.3000-2400 B.C.)*. Ph.D. Dissertation, Department of Anthropology, University of Pennsylvania, Philadelphia. Univ. Microfilms International. Michigan: Ann Arbor.
- Mughal, M.R. 1972 "A Summary of Excavations and Explorations in Pakistan", *Pakistan Archaeology*, 8: 112-158.
- Mughal, M.R. 1974 "New Evidence of the Early Harappan Culture from Jalilpur, Pakistan", *Archaeology*, 27 (2): 106-113.
- Myrdal, E. (ed.) 2020 *South Asian Archaeology and Art 2014*. New Delhi: Dev Publishers and Distributors.
- Organization for Surveying and Cartography GEOKART (ed.) 1984 *National Atlas of the Democratic Republic of Afghanistan*. Warsaw: Fair Drawing and Printing.
- Osada, T. and A. Uesugi (eds.) 2008 *Occasional Paper 3: Linguistics, Archaeology and the Human Past*. Kyoto: Indus Project, Reserch Institute for Humanity and Nature.
- Osada, T. and M. Witzel (eds.) 2011 *Cultural Relations between the Indus and the Iranian Plateau during the Third Millennium BCE*. Harvard Oriental Series Opera Minora Vol. 7
- Parpola, A. and P. Koskikallio (eds.) 1994 *South Asian Archaeology 1993*. 2 Vols. Helsinki: Academia Scientiarum Fennica.
- Parikh, D. and C. A. Petrie 2019 'We are Inheritors of an Rural Civilisation': Rural Complexity and the Ceramic Economy in the Indus Civilisation in Northwest India, *World Archaeology* 51 (2): 252-272.
- Pastner, S. and L. Flam (eds.) 1982 *Anthropology in Pakistan*. Karachi: Indus Publication.
- Peter, J., R. Tringham and G.W. Dimbleby (eds.) 1972 *Man, Settlement, and Urbanism*. London: Duckworth.
- Petrie, C.A. (ed.) 2013 *Ancient Iran and Its Neighbours - Local Developments and Long-range Interactions in the Fourth Millennium BC*. British Institute of Persian Studies Archaeological Monographs Series III, Oxford: Oxbow Books.
- Petrie, C. A. 2019 "Diversity, Variability, Adaptation and 'Fragility' in the Indus Civilization", in Yoffee (ed.) 2019: 109-133.
- Piperno, M. 1973a "Micro-Drilling at Shahr-i Sokhta: the Making and Use of Lithic Drill-Head", in Hammond (ed.) 1973: 119-129.
- Piperno, M. 1973b "The Lithic Industry of Tepe Yahya: a Preliminary; Typological Analysis", *East and West*, 23 (1-2): 59-74.
- Piperno, M. 1976 "Grave 77 at Shahr-i Sokhta: Evidence of Technological Specialization 3rd Millennium B.C.", *East and West*, 26 (1-2): 9-12.
- Possehl, G.L. 1998 "Sociocultural Complexity without the State: the Indus Civilization", in Feinman and Marcus (eds.) 1998: 261-291.
- Possehl, G.L. (ed.) 1992a *Harappan Civilization: a Contemporary Perspective*. New Delhi: Oxford and IBH Publishing Co.
- Possehl, G. L. (ed.) 1992b *South Asian Archaeological Studies*. New Delhi: Oxford IBH Publishing Co.
- Prabhakar, V.N. 2015 "Analysis of the Ernestite Stone Drills from Dholavira Excavations", in Lefèvre, Didier and Mutin (eds.) 2015, 257-270.
- Prabhakar, V.V. 2018 "Decorated Carnelian Beads from the Indus Civilization Site fo Dholavira (Great Rann of Kachchha, Gujarat)", in Frenez, Jamison, Law, Vidale and Meadow. (eds.) 2018: 475-485.
- Prabhakar, V.N., R.S. Bisht, R.W. Law and J.M. Kenoyer 2012 "Stone Drills from Dholavira - a Multi-faceted Analysis", *Man and Environment*, 37(1): 8-25.
- Pracchia, S. 1985 "Excavations of a Bronze-Age Ceramic Manufacturing Area at Lal Shah, Mehrgarh", *East and West*, 35 (4): 458-468.
- Pracchia, S., M. Tosi and M. Vidale 1985 "On the Type, Distribution and Extent of Craft Industries at Moenjodaro", in Schotsmans and Taddei (eds.) 1985: 207-247.
- Quivron, G. 1980 "Les Marques incisés sur les Potries de Mehrgarh au Baluchistan, du Milieu du 4e Millénaire a la Première moitié du 3e Millénaire", *Paréorient*, 6: 269-280.
- Quivron, G. 1994 "The pottery Sequence from 2700 to 2400 BC at Nausharo, Baluchistan", in Parpola and Koskikallio (eds.) 1994: II : 629-644.
- Rao, S. R. 1956-57 "The Excavations at Lothal", *Larit Kalā*, 3-4: 82-85.
- Rao, S. R. 1962 "Further Excavations at Lothal", *Larit Kalā*, 11: 14-30.
- Rao, S. R. 1973 *Lothal and the Indus Civilization*. London: Asia Publishing House.
- Rao, S. R. 1979 *Lothal - a Harappan Port Town - 1955-62. Vol. 1. Memoir of the Archaeological Survey of India*, 78. New Delhi: ASI.
- Rao, S.R. 1985 *Lothal - a Harappan Port Town - 1955-62. Vol. 2. Memoir of the Archaeological Survey of India*, 78. New Delhi: ASI.
- Ratnagar, S. 2004 *Trading Encounter*. Karachi: Oxford Univ. Press.
- Raven, E. M. (ed.) 2008 *South Asian Archaeology 1999*. Groningen: Egbert Forsten.
- Read, J.E. 1979 *Early Etched Beads and the Indus-Mesopotamia Trade*. British Museum, Dept. of Western Asiatic Antiquities No. 1.
- Renfrew, C. 1975 "Trade as Action at a Distance: Questions of Integration and Communication", in Sabloff and Lamberg-Karlovsky (eds.) 1975: 3-59.
- Renfrew, C. 1986 "Introduction: Peer Polity Interaction and Social-Political Change", in Renfrew and Cherry (eds.) 1986: 1-18.
- Renfrew, C. and J. Cherry (eds.) 1986 *Peer Polity Interaction and Socio-Political Change*. Cambridge: Cambridge Univ. Press.
- Roux V., B.B. Bril and G. Dietrich 1995 "Skills and Learning

- Difficulties involved in Stone Knapping: the Case of Stone-Bead Knapping in Khambhat, India”, *World Archaeology*, 27 (1): 63-87.
- Schotsmans, J. and M. Taddei (eds.) 1985 *South Asian Archaeology 1983*. 2Vols. Naples: Istituto Universitario Orientale.
- Shaffer, J.G. 1982 “Harappan Commerce: an Alternative Perspective”, in Pastner and Flam (eds.) 1982: 166-210.
- Shaffer, J.G. 1992a “Harappan Culture: a Reconsideration”, in Possehl (ed.) 1992a: 41-50.
- Shaffer, J. G. 1992b “The Indus Valley, Baluchistan and Helmand Traditions: Neolithic through Bronze Age”, in Ehrich, R. (ed.) 1992: 441-464.
- Shudai, H. 1997 “Searching for the Early Harappan Culture - Analysis of the Pottery Styles of Pre-Harappan Cultures”, *Indo Kōko Kenkyū*, 18: 40-51.
- Shudai, H. 2003 “Pre-Harappans and the Indus Civilization: Relationships in Trade”, *Ancient Sindh*, 7: 79-83. Shah Abdul Latif Univ.
- Shudai, H. 2010 “Kulli Pottery and Its Meanings in South Asian Prehistory”, *Indo Kōko Kenkyū*, 31: 56-68.
- Shudai, H. 2016 “Chronology of the Neolithic Culture in Balochistan”, *The Bulletin of Tsurumi Univ.*, 53: 59-68.
- Shudai, H., A. Yoneyama, F. Shudai, A. Konasukawa, S. Kimura and H. Endo 2015 “Report on the Survey of the Archaeological Materials of Prehistoric Pakistan, stored in Aichi Prefectural Ceramic Museum. Part 6: Human Figurines and Some Remarks on the Social Development in the Prehistoric Balochistan”, *The Bulletin of Tsurumi Univ.*, 52: 7-29.
- Singh, K. 1994 *Textiles in Ancient India*. Varanashi: Vishwa Vidyalyaya Prakashan.
- Stanish, C. and J. Marcus (eds.) 2006 *Agriculture and Irrigation in Archaeology*. Los Angeles: Costen Institute of Archaeology Press.
- Survey of Pakistan 1986 *Atlas of Pakistan*. Islamabad: Gov. of Pakistan.
- Taddei, M. (ed.) 1979 *South Asian Archaeology 1977*. 2Vols. Naples: Istituto Universitario Orientale.
- Taddei, M. (ed.) 1990 *South Asian Archaeology 1987*. 2Vols. Rome: Istituto Italiano per il Medio ed Estremo Oriente.
- Taddei, M. and G. de Marco (eds.) 2000 *South Asian Archaeology 1997*. 3Vols. Rome: Istituto Italiano per L’Africa e L’Oriente.
- Thomas, K.D., J.R. Knox and Farid Khan 1997 “Technology Transfer and Culture Change: a Example from Northwest Pakistan”, in Allchin and Allchin (eds.) 1997: 237-251.
- Tosi, M. 1968 “Excavations at Shahr-i Sokhta, a Chalcolithic Settlement in the Iranian Sistan. Preliminary Report on the First Campaign, October-December 1967”, *East and West*, 18 (1-2): 9-66.
- Tosi, M. 1969 “Excavations at Shahr-i Sokhta. Preliminary Report on the Second Campaign, September-December 1968”, *East and West*, 19 (3-4): 283-386.
- Tosi, M. 1979 “The Proto-Urban Cultures of Eastern Iran and the Indus Civilization. Note and Suggestions for a Spatio-Temporal Frame to study the Early Relations between India and Iran”, in Taddei (ed.) 1979: 149-171.
- Trigger, B. 1972 “Determinants of Urban Growth in Pre-Industrial Societies”, in Peter, Tringham and Dimpleby (eds.) 1972: 575-599.
- Trivedi, R.K. 1964 *Agate Industry of Cambay*. Census of India 1961, Vol. V, Pt. VII-A (1), Selected Crafts of Gujarat. Delhi: the Manager of Publication.
- Uesugi, A. 2008 “Cultural Interactions between the Indus and the Iranian Plateau”, *International Conference on Cultural Relationships between the Indus and the Iranian Plateau during the Third Millennium BCE*: 20-24. Kyoto: Research Institute for Humanity and Nature.
- Uesugi, A. (ed.) 2018 *Current Research on Indus Archaeology*. Research Group for South Asian Archaeology. Archaeological Research Institute, Kansai University.
- Uesugi, A., M. Kumar and V. Dangi 2018 “Indus Stone Beads in the Ghaggar Plain with a Focus on the Evidence from Farmana and Mitathal”, in Frenez, Jamison, Law, Vidale and Meadow (eds.) 2018: 568-591.
- Vandiver, P., J.R. Druzick, G.S. Wheeler and L. Freestone (eds.) 1993 *Materials Issues in Art and Archaeology*, 3. Pittsburg: Materials Research Society.
- Vanzetti, A. and M. Vidale 1994 “Formation Processes of Beads: Defining Different Levels of Craft Skill among the Early Beadmakers of Mehrgarh”, in Parpola and Koskikallio (eds.) 1994: 763-776.
- Vidale, M. 1987 “Some Aspects of Lapidary Craft at Moenjodaro in the Light of the Surface Record of the Moneer South East Area”, in Jansen, Mulloy and Urban (eds.) 1987: 113-149.
- Vidale, M. 2000 *The Archaeology of Indus Crafts: Indus Craftspeople and Why We study Them*. ISIAO - Rome.
- Vidale, M. 2018 “A ‘Priest King’ at Shahr-i Sokhta?”, *Archaeological Research in Asia*, 15: 110-115.
- Vidale, M. and F. Desset 2013 “Mahtoutabad I (Konar Sandal South, Jiroft): Preliminary Evidence of Occupation of a Halil Rud site in the Early fourth Millennium BC”, in Petrie (ed.) 2013: 233-251.
- Vidale, M., J. M. Kenoyer and K. K. Bhan 1993 “Ethnoarchaeological Excavations of the Bead Making Workshops of Khambhat: a View from Beneath the Floors”, in Gail and Mevissen (eds.) 1993: 273-287.
- Vidale, M. and Lazzari (eds.) 2017 *Lapis Lazuli Bead Making at Shahr-i Sokhta*. ISMEO.
- Vidale, M., M. Mariottini, G. Sidoti and M. Zahir 2017 “Early Evidence of Bead-Making at Mehrgarh, Pakistan: a Tribute to the Scientific Curiosity of Catherine and Jean-Francois Jarrige”, in Kanungo (ed.) 2017: 233-254.
- Widorn, V., U. Franke-Vogt, and P. Latschenberger (eds.) 2016 *South Asian Archaeology and Art 2010*. Tunhout: Brepols.
- Wright, R.P. 1978 “Perspectives from the Indus: Contexts of interaction in the Late Harappan/Post-Urban Period”, in Potts, Hellyer (eds.) 1978: 102-111.
- Wright, R.P. 1995 “Fine Ware Traditions at Mehrgarh”, in Jarrige, J.-F.

- et al. (eds.) 1995: 662-671.
- Wright, R.P. 2016 “Konar Sandal South, Nindowari, and Lakhan Jo Daro - beyond the Limits of a known World”, in Widorn, Franke-Vogt and Latschenberger (eds) 2016: 25-35.
- Wright, H. and G. Johnson 1975 “Population, Exchange, and Early State: Formation in Southwestern Iran”, *American Anthropologist*, 77: 267-284.
- 阿部謹也、網野善彦、石井進、樺山紘一 1981『中世の風景 上下』中公新書.
- 網野善彦 1996『増補 無縁・公界・楽』平凡社.
- 岩崎卓也・常木 晃 2008「総論：国家形成の考古学」岩崎・常木（編）2008、1-32.
- 岩崎卓也・常木 晃（編）2008『国家形成の考古学』現代の考古学7、朝倉書店.
- ウォーラステイン、I.（川北稔訳）1981『近代世界システム I・II - 農業資本主義とヨーロッパ世界経済の成立』岩波書店.
- 上杉彰紀 2008a「バローチスターン高原における人物土偶に関する覚書 - 岡山市立オリエント美術館の資料紹介を兼ねて」『岡山市立オリエント美術館研究紀要』22: 1-28.
- 上杉彰紀 2008b「インダス文明社会の成立と展開 - 地域間交流の視点から」『古代文化』60 (2): 111-120.
- 上杉彰紀 2012「先インダス文明期とインダス文明期における凍石印章の製作技術とその変遷に関する考古学的研究」『日本オリエント学会第54回公開講演・研究発表要旨集』、52.
- 上杉彰紀 2015「インダス文明期の石製装身具研究の現状と展望」『西アジア考古学』16: 13-29.
- 上杉彰紀 2020「インダス考古学の現状と課題」『西アジア考古学』21: 61-80.
- 上杉彰紀・小茄子川歩 2008「インダス文明社会の成立と展開に関する一考察」『西アジア考古学』9: 101-118.
- 宇野隆夫 2008「インダス文明の都市と王権」今谷（編）『王権と都市』143-169、思文閣出版.
- 鎌田博子 2000「インダス文明の起源 - モエンジョ・ダロ下層併行期の性格」『考古学雑誌』85 (3): 37-59.
- 小磯 学 2008a「インダス文明の腐食加工紅玉髓製ビーズと交易活動」『古代文化』60 (2): 95-110.
- 小磯 学 2008b「カーンメール遺跡出土の紅玉髓製ビーズとペンダント」『大学共同利用機関法人 人間文化研究機構 総合地球環境学研究所プロジェクト 環境変化とインダス文明 2007 年度成果報告書』73-82.
- 小泉龍人 2002「ウルク・ワールド・システムとは何か」『西アジア考古学』3: 47-49.
- 後藤 健 1997「アラビア湾岸における古代文明の成立」『東京国立博物館紀要』32: 11-44.
- 後藤 健 1999「遺物の中の異物 - インダス文明の遺物から」『考古学雑誌』84 (4): 70-88.
- 小茄子川 歩 2008a「コート・ディジー式土器とハラッパー式土器 - ハラッパー式土器の起源に関する一考察」『古代文化』60 (2): 70-83.
- 小茄子川 歩 2008b「『都市』と『伝統』の創出 - 彩文土器の変容からみたインダス文明の成立と展開」『考古学研究』55 (1): 47-67.
- 小茄子川 歩 2016『インダス文明の社会構造と都市の原理』同成社.
- 小西正捷 1970「インダス文明の興亡に関する気候学的水利学的知見 1～4」『水利科学』72: 71-90; 74: 121-140; 75: 78-94.
- 小西正捷 1983「ロータルの玉作工房址 - インド・グジャラート地方における攻玉技術の伝統」『展望アジアの考古学』608-618. 新潮社.
- 近藤英夫 2008「インダス都市の成立をめぐる諸問題」『古代文化』60 (2): 62-69.
- 近藤英夫 2011『インダスの考古学』同成社.
- 近藤英夫・上杉彰紀 1999『南アジア考古学の歴史』東海大学文学部考古学科近藤研究室.
- サーヴィス、E.（松園万亀雄 訳）1979『未開の社会組織 - 進化論的考察』弘文堂.
- 宗基秀明 1984「石器より見たるハラッパー文化の形成」『インド考古研究』7: 3-34.
- 宗基秀明 1990「ラフマーン・デーリ遺跡出土石器群の性格 - 刃器を中心として」『インド考古研究』13: 1-22.
- 宗基秀明 1997「バローチスターン農耕文化とその展開」『物質文化』62: 1-21.
- 宗基秀明 1998a「ラフマーン・デーリ遺跡とコート・ディジー文化」『考古学雑誌』83 (4): 20-42.
- 宗基秀明 1998b「先史パーキスターンの玉作工程と技法 - ラフマーンデーリ遺跡出土のテラコッタとペースト製ビーズ玉を中心として」『網干善教先生古稀記念考古学論集』1459-1479.
- 宗基秀明 1999「インダス地域の編年と課題」『古代オリエントにおける都市形成とその展開 平成8～10年度科学研究費補助金成果報告書』39-46.
- 宗基秀明 2000「文明への長き歩み - インダス文明前史」『四大文明 インダス』193-203、NHK 出版.
- 宗基秀明 2002「バローチスターン初期農耕文化と交易 - 副葬品からみた交易と社会の階層化」『西アジア考古学』3: 21-32.
- 宗基秀明 2009「インダス文明の形成と交易の役割」『文化財学雑誌』5: 28-39. 鶴見大学文化財学会.
- 宗基秀明 2012「都市論議と古代文明形成研究 - インダス文明を例として」『文化財学雑誌』8: 31-38. 鶴見大学文化財学会.
- 宗基秀明 2016『南アジア先史文化人の心と社会を探る - 女性土偶から男性土偶へ：縄文・弥生土偶を参考に』比較文化研究ブックレット14、神奈川新聞社.
- 宗基秀明 2018「鎌倉出土かわらけの系譜と編年 - 東国社会の変質と中世の成立（前）：研究史と用語の定義」『鶴見大学紀要 第4部 人文・社会・自然科学編』55: 191-223.
- 宗基秀明 2019「鎌倉出土かわらけの系譜と編年 - 東国社会の変質と中世の成立（後）：かわらけの編年と中世社会」『鶴見大学紀要 第4部 人文・社会・自然科学編』56: 39-96.
- 竹内芳郎 1975『国家と文明』岩波書店.
- チャトーパーディヤーヤ、D.（佐藤 任訳）1992『古代インド

- の科学と技術の歴史Ⅰ』東方出版.
- 野口 淳 2008 「インダス文明形成過程の石器技術体系 - 石材資源開発と石器製作技術を中心に」『古代文化』60 (2): 84-94.
- 野島永・望月誠子ほか 2004 『市田斉当坊遺跡』京都府遺跡調査報告書第36冊. 京都府埋蔵文化財調査研究センター.
- ホークス, J. (小西正捷他訳) 1978『古代文明史 1・2』みすず書房.
- 堀 暁 1983 「南メソポタミア出土のマイクロ・ドリル」『オリエント学論集』533-551. 刀水書房.
- マンフォード, L. (生田勉訳) 1969『歴史の都市 明日の都市』新潮社.
- レンフルー, C., パーン, P. (池田裕・常木晃・三宅裕訳) 2007『考古学 - 理論・方法・実践』東洋書林.
- 山花京子 2005 「「ファイアンス」とは? - 定義と分類に関する現状と展望: エジプトとインダスを例として」『西アジア考古学』6: 123-134.